

草迷宮

泉鏡花



向うの小沢に蛇じやが立つて、

八幡長者はちまんの、おと娘、

よくも立ったり、巧んだり。

手には二本の珠たまを持ち、

足には黄金こがねの靴はを穿き、

ああよべ、こうよべと云いながら、

山くれ野くれ行つたれば……………

一

三浦の大崩壊おおくずれを、魔所まじよだと云う。

葉山一帯の海岸を屏風びやうぶで劃くぎった、桜山の裾すそが、見も馴なれぬ

けもの
獣のごとく、わだつみ洋へ躍込んだ、一方は長者園の浜で、ずし逗子から
森戸、葉山をかけて、夏向き海水浴の時分、ころ人死のあるのは、
この辺ではここが多い。

一夏はげし激い暑さに、雲の峰も焼いた霰あられのように小さく焦げて、
ぱちぱちと音がして、火の粉になつて覆こぼれそうな日盛ひざかりに、これ
から湧わいて出て人間になろうと思われる裸体はだかの男女が、入交いりまじ
りに波に浮んでいると、かつ赫とただ金銀銅鉄、真白まっしろに溶けた霄おおぞら
の、どこに亀裂ひびが入ったか、破鐘われがねのようなる声して、

「泳ぐもの、帰れ。」と叫んだ。

この呪詛のろいのために、浮べる輩やからはぶくりと沈んで、あたり四辺は白泡しらあわ
となつたと聞く。

また十七ばかり少年の、ろくまくえん肋膜炎を病んだ拳句が、保養にと
て来ていたが、おそろし可恐く身体からだを気にして、自分で病理学まで研

究して、0、^一などと調合する、朝夕^{ちようせき}検温氣で度を料^{はか}る、三度の食事^{はかり}も度量^{はかり}衡で食べるのが、秋の暮方、誰も居ない浪打際を、生白^{やせずね}い瘦脛^{たかはしより}の高端折^{はだし}、跣足^{はだし}でちよびちよび横歩^{ある}行きで、日課のごとき運動をしながら、つくづく不平らしく、海に向つて、高慢な舌打して、

「ああ、退屈だ。」

と^{つぶや}呟くと、頭上^{がけ}の崖^{どうなか}の洞中^{どうなか}から、異声を放つて、

「親孝行でもしろ——」と喚^{わめ}いた。

ために、その少年は太^{いた}く煩^{わづ}い附いたと云う。

そんなこんなで、そこが魔所^{まじよ}だの風説^{ふうせき}は、近頃一層甚しくなつて、知らず^{おおくずれ}に大崩壊^{のぼ}へ上るのを、土地の者が見着けると、百姓^{くわ}は鋤^{つえつ}を杖^{つえつ}支^しき、船頭^{みよし}は舳^{しり}に立つて、下りろ、危い、と声を懸ける。

實際魔所でなくとも、大崩壊の絶頂は葉研やげんを俯向けうつむに伏せ
たようまたで、跨ぐと鐙あぶみの無いばかり。馬の背に立つ巖いわ、狭く鋭
く、踵くびすから、爪先つまさきから、ずかり中窪なかくぼに削った断崖がけの、見下ろ
す麓ふもとの白浪に、揺落ゆりおとさるる思おもいがある。

さて一方は長者園なごのぞの渚しずへは、浦の波が、静しずに展ひらいて、忙せわし
くしかも長閑のどかに、鶏とりの羽はたく音がするのに、ただ切立きつたての
巖いわ一枚、一方は太平洋の大濤おきなみが、牛の吼ほゆるがごとき声して、
緩ゆるかにしかも凄すさまじく、うう、おお、と呻うなつて、三崎街道の外
浜うねに大畝うねりを打つのである。

右から左へ、わずかに瞳を動かすさえ、杜若かきつばた咲く八ツ橋と、
月の武蔵野ほどに趣が激変して、浦には白帆かもめの鷗かもめが舞い、沖
を黒煙くろけむりの竜はしが奔はしる。

これだけでも眩めくらめくばかりなるに、蹈ふむ足許あしもとは、岩つるぎのその剣

の刃を渡るよう。取^{とり}継^する松の枝の、海を分けて、種^{いろいろ}々の波の調^かべの懸^かるのも、人^あが継^あれば根^よが揺^よれて、攀^よ上^じつた喘^{あえ}ぎも留^やまぬに、汗^{あせ}を冷^{つめ}うする風^{かぜ}が絶^とえぬ。

さればとて、これ^こがた^ためにその景^{けい}勝^{しょう}を傷^{きず}けてはならぬ。大崩^{おおくずれ}壊^く

の巖^{いわ}の膚^{はだ}は、春^{はる}は紫^{むらさ}に、夏^{なつ}は緑^き、秋^{あき}紅^{こう}に、冬^{ふゆ}は黄^きに、藤^{ふじ}を編^あ

み、蔦^{つた}を絡^{まと}い、鼓^こ子^し花^{はな}も咲^ひき、竜^り胆^んも咲^どき、尾^お花^{はな}が靡^{なび}けば月^{つき}

も射^さす。い^いで、紺^{こん}青^{じやう}の波^{なみ}を踏^ふんで、水^{みづ}天^{てん}の間^まに糸^{いと}のごとき大^{おほ}

島^{しま}山^{やま}に飛^とばんず姿^{すがた}。巨^こ匠^{しやう}が鑿^のを施^せした、青^{せい}銅^{どう}の獅^し子^しの倂^{おも}か^げげあり。

その美^{うつく}しき花^{はな}の衣^えは、彼^{かれ}が威^い霊^{れい}を称^たえ^たる牡^ぼ丹^{たん}花^{はな}の飾^{かざり}に似^にて、

根^ねに寄^よる潮^{うしほ}の玉^{たま}を砕^{くだ}くは、日^ひに黄^こ金^{がね}、月^{つき}に白^{しろ}銀^{ぎん}、あ^あるいは怒^{いか}

り、あ^あるいは殺^{ころ}す、鋭^とき大^{おほ}自^じ在^{ざい}の爪^{つめ}か^かと見^みゆる。

修業中の小次郎法師が、諸国一見の途次、みちすがら相州三崎まわり

をして、あきや秋谷の海岸を通った時の事である。

件の大崩壊くだん おおくずれの海に突出でた、獅子王の腹を、太平洋の方か

ら一町ばかり前途ゆくてに見渡す、街道端ばたの——直ぐ崖の下へ白浪

が打寄せる——江の島と富士とを、簾すだれに透かして描いたよう

な、ちよつとした葭簣張よしずばりの茶店に休むと、媼うばが口の長い鉄葉

の湯沸ゆわかしから、渋茶を注いで、人皇何代にんのうの御時おんときかの箱根細工の

木地盆もりこぼに、装溢しょうぎれるばかりなのを差出した。

床几しょうぎの在処ありかも狭いから、今注いだので、引傾ひつかつたむいた、湯沸の

口を吹出す湯気は、むらむらと、法師の胸に靡なびいたが、それ

さえ颯さつと涼しい風で、冷い霧のかかるような、法衣ころもの袖は葭

簣を擦って、外の小松へ翻る。

さわやか

爽な心持に、道中の里程を書いた、名古屋扇も開くに及ばず、畳んだなり、肩をはずした振分けの小さな荷物の、白木綿の繋ぎめを、押遣つて、

「千両、」とがぶりと呑み、

「ああ、旨い、これは結構。」と莞爾して、

「おいしいついでに、何と、それも甘そうだね、二ツ三ツ取つて下さい。」

「はいはい、この団子でござりますか。これは貴方、田舎出来で、沢山甘くはござりませぬが、そのかわり、皮も餡子も、小米と小豆の生一本でござります。」

と小さな丸髻を、ほくほくもの、折敷の上へ小綺麗に取つてくれる。

扇子だけ床几に置いて、渋茶茶碗を持ったまま、一ツ撮も

うとした時であつた。

「ヒイ、ヒイヒイ！」と唐突に奇声を放つた、濁声の蝸一匹。

法師が入つた口とは対向い、大崩壊の方の床几のはずれに、

竹柱に留まつて前刻から——胸をはだけた、手織縞の汚れた

ひとえ

ゆる

単衣に、弛んだ帯、煮染めたような手拭をわがねた首から、頸

へかけて、耳を蔽うまで髪の伸びた、色の黒い、巖乗造りの、

おお

身の丈拔群なる和郎一人。目の光の晃々と冴えたに似ず、あ

きらきら

さ

がんじよう

んぐりと口を開けて、厚い下唇を垂れたのが、別に見るもの

みまわ

もない茶店の世帯を、きよろきよると胸していたのがあつて

——お百姓に、船頭殿は稼ぎ時、土方人足も働き盛り、日脚

の八ツさがりをその体は、いずれ界限の怠惰ものと見たばかり。

かいわい

なまけ

り。小次郎法師は、別に心にも留めなかつたが、不意の笑声

きつ

に一驚を吃して、和郎の顔と、折敷の団子を見較べた。

「串戲じようだんではない、お婆ばあさん、お前は見懸ひようきんけに寄らぬ剽輕ひようきんものだね。」

「何でござりますえ。」

「いいえさ、この団子は、こりや泥ねばつちか埴土こしらで製えたのじやないのかい。」

「滅相としよりなことをおつしやりまし。」

と年寄としよりは真顔になり、見上げ皺じわを沢山たんと寄せて、

「何を貴方わたし、勿体わしもない。私もはい法然ほうねん様拝みますものでござ

ります。吝嗇坊しわんぼうの柿の種しんぐが、小判小粒しんぐになればと云うて、御

出家に土の団子を差上げまして済むものでござりますかよ。」

まっしょうじき
真正直に言訳されて、小次郎法師はちと気の毒。

「何々、そう真に受けられては困ります。この涼しさに元氣げんきづいて、半分は冗戲じようだんだが、旅をすれば色々の事がある。駿州すんしゅう

の阿部川餅^{もち}は、そつくり正^{しやう}のものに木で拵^{こしら}えたのを、盆にのせて、看板に出してあると云います。今これを食べようとするのを見てその人が、

と其方^{そなた}を見た、和郎はきよとんと仰向^{あおもむ}いて、烏も居^おらぬに何じややら、頻^{しきり}に空を仰いでござる。

「唐突^{だしぬけ}に笑うから、ははあ、この団子も看板を取違えたのかと思つたんだよ。」

「ええ、ええ、いいえ、お前様、」

とこざつぱりした前かけの膝^{ひざ}を拍^{たた}き、近寄つて声を密^{ひそ}め、

「これは、もし氣ちがいでござりますよ。はい、」

と云つて、独りで媼^{うば}は頷^{うなず}いた。問わせたまわば、その仔細^{しさい}の儀は承知の趣。

小次郎法師は、掛茶屋かけじややの庇ひさしから、天へ蝙蝠こうもりを吹出しそうに仰向あおむいた、和郎わろの面つらを斜ななめに見遣やつて、

「そう、氣違おかしいかい。私はまた唾おとしでもあろうかと思つた、立派な若い人が氣の毒な。」

「お前様ね、一ツは心柄でござりますすよ。」

媼うばは、罪と報むくいを、且つ悟り且つあきらめたようなものいい。

「何か憑物つきものでもしたというのか、暮し向きの屈託くつたつとでもいう事か。」

と言いい懸かけて、渋茶にまた舌打しかしながら、円い茶の子を口の端はたへ持つて行ゆくと、さあらぬ方かたを見ていながら天眼通でもある事か、逸疾いちはやくぎろりと見附けて、

「やあ、石を嚙かじりやあがる。」

小次郎再び化転けてんして、

「あんな事を云うよ、お婆さん。」

「悪い餓鬼じゃ。嘉吉かきちや、主ぬしあ、もうあつちへ行ゆかつしやいよ。」

その本体はかえつて差措さしおき、砂地に這はつた、朦朧もうろうとした影に向つて、窘たしなめるように言つた。

潮は光るが、空は折から薄曇りである。

法師もこれあるがために暗いような、和郎の影法師を伏目に見て、

「一ツ分けてやりましょうかね。団子が欲しいのかも知れん、それだと思いが可恐おそろしい。ほんとうに石にでもなると大変。」
「食気くいけの狂人きちがいではござりませんに、御無用になさりまし。」

石じゃ、と申しましたのは、これでもいくらか、不断の事を、覚えていると見えまして、私がいつでもお客様に差上げますのを知っておりまして、今のように云うたのでござりましょ。

また埴土ねぼつちの団子じゃ、とおつしやつてはなりません。このお前様。」

と、法師の脱いで立てかけた、檜笠ひのきがさを両手に据えて、荷物の上へ直すついでに、目で教えたる葭簀よしずの外。

さつくと削った荒造あらづくりの仁王尊にわうそんが、引組ひつくむ状さまの巖いわ続き、海を踏んで突立つったつ間に、倒さかに生えかかった竹藪たけやぶを一叢ひとむら隔へて、同じ巖いわの六枚屏風びようぶ、月には蒼き倂立あお おもかげだとう——ちらほらと松も見えて、いろいろの浪を緘おどした、鎧よろいの袖を※に翳かざす。

「あれを貴下、お通りがかりに、御覧じはなさりませんか。」

と背向きになつて小腰を屈め、姥は七輪の炭をがさがたと

火箸で直すと、薬缶の尻が合点で、ちゃんと据わる。

「どの道貴下には御用はござりますまいなれど、大崩壊の突端と睨み合いに、出張っておりますあの巖を、」

と立直つて指をさしたが、片手は据え腰を、えいさ、と抱きつつ、

「あれ、あれでござります。」

波が寄せて、あたかも風鈴が碎けた形に、ばらばらとその巖端に打かかる。

「あの、岩一枚、子産石と申しまして、小さなのは細螺、碁石ぐらい、頃あいの御供餅ほどのから、大きなのになりますと、一人では持切れませぬようなまで、こつとり円い、ちつと、

ひらたみ
平扁味のあります石が、どこからとなくころころと産れます
でございます。

その平扁味な処が、恰好よく乗りますから、二つかさねて、
お持仏なり、神棚へなり、お祭りになりますと、子の無い方
が、いや、もう、年子にお出来なさりますと、申しますので。
随分お望みなさる方が多うございますが、当節では、人が
せせこましくなりました。お前様、蓆戸むしろどの圧おさえにも持つて参
れば、二人がかりで、沢庵石にに荷になつて帰りますのさえござり
ますに因つて、今が今と申して、早急には見当りませぬ。

随分と御遠方、わざわざ拾いにござらして、力を落す方が
ござりますので、こうやつて近間に店を出しておりますから、
朝晩しおどき汐時しおどきを見ては拾つておきまして、お客様には、お土産か
たがた、毎度ぼいぼい婆々ぼいぼいが御愛嬌ごあいぎやうに進ぜるものでござりますから、

つい人様が御存じで、葉山あたりから遊びにござります、書生さんなぞは、

（婆さん、子は要らんが、女親を一つ寄越せ。）

なんて、おからかいなされます。

それを見い見い知つていて、この嘉吉の狂人きちがいが、いかな事、私わしがあげましたものを召食めしあがろうとするのを見て、石じや、と云うのでござりますよ。」

四

「それではお婆さん樂隠居だ。孫子がさぞ大勢あんなさろうね。」

と小次郎法師は、話を聞き聞き、子産石かたの方のぞを覗きたれば、

面白や浪の、云うことも上の空。

トお茶注さしましうと出しかけた、塗盆ぬりぼんを膝に伏せて、ふと黙つて、姥うばは寂しうに傾いたが、

「何のお前様、この年になりますまで、孫子の影も見はしませぬ。爺殿じいと二人きりで、雨のさみしき、行燈あんどうの薄寒さに、心細う、果敢はかないにつけまして、小児衆こどもしゅうを欲しがるお方の、お心を察しますで、のう、子産石も一つ一つ、信心して進じます。

長い月日の事でござりますから、里の人達は私等わしらが事を、人に子だねを進ぜるで、二人が実を持たぬのじゃ、と云いますかの、今ではそれさえ本望で、せめてもの心ゆかしでござりますよ。」

とかごとがましい口ぶりだったが、柔和な顔に顰ひそみも見えず、温順にっこりに莞爾して、

「御新造様ごしんぞさまがおりなされますれば、御坊様ごぼうさまにも一かさね、子産石を進ぜましように……」

「とんでもない。この団子でも石になれば、それで村方勸化かんげでもしようけれど、あいにく三界に家なしです。

しかし今聞いたようでは、さぞお前さんがたは寂さみしかろうね。」

「はい、はい、いえ、御坊様の前で申しましては、お追従ついでのようでござりますが、仏様は御方便、難有ありがたいことでござります。こうやって愛想あいそ気もない婆ば々ばが許とこでも、お休み下さりますお人たちに、お茶のお給仕をしておりますれば、何やかや賑にぎやかで、世間話で、つかうかと日を暮しますでござります。

ああ、もしもし、」

と街道へ、

「休まつしやりまし。」と呼びかけた。

車輪のごとき大さの、紅白段々の夏の蝶、河床は草にかく

れて、清水のあとの土に輝く、山際に翼を廻すは、白の脚絆、

草鞋穿、かすりの単衣のまくり手に、その看板の洋傘を、手拭

持つ手に差翳した、三十ばかりの女房で。

あんぺら帽子を阿弥陀かぶり、縞の襦衣の大膚脱、赤い団扇

を帯にさして、手甲、甲掛嚴重に、荷をかついで続くは亭主。

店から呼んだ姥の声に、女房がちよつと会釈する時、束髪

の鬢が戦いで、前を急ぐか、そのまま通る。

前帯をしゃんとした細腰を、廂にぶらさがるようにして、

綻びた脇の下から、狂人の嘉吉は、きよろりと一目。

ふらふらと葭簀を離れて、早や六七間行過ぎた、女房のあ

とを、すたすたと跣足の砂路。

ほこりを黄色に、ばつと立てて、擦寄つて、附着いたが、女房のその洋傘から伸かかつて見越入道。

「イヒヒ、イヒヒヒ、」

「これ、悪戯いたずらをするでないよ。」

と姥が爪立つまだつて窘めたしなめたのと、笑声が、ほとんど一所に小次

郎法師の耳に入つた。

あたかもその時、亭主驚いたか高調子に、

「傘や洋傘こうもりの繕い！——洋傘張替繕こうもりがほりかえい直し……」

蟬の鳴く音ねを貫いて、誰も通らぬ四辺あたりに響いた。

隙すかさず、この不気味な和郎を、女房から押隔おしへてて、荷を真中まんなか

へ振込しりめむと、流眊しりめに一睨にらみ、直ぐ、急足いそぎあしになるあとから、和

郎は、のそのそ——大な影おおきを引いて続く。

「御覧ごらうじまし、あの通り困つたものでござります。」

法師も言葉なく見送るうち、沖から来るか、途絶えては、ずしりと崖を打つ音が、松風と行違いに、向うの山に三度ばかり浪の調べを通わすほどに、紅白段々の洋傘は、小さく鞠のようになつて、人の頭が入交ぜに、空へ突きながら行くかと思えて、一条道のそこまでは一軒の苦屋もない、彼方大崩壊の腰を、点々。

五

「あれ、あの大崩壊の崖の前途へ、皆が見えなくなりました。ちようど、あれを出しました、下の浜でござります。唯今の狂人が、酒に酔つて打倒れておりましたのは……はい、あれは嘉吉と申しまして、私等秋谷在の、いけずな野郎でござり

ましての。

その飲んだくれます事、怠ける工合ぐあい、まともな人間から見ますれば、真ほんに正氣せいきの沙汰さたではござりませなんだが、それでもどうやら人並に、正月はめでたがり、盆は忙しがりまして、別に気が触れた奴やつではござりません。いつでも村の御祭礼おまつりのように、遊ぶが病氣やまいでござりましたが、この春頃に、何と発心をしましたか、自分が望みで、三浦三崎のさる酒問屋さかどいやへ、奉公をしたでござります。

つい夏の取着とつつきに、御主人のいいつけで、清酒すみざけをの、お前様、沢山たんでもござりませぬ。三樽みたるばかり船に積んで、船頭殿が一人、嘉吉めが上乗うわのりで、この葉山の小売店みせへ卸しに来たでござります。

葉山森戸などへ三崎の方から帰ります、この辺のお百姓や、

漁師たち、顔を知つたものが、途中から、乗けてくらつせえ、明いてる船じや、と渡場わたしばでも船つきでもござりませぬ。海岸の岩の上や、磯いその松の根方から、おおいおおい、と板東声ばんどうごえで呼ばり立つて、とうとう五人がとこ押込みましたは、以上七人になりました、よの。

どれもこれも、碌ろくでなしが、得手に帆じや。船は走る、口はすべはなる、風なきはよし、大話しをし草臥くたぶれ、嘉吉めは胴まの間の横木を枕ふんぞりに、踏反ふんぞり返かえつて、ぐうぐう高たかい鼾びきになつたげにござります。

路に灘なだはござりませぬが、樽の香かほが芬々ふんふんして、鮎たこも浮きそうな風よの好きよさ。せめて船にでも酔よいたい、と一人が串戯じようだんに言い出しますと、何と一樽賭かけまいか、飲むことは銘々が勝手次第、勝負の上から代銭を払いえば可いい、面白い、遣やるべいじや。

煙管の吸口でも結構に樽へ穴を開ける徒が、大びらに呑ぎせる口切つて、お前様、お船頭、弁当箱の空はなしか、といびつなり形の切溜きりだめを、大海でざぶりとゆすいで、その皮づつみに、せせり残しの、醤油かすを指のさきで嘗なめながら、まわしのみの煽あおつきり。

天下晴れて、財布の紐ひもを外すやら、胴巻を解くやらして、賭博なぐさみをはじめますと、お船頭が黙つてはおりませぬ。」

「叱言こじとを云つて留めましたか。さすがは船頭、字で書いても船の頭かしらだね。」

と真顔で法師の言うのを聞いて、姥うばは、いかさまな、その年少としわかで、出家でもしそうな人、とさも憐あわれんだ趣で、

「まあ、お人の好いい。なるほど船頭を字に書けば、船の頭でござりましよ。そりやもう船の頭だけに、極きまり処はちゃんと

極つて、間違ひのない事をいたしました。」

「どうしたかね。」

「五人徒であいさいが賽の目に並んでおります、真中まんなかへ割込んで、まず帆を下ろしたのでござります。」

と莞爾にっこりして顔を見る。

いささかもその意を得ないで、

「なぜだろうかね。」

「この追手じや、帆があつては、丁と云う間に葉山へ着く。ふわふわと海月泳くらげぎに、船を浮かせながらゆつくり遣るべい。

その事よ。四海波静かにて、波も動かぬ時津風、枝を鳴らさぬ御代みよなれや、と勿体ない、祝言こうたいの小謡を、聞囀きぎかじりに謳うたう下から、勝負！ とそれ、銭おかしの取遣とりやり。板子の下が地獄なら、上も修羅道しゅらどうでござります。」

「船頭も同類かい、何の事じや、」

と法師は新になみなみとある茶碗を大切そうに両手で持つて、苦笑いをするのであつた。

「それはお前様、あの徒と申しますものは、……まあ、海へ出て岸をば^{みまわ}眺^{みまわ}して御覧^{ごらん}じまし。巖^{いわ}の窪^{くぼ}みはどこもかしこも、賭博^{ばくち}の壺^{つぼ}に、鰻^{あわび}の蓋^{ふた}。蟹^{かに}の穴でない処は、皆意錢^{あないち}のあとでござります。珍しい事も、不思議な事もないけれど、その時は、はい、嘉吉に取つては、あやかしが着きましたじや。のう、便船^{びんせん}しよう、便船^{びんせん}しよう、と船を渚^{なぎさ}へ引寄せては、巖端^{いわばな}から、松の下から、飜然^{ひらりひらり}々と乗りましたのは、魔がさしたのでござりましたよ。」

「魅入られたようになりまして、ぐつすり寝込みました嘉吉の奴。浪の音は耳馴なれても、磯近いそぢかへ舳へさきが廻まわつて、松の風に揺り起され、肌寒うなつて目を覚ましますと、そのお前様……
ていたらく
体裁。

山あがへ上つたというではなし、たかだか船の中の車座、そんな事は平気な野郎も、酒樽さんぽそうの三番叟、とうとうたたりたりには肝を潰つぶして、（やい、此奴等こいつら）とはずみに引傾ひつかたがります船底へ、仁王立ふみに踏ふごたえて、喚わめいたそうにござります。

騒さわぐな。

騒さわぐまいてや、やい、嘉吉、こう見た処で、二歩ふたと一両、貴様かしに貸かのない顔はないけれど、主人のものじゃ。引負ひきおいをさせてまで、勘定を合あわしようなんど因業いんごうな事は言わぬ。場ば銭ぜを

集めて一樽買ったと言分あるまい。代物さえ持つて帰れば、どこへ売つても仔細しさいはない。

なるほど言われればその通り、言訳の出来ぬことはござりませぬわ、のう。

錢さえ払えば可いとして、船頭やい、船はどうする、と嘉吉が云いますと、ばら錢を掴にぎつた拳こぶしを向顱むかうはちまき卷の上き突出して、半だ半だ、何、船だ。船だ船だ、と夢中でおります。

嘉吉が、そこで、はい、櫓ろを握つて、ぎつちらこ。幽霊船の歩ふに取られたような顔つきで、漕出こぎだしたげでござりますが、酒にの匂におに我慢が出来ず……

御繁昌ごはんじようの旦那だんなから、一杯おみきを遣わされ、と咽喉のどをごくごくさして、口を開けるで、さあ、飲まつせえ、と注つぎにかかる、と幾干いくらか差引くか、と念を推したげで、のう、ここら

は確たしかでござりました。

幡随院長兵衛じゃ、酒を振舞うて銭を取るか。しみつたれたことを云うな、と勝った奴がいきります。

お手渡てわたしで下される儀は、皆の衆も御面倒、これへ、と云うて、あか柄杓びしやくを突出いて、どうどうと受けました。あの全面おおづらが、お前様、片手で櫓を、はい、押しながら、その馬柄杓ばびしやくのようなもので、片手で、ぐいぐいと煽あおったげな。

酒は一樽打ぶちぬ抜いたで、ちつとも惜気おしげはござりませぬ。海からでも湧出すように、大氣になつて、もう一つやらつせえ、丁だ、それ、心祝いに飲ますべし、代は要らぬ。

帰命頂礼きみようちやうらい、賽さいころ明神の元天窓はげあたま、光る光る、と追従ついでしやう云うて、

あか柄杓へまた一杯、煽るほどに飲むほどに、櫓拍子ろびやうしが乱になつて、船はぐらぐら大揺れ小揺れじゃ、こりやならぬ、賽

が据^{すわ}らぬ。

ええ、氣に入らずば代^こつて漕^こげさ、と滅多押しに、それでも、大崩壊^{おおくずれ}の鼻を廻^{まわ}つて、出島の中へ漕^こぎ入れたでござります。

さあ、内海^{うちうみ}の青畳、座敷へ入^いつたも同じ^{おんな}じや、と心が緩むと、嘉吉奴^めが、酒代を渡^{わた}してくれ、勝負が済^すむまで内金を受^う取^とろう、と櫓^こを離^{はな}した手に銭^{おあし}を握^{にぎ}ると、懷^{くわ}へでも入れることか、片手^{ひとて}に、あか柄杓^{びしやく}を持^もつたなりで、チョボ一の中へ飛^と込^こみました。

はて、河童^{かっぱ}野郎、身投^{みななげ}するより始末^{しまつ}の悪^{わる}さ。こうなつては、お前^{まへ}様、もう浮^うぶ瀬^せはござりませぬ。

取^とられて取^とられて、とうとう、のう、御主人^{ごしゅじん}へ持^もつて行^いく、一樽^{いっすん}のお代^{しろ}を無^なにしました。処^{ところ}で、自棄^{やけ}じゃ、賽^{さい}の目^めが十^{とお}に

見えて、わいらの頭が五十ある、浜がぐるぐる廻るわ廻るわ。さあ漕がば漕げ、殺さば殺せ、とまたふんぞつた時分には、もの一斗ぐらい嘉吉一人で飲んだである。七人のあたまさえ四斗樽、これがあらかた片附いて、浜へ樽を上げた時、重いつもりで両手をかけて、えい、と腰を切った拍子抜けに、向うへのめつて、樽が、ばっちゃん、嘉吉がころり、どんとのめりましたきり、早や死んだも同然。

船はそれまで、ぐるりぐると長者園の浦を廻つて、ちようどあの、活動写真の難船見たよう、波風の音もせずに漂うていましたげな。りようはだぬぎ両膚脱の胸毛や、おおあぐら大胡坐の脛の毛へ、夕風が颯さつとかかつて、悚然ぞつとして、みんな皆が少し正気づくくと、一ツ星も見えまする。おおいわ大巖の崖が薄黒く、目の前へ蔽被おつかぶさつて、物凄ものすごうもなりましたので、ふんどし禪を締め直すやら、ひびつこぞう膝小僧を合わせる

やら、お船頭が、ほういほうい、と鳥のような懸声で、浜へ船をつけまして、正体のない嘉吉を撲なぐる。と、むっくり起きたが、その酒樽の軽いのに、本性違たがわず氣落きおちがして、右の、倒れたものでござりますよ。はい。」

七

「仰あお向のけ様に、火のような息を吹いて、身体からだから染出しみだします、酒が砂へ露を打つ。晩方の涼しさにも、蚊や蠅が寄つて来る。
奴やつこは、打ぶつても、叩たたいても、起おきることではござりませぬが
の。

かかり合あいは免のがれぬ、と小力こちからのある男が、力を貸して、船頭まじりに、この徒てとて確たしかではござりませなんだ。ひよろひよ

ろしながら、あとのまず二樽は、荷つて小売店へ届けました。嘉吉の始末でござります。それなり船の荷物にして、積んで帰れば片附きますが、死骸ではない、酔ったもの、醒めた時の挨拶が厄介じゃ、とお船頭は遁を打って、帆を掛けて、海の靄へと隠れました。

どの道訳を立ていでは、主人方へ帰られる身体ではござりませぬで、一まず、秋谷の親許へ届ける相談にかかりました。が、またこのお荷物が、御覧の通りの大男。それに、はい、のめったきり、捏でも動かぬに困じ果てて、すつぱすつぱ煙草を吹かすやら、お前様、噓をするやら、向脛へ集る蚊を踵で揉殺すやら、泥に酔った大鯨のような嘉吉を、浪打際に押取巻いて、小田原評定。持て余しておりました処へ、ちようど荷車を曳きまして、藤沢から一日路、この街道つづきの長者園

の土手へ通りかかりましたのが……」

茜色あかねいろの顚卷はちまきを、白髪天窓しらがあたまにちよきり結び。結び目の押立おったつ

て、威勢いの可いいのが、弁慶蟹がにの、濡色はきみあかき鋏はさみに似たのに、ま

たその左の腕片かたかた々、へし曲まつて脇腹わきへ、ぱツと開あけ、ぐいと

握てのひらる、指と掌てのひらは動くけれども、肱ひじは附く着ついてちつとも伸びず。

銅あかがねで鑄あたような。……その仔細しさいを尋たずねれば、心こころがらとは言い

ながら、去さんぬる年、一膳飯屋ぜんでぐでんになり、冥途めいどの宵を照あら

しますじや、と碌ろくでもない秀句しゅうくを吐はいて、井桁いげの中なに横木瓜もつこう、

田舎やみの暗夜やみには通りものの提灯ちようちんを借りたので、蠅殻道かきがらみちを照あら

しながら、安政の地震に出来た、古い処ところを、鼻唄はなうたで、地つちが崩

れそうなひよろひよろ歩行あるき。好いい心持に眠氣ねががさすと、邪

魔あかりな灯ひじを肱ひじにかけて、腕かぎなりを鍵形かぎなりに両手を組み、ハテ怪しやな、

汝おのれ、人魂ひとだまか、金精かねだまか、正体を顕あらわせろ！ とトロンコの据眼すえまなこで、

提灯を下目に睨む、とぐたりとなつた、並木の下。地虫のよ
うな麝いびきを立てつつ、大崩壊に差懸ると、海が變つて、太平洋
を煽る風あおに、提灯の蛾ろうが倒れて、めらめらと燃えついた。沖
の漁火いさりびを袖に呼んで、胸毛がじりじりに仰天し、やあ、コン
畜生、火の車め、まだ疾えはえ、と鬼と組んだ横倒れ、転廻ころがりまわつて
揉消もみけして、生命いのちに別条はなかつた。が、その時の大火傷、享年
六十有七歳にして、生まれもつかぬ不具かたわもの——渾名あだなを、て
んぼう蟹がにの宰八さいはちと云う、秋谷在の名物親仁おやじ。

「……私わしが爺殿じいでござります。」

と姥うばは云つて、微笑ほほえんだ。

小次郎法師は、寿ことぶきくごとく、一揖いちゆうして、

「成程じよう、尉殿じようだね。」と祝儀する。

「いえ、もう気ままものの碌でなしでござりますが、お庇かさ

まで、至つて元氣がようござりまするので、御懇意な近所へは、
進退が厭いじゃ、とのう、葉山を越して、日影から、田越逗子の
方へ、遠くまで、てんぼうの肩に背負しよいかご籠こごして、栄螺さざえや、とこぶ
し、もろ鰯あじの開き、うるめ鰯いわしの目刺など持ちましては、飲代のみしろ
にいたしますが、その時はお前様、村のもとの庄屋様、代々
長者の鶴谷喜十郎様、

と丁寧ていねいに名のりを上げて、

「これが私わしども、お主筋しめに当りましたの。そのお邸やしきの御用で、
東海道の藤沢まで、買物に行つたのでござりました。

一月に一度ぐらいは、種々入用いろいろのものを、塩やら醬油やら、
小さなものは洋燈ランプの心まで、一車ひとくるまずつ調えさつしやります。

横浜は西洋臭し、三崎は品が落着かず、界限かいがいは間に合わせの
俄仕入れ、しけものが多うござりますので、どうしても目量めかた

のある、ずッしりしたお堅いものは、昔からの藤沢に限りま
すので、おねだんも安し、徳用向きゆえ、御大家の買物はま
た別で、」

と姥は糸を操るような話しぶり。心のどかに口をまわして、
自分もまたお茶参った。

しばらく往来もなかったのである。

八

「……おう、宰八か。お爺じい、在所へ帰るだら、これき一個ひとつ、
産神様うぶすなさまへ届けてくんな。ちようどはい、その荷車きさいわいは幸だ、と
言わつしやる。

見ると、お前様、嘉吉めが、今申したその体ていでござりましたよ。

おんな うじこ なかま

同じ産神様氏子夥間じや。承知なれど、私はこれ、手がこの通り、思うように荷が着けられぬ。御身たちあんばいよう直さつしやい、荷の上へ載せ^のべい、と爺^{じい}どのが云いますとの。
何^{あに}お爺^じい、そのまま上へ積まつしやい、と早や二人して、嘉吉^{あたま}めが天窓と足を、引立てるではござりませぬか。

爺^{おや}どのが、待たつしやい、鶴谷様のお使いで、綿を大い^{いか}こと買^かうて来たが、醤油樽や石油缶の下積になつては悪かんべいと、上荷に積んであるもんだ。喜十郎旦那^{とこ}が許^{ゆる}で、ふつくりと入れさつしやる綿の初穂へ、その酒浸しの怪物^{ばけもの}さ、押^{おっ}ころばしては相成んねえ、柔々^{やわやわ}積方も直さつしやい、と利かぬ手^ての拳^{こぶし}を握^{にぎ}つて、一力^{ひとりきみ}味力みましけ。

七面倒な、こうすべい、と荒稼^{きみじかてあい}ぎの気短徒^{どろな}じや。お前様、上^{うわ}かがりの縄の先を、嘉吉^{けいき}が胴中^{どうなか}へ結^{ゆわ}へ附けて、車の輪に障ら

ぬまでに、横づけに縛りました。

賃銭の外じゃ、落しても大事な。さらば急いで帰らつしやれ。しやんしやんと手を拍たたいて、賭博ばくちに勝つたものも、負けたものも、飲んだ酒と差引いて、誰も損はござりませぬ。可いい機嫌のそそり節、尻まくまで捲つた脛すねの向く方へ、ぞろぞろと散つたげにござります。

爺どのは、どつこいしよ、と横木に肩を入れ直いて、てんぼうの片手押しは、胸が力でござります。人通りが少いで、露にひろがりました浜昼顔の、ちらちらと咲いた上を、ぐいと曳ひき出して、それから、がたがた。

おおくずれ大崩まで葉山からは、だらだらの爪つま先上り。まさきあが後はなぞえに下り道。車はずんで、ごろごろと、私わしがこの茶店の前まで参つた時じゃ、と……申します。

やい、枕をくれ、枕をくれ、と嘉吉めが喚くげな。

何吐すぞい、この野郎、贅沢^{ぜいたく}べいこくなてえ、狐店^{きつねみせ}の白ッ首

^{くちこじと}

と間違えてけつかるそうな、とぶつぶつ口叱言を申しましての、爺どのが振向きもせず、ぐんぐん曳^ひいたと思わっしやりました。」

「何か、夢でも見たろうかね。」

「夢どころではござりますか、お前様、直ぐに縊殺^{しめ}されそう

な声を出して、苦しい、苦しい、鼻血が出るわ、目がまうわ、

^{あたま}

天窓を上へ上げてくれ。やい、どうするだ、さあ、殺さば殺

せ、漕^こがば漕げ、とまだ夢中で、嘉吉めは船に居る気でおり

ます、よの。

胴中の縄が弛^{ゆる}んで、天窓が地^{つち}へ擦れ擦れに、倒^{さかさま}になつてお

りますそうな。こりやもつともじゃ、のう、たつての苦惱^{くるしみ}。

酒が上^のつて、醒^さめずにいたりや本望だんべい、俺^{わし}ら手が利かねえだに、もうちつとだ辛抱せろ、とぐらぐらと揺^二り出しますと、死ぬる、死ぬる、助け船引^二と火を吹きそうに喚^{わめ}いた、とのう。

この中ではござりませぬ、」

と姥^{よしず}は葭簀^{よしず}の外を見て、

「廂^{ひさし}の蔭^{ひさし}じゃったげにござります。浪^{なみ}が届^ひきませぬばかり。

低い三日月様を、漆^{うるし}見たような高い髻^{まげ}からはずさつせえまして、真白^{まっしろ}なのを顔に当^あてて、団扇^{うちわ}が衣服^{きもの}を掛^かけたげな、影^{かげ}の涼^{すず}しい、姿^{すがた}の長い、裾^{すそ}の薄蒼^{あお}い、悚^{ぞつ}然^{ぜん}とするほど美^{うつく}しらしいお人が一方。

すらすら道端へ出さつせての、

(……………)

爺どのを呼留めて、これは罪人か——と問わしつけえよ。
食物くいのものも代物しろものも、新しい買物じゃ。縁起でもない事の。罪人を上積みにしてどうしべい、これこれでござる。と云うと、可哀相に苦しかろう、と団扇を取つて、薄い羽のように、一文字に、横に口へ啣くわえさしつた。

その時は、爺どの方へ背せを向けて、顔をこう斜はすつかいに、
と法師から打背うちそむく、と俤おもかげのその薄月の、婦人おんなの風情を思遣おもいや
ればか、葦簀よしずをはずれた日のかげりに、姥うなじの頸が白かつた。
荷物の方へ、するすると膝を寄せて、

「そこで？」

「はい、両手を下げて、白いその両方てのひらの掌を合わせて、がつくりとなつた嘉吉の首を、四五本目の幅やばねの辺あたりで、上へ支ささげて持たつせえた。おもみが掛かつたか、姿を絞つて、肩ほつそが細りし

ましたげなよ。」

九

「介抱しよう、お下ろしな、と言わつしやる。

その位な荒療治で、寝汗一つ取れる奴か。打棄うつちやつておかつ
せえ。面倒臭い、と顱はちまき巻しめた頭を掉ふつて云うたれば、どこ
まで行く、と聞かしつけえ。

途中さまざまの隙ひまぎえで、爺じいどのもむかつぱらじや、秋谷
鎮座の明神様、俺等わしらが産神うぶすなへ届け物だ、とずツきり饒舌しゃべると、
(受取りましょう、ここで可いいから。)

(お前様は?)

(ああ、明神様の侍女こしもとよ。)と言わつしやつた。

月に浪が懸りますように、さらさらと、風が吹きますと、揺れながらこの葦簀の蔭が、格子縞のように御袖へ映つて、雪の膚まで透通つて、四辺には影もない。中空を見ますれば、白鷺の飛ぶような雲が見えて、ざつと一浪打ちました。

爺どのは悚然として、はい、はい、と柔順になつて、縄を解くと、ずりこけての、嘉吉のあの図体が、どたりと荷車から。貴女は擡げた手を下へ、地の上へ着けるように、嘉吉の頭を下ろさつせえた。

足をばたばたの、手によいよい、輻も蹴はずしそうに悶きますわの。

（ああ、お前はもう可いから。）邪魔もののおつしやつたで、爺どのは心外じゃ……

何の、心外がらずともの、いけずな親仁でござりますがの、

ほほ、ほほ。」

「いや、いや、私が聞いただけでも、何か、こうわざと邪慳じやけんに取扱つたようで、対手あいてがその酔漢よいどれを労いたわるというだけに、黙つてはおられません。何だか寢覚ねざめが悪いようだね。」

「ええ、串戯じようだんにも、氏神様の知己うじがみさま ちかづきじゃと言わつしやりましたけに、嘉吉を荷車に縛りましたのは、明神様の同一孫児おなじまごこを、継子ままこ扱いにしましたようで、貴女あなたへも聞えが悪うござりまするので。

綿うわづみの上積三 一件から荷に奴やつこを縛つたは、爺じいどのが自分したことでではない事を、言訳がましく饒舌しゃべりますと、(可よいから、お前はあっちへ)と、こうじやとの。

(可よかあねえだ。もの、理合りあいを言わねえ事にや、ハイ気が済みましねえ。お前様も明神様お知己ちかづきなら聞かつしやい。老耆おいぼれの手てんぼう爺じいに、若いものの酔漢よいどれの介抱やかいが何なに、出来べい。神様

も分らねえ、こんな、くだま野郎を勞つてやらつしやる御慈
悲い深い思召で、何でこれ、私等婆様の中に、小兒一人授け
ちやくれさつしやらぬ。それも可い、無い子だねなら断念め
べいが、提灯で火傷をするのを、何で、黙つて見てござつた。
私が手ぼうでせえなくば、おなじ車に結えるちゆうて、こよう、
けんどんに、倒にや縛らねえだ。初対面のお前様見さつしや
る目に、えら俺が非道なようで、寢覚が悪い、と願巻を掉立
てますと、のう。

（早く、お帰り、）と、繼穗がないわの。

（いんにや、理を言わねえじゃ、）とまだ早や一概に捏ねよう
としましたら……

（おいでよ、）と、お前様ね。

団扇で顔を隠さしたなり。背後へ雪のような手を伸して、

荷車ごと爺じいどのを、推遣おしやるようにさつせえた。お手の指が白々と、こう輻やほねの上で、糸車に、はい、綿屑がかかったげに、月の光で動いたらばの、ぐるぐるぐると輪が廻まわつて、爺じいどのの背せへ、荷車が、乗被のつかぶさるではござりませぬか。」

「おおおお、」

と、法師は目を睜みはつて固唾かたずを呑む。

「吃驚びっくり亀の子、空へ何と、爺どのは手を泳がせて、自分の曳ひいた荷車に、がらがら背後うしろから押出されて、わい、というたぎり、一呼吸ひといきに村の取着とつき、あれから、この街道が鍋なべづる形なりに曲ります、明神様、森の石段まで、ひとりでに駆出かけだしましたげな。」

もつとも見さつしやります通り、道はなぞえに、向むこへ低くはなりますが、下り坂と云う程ではなし、その疾はやいこと。一

なだれに^{すべ}にたつたようで、やつと石段の下で、うむ、とこたえて踏留まりますと、はずみのついた車めは、がたがたと石ころの上を空廻りして、躍ったげにござります。

見上げる空の森は暗し、爺どのは、身震いをしたと申しま
すがの。」

十

「利かぬ気の親仁^{おやじ}じゃ、お前様、月夜の遠見に、纏^{まと}つたものの形は、葦簀^{よしずばり}張の柱の根を^{おさ}圧えて置きます、お前様の背後^{うしろ}の、その石碓^{いしこう}か、私が立掛けて置いて帰ります、この床几^{しょうぎ}の影ばかり。」

大崩壊^{おおくずれ}まで見通しになつて、貴女^{あなた}の姿は、蜘蛛巢^{くものす}ほども見

えませぬ。それをの、透かし透かし、山際に附着くつついて、薄墨引いた草の上を、蹺あしおと音を盗んで引返ひつかえしましたげな。

嘉吉をどう始末さつしやるか、それを見届けよう、という、爺じじいどの了簡りようけんでござります。

荷車はの、明神様石段の前を行ゆけば、御存じの三崎街道、横へ切れる畦道あぜみちが在所の入口でござりますで、そこへ引込んだものでござります。人氣おだやかも穏なり、積んだものを見たばかりで、鶴谷様御用、と札の建ったも同一おなじじやで、誰も手の障さえ人はござりませぬで。

爺どのは、這はうようにして、身体からだを隠して引返したと言いましけ。よう姿が隠さりよう、光った天窓あたまと、顱はちまき卷あかねいろの茜色あかねいろが月夜に消えるか。主ぬしやそこで早や、貴女あなたの術で、活いきながら銕はさみの紅あかい月影の蟹かにになった、とあとで村の衆にひやかされて、

ええ、措^おけやい、気味の悪い、と目をぱちくり、泡を吹いたでござりますよ。

笑うてやらつしやりませ。いけ年^{つかまつ}を仕つて、貴女^いが、去ね、とおつしやつたを止^よせば可^よいことでござります。」

法師はかくと聞いて眉^{ひそ}を顰^{ひそ}め、

「笑い事ではない。何かお爺^{じいさん}様に異状でもありましたか。」

「お目こぼしでござります、」

と姥^{かおつき}は謹^{かおつき}んだ、顔色^{かおつき}して、

「爺^{かげ}どのはお庇^{かげ}と何事もござりませんで、今日も鶴谷様の野良へ手伝いに参つております。」

「じゃ、その嘉吉と云うのばかりが、変な目に逢つたんだね。」

「それも心がらでござります。はじめはお前様、貴女^{あなた}が御親切^かに、勿体ない……お手ずから薫^{かおり}の高い、水晶を嘯^かみますよ

うな、涼しいお薬を下さつて、水ごと残しておきました、……
この手桶おけから、」……

と姥は見返る。捧げた心か、葦簣よしずに挟んで、常夏とこなつの花のあ
るが下もとに、日影涼しい手桶が一個、輪の上に、——大方その
時以来であらう——注連しめを張つたが、まだ新しい。

「水も汲くんで、くくめておやり遊ばした。嘉吉の我に返つた
処で、心得違しいをしたために、主人の許とこへ帰れずば、これを
代しろに言訳して、と結構な御宝を。……

それがお前様、真緑まみどりの、光のある、美しい、珠じやつたげ
にございます。

爺どのが、潜り込んだ草の中から、その蟹の目を密そつと出し
て、見た時じやつたと申します。

こう、貴女がお持ちなさりました指さきの尖へ、ほんのりと蒼あお

く映つて、白いお手の透いた処は、大な螢をお撮みなさりま
したようじやげな。

貴女のお身体からだに附属ついてこそじやが、やがて、はい、そ
の光は、嘉吉が賽さいころを振る掌てのひらの中へ、消えましたとの。

それから、抜かつしやりましたものらしい、少し俯向うつむいて、
ええ、やつぱり、顔へは団扇を当てたまんまで、お髪ぐしの黒い、
前の方へ、軽く簪かんざしをお挿さなされて、お草履せつたか、雪駄せつたかの、そ
れなりに、はい、すらすらと、月と一所に女浪めなみのように歩行ある
かつしやる。

これでまた爺ぢどのは悚然ぞつとしたげな。のう、いかな事でも、
明神様の知己ちかづきじや言わしつたは串戯じようだんで、大方は、葉山あたり
の誰方どなたのか御別荘から、お忍びの方と思わしつけがの。

今行ゆかつしやるのは反対あへこべに秋谷の方じや。……はてな、と

思うと、変った事は、そればかりではござりませぬよ。

嘉吉の奴やつがの、あろう事か、慈悲を垂れりや、何とやら。珠は掴つかむ、酒の上じや、はじめはただ、御恩返しじやの、お名前を聞きたいの、ただ一目お顔の、とこだわりましけ。柳に受けて歩行あるかつしやるで、機織はたおり場の姉ねえやが許とこへ、夜さり、畦道あぜみちを通う時の高声の唄のような、真似もならぬ大口利はていて、果は増長この上なし、袖を引いて、手を廻うしろして、背後から抱きつきおる。

爺おやどのは冷汗搔かいたげな。や、それでも召すそものの裾すそに、草鞋わらじが引ひかかりましたように、するすると嘉吉に抱かれて、前まぎまに行ゆかつしやつたそうながの、お前様、飛んでもない、」

「怪けしからん事を——またしたもんです。」
と小次郎法師は苦り切る。

姥うばは分別あり顔に、

「一目見たら、その御容子ようすだけでなりと、分りそうなのでござります。

貴女あなたが神にせよ、また人間にしました処で、嘉吉づれが口を利かれませう御方ではござりませぬ。そうでなくとも、そんな御恩を被こつたでござりますもの。拝こむにも、後姿でのうては罰の当ります処、悪党なら、お前様、発心のしどころを。

根が悪徒ではござりませぬ、取締りのない、ただぼうと、一夜酒が沸いたような奴殿やつこじゃ。薄すすきも、蘆あしも、女郎花おみなえしも、見境みさかいはござりませぬ。

髪が長けりや女じや、と合点して、さかりのついた犬同然、珠を頂いた御恩なども、新屋の姉あねえに、藪やぶの前で、牡丹餅半ぼたんもち分分けてもろうた了簡りようけんじやで、のう、食物たべものも下されば、お情なさけも下さりようぐらいに思うて、こびりついたでござります。

弁天様の御姿にも、蠅がたかれば、お鬱陶うつとしい。

通りがかりにただ見ては、草がくれの路と云うても、早ひでりに枯れた、岩の裂目とより見えませぬが、

姥は腰を掛けたまま。さて、乗出すほどの距離でもなかつた――

「直じきその、向う手を分け上りますのが、山一ツ秋谷在へ近道でござりまして、馬車うまくるまこそ通いませぬけれども、私わしなどは夜さり店しを了しまいますと、お菓子、水菓子、商物あきないものだけを風呂敷包、ト背負しよいいまして、片手に薬缶やかんを提げたなりで、夕焼に

お前様、影をのびのび長々と、曲った腰も、楽々小屋へ帰りますかの。

貴女はそこへ。……お裾が靡なびいた。

これは不思議、と爺どのが、肩を半分乗出す時じゃ、お姿が波を離れて、山の腹へすらりと高うなつたと思うと、はて、何を嘉吉がしくさりましたか。

屹きつと振向かつしやりました様子じゃつけ、お顔の団扇が飜ひらり然なめと飜かえつて、斜ななめに浴びせて、嘉吉の横顔へびしりと来たげな。

きやつ！ と云うと刎返はねつて、道ならものの小半町、膝かかとと踵かかとで、抜いた腰を引摺ひきずるように、その癖、怪飛けしとんで遁にげて来る。

爺どのは爺どので、息を詰めた汗の処へ、今のきやあ！ で転倒てんどうして、わっ、と云うて山の根から飛出す処へ、胸を頭突づつき

に来るように、ドンと嘉吉が打附ぶつかつたので、両方へ間を置いて、この街道の真中まんなかへ、何と、お前様、見られた図ではござりますか。

二人とも尻餅じや。

（ど、どうした野郎、）と小腹も立つ、爺どのが恐怖おっかなまぎ紛れに、がならつしやると、早や、変でござりましたげな、きよろん、とした眼がんの見据えて、私わしが爺の宰八の顔をじろり。

（ば、ば、ば、）

（ええ！）

（怪物ばけもの！）

と云うかと思うと、ひよいと立つて、またばたば

たと十足とあしばかり、駆戻つて、うつむけに突んのめつたげにご

ざりまして、のう。

爺どのは二度吃驚びっくり、起たちかけた膝がまたがつくりと地面じべたへ

崩れて、ほっと太い呼吸いきさついた。かつとなつて浪の音も聞えませぬ。それでいて——寂然しんとして、海ばかり動きます耳に響いて、秋谷へ近路のその山づたい。鈴虫が音ねを立てると、露こぼが溢れますような、佳いい声で、そして物凄ものすごう、

（ここはどこの細道じゃ、

細道じゃ。

天神さんの細道じゃ、

細道じゃ。

少し通して下さんせ、下さんせ。）

とあわれに寂しく、貴女の声で聞えました。

その声が遠くなります、山の上を、薄綿で包みますように、雲が白くかかりますと、音が先へ、颯さあ——とたよりない雨が、海の方へ降つて来て、お声は山のうらかけて、遠くなつ

て行きますゆすげな。

前刻さつき見た兎うの毛の雲じゃ、一雨来ようと思つた癖に、こりや心ない、荷が濡れよう、と爺どのは駆けて戻つて、がッたり車を曳ひきだ出しながら、村はずれの小店からまず声をかけて、嘉吉めを見せにやります。

何か、その唄のお声が、のう、十年五十年も昔聞いたようにもあれば、こう云う耳にも、響くと云います。

遠慮すると見えまして、余り委くわしい事は申しませぬが、嘉吉はそれから、あの通り気が変になりました。

さあ、界限かいがいは評判で、小児こどもどもが誰云うとなく、いつの間やら、その唄を……」

(ここはどこの細道じゃ、

細道じゃ。

秋谷邸やしきの細道じゃ、

細道じゃ。

少し通して下さんせ、

下さんせ。

誰方どなたが見えても通しません、

通しません。)

「あの、こう唄うのではござりませんか。

当節は、もう学校で、かあかあからす鴉が鳴く事の、池の鯉こいが麩ふ

を食う事の、と間違いのないお前様、ちゃんと理の詰んだ歌
を教えさっしやるに、それを皆が唄わいで、今申した――

（ここはどここの細道じゃ、

秋谷邸の細道じゃ。）

とあわれな、寂しい、細い声で、口々に、小児こども同士、顔さえ見れば唄い連れるでござりますが、近頃は久しい間、打絶えて聞いたこともござりませぬ——この唄を爺おやどのがその晩聞かした、という話以来、——誰云うとなく流行はやりますので。それも、のう元唄は、

（天神様の細道じゃ、

少し通して下さんせ、

御用のない人通しません、

確か、こうでござりましょう。それを、

（秋谷邸の細道じゃ、

誰方が見えても通しません、

通しません。）

とひとりでに唄います、の。まだそればかりではござりません。こども小児たちが日の暮方、そこらを遊びますのに、厭いやな真似を、まあ、どうでござりましょう。

てんでんが芋※ずいきの葉を振もぎりまして、目の玉二つ、口一つ、穴を三つ開けたのを、ぬつぺりと、こう顔へ被かぶつたものでござります。おおき大いのから小さいのから、その蒼白あおしろい筋のある、細ら長い、狐とも狸とも、姑獲鳥うぶめ、とも異体の知れぬ、中にも虫喰のござります葉の汚点しみは、癩かったいか、痘痕あばたの幽霊。面つらを並べて、ひよろひよると陰日向かげひなた、藪やぶの前だの、谷戸口やとぐちだの、山の根なんぞを練りながら今の唄を唄いますが、三人と、五人ずつ、一組や二組ではござりませんで。

いたすら
悪戯が蒿こうじて、この節では、唐黍とうもろこしの毛しつぽの尻尾を下げたり、あ
けびを口くわに啣くわえたり、茄子提灯なすびちようちんで闇路やみじを辿たどつて、日が暮れる
までうろつきますわの。

気になるのは小石を合せて、手ん手に四ツ竹を鳴らすよう
に、カイカイカチカチと拍子を取つて、唄が段々身に染みま
すに、皆みんなが家うちへ散際ちりぎわには、一人がカチカチ石を鳴らして、

（今打つ鐘は、）

と申しますと、

（四ツの鐘じゃ、）

と一人がカチカチ、五ツ、六ツ、九ツ、八ツと数えまして……

（今打つ鐘は、）

七ツの鐘じゃ。）

と云うのを合図に、

（そりや魔が魅すぞ！）

と哄どつと囃はやして、消えるように、残らず居なくなるのでござりまするが。

何とも厭いやな心持で、うそ寂しい、ちようど盆のお精霊しやうりようさま様が絶えずそこらを歩行あるかつしやりまするようで、氣の滅め入いりますることと云うては、穴倉へ引入れられそうでござりまする。

活潑な唱歌を唄え。あれは何だ、と学校でも先生様が叱しりやりまするようなが、それで留やめますほどならばの、学校へ行く生徒ゆに、蜻蛉とんぼう釣るものも居おりませねば、木登りをする小僧もない筈はず——一向に留みませぬよ。

内は内で親たちが、厳しく叱言こごとも申します。氣の強いのは、おのれ、凸助でこすけ……いや、鼻はなびつしやり、芋※ずいきの葉はの凹ぼこ吉きちめ、細

道で引捉ひつかまえて、張撲はりなぐつて懲こらそう、と通りものを待構えて、こ
う透かして見ますがの、背の高いのから順よく並んで、同一おなじ
ような芋※の葉を被かぶつてゐるけに、衣きものの縞柄しまがらも氣のせい
か、逢魔おうまが時に茫ぼうとして、庄屋様の白壁に映して見ても、ど
れが孫やら、倅せがれやら、小女童こめろやら分りませぬ。

おなじように、憑物つきものがして、魔に使われているようで、手も
つけられず、親たちがうろうろしますの。村方一同寄ると障さわ
ると、立膝に腕組するやら、平胡坐ひらあぐらで頬杖ほおづえつくやら、変じや、
希有けうじゃ、何でもただ事であるまい、と薄氣味を悪がります。
中でも、ほつと溜息ためいきついて、氣に掛けさつしやったのが、鶴
谷喜十郎様。」

と丁寧ななに、また名告なつて、姥うばは四辺あたりを見たのである。

十三

さて十年の馴染なじみのように、擦寄ひそつて声を密め、

「わらべうた童唄わらべうたを聞かつしやりました——（秋谷邸やしきの細道じゃ、誰方が

見えても通しません）——と、の、それ、」

小次郎法師の頷うなずくのを、合点させたり、と熟じつと見て、姥うばは

やがて打頷うちうなずき、

「……でござりましょう。まず、この秋谷で、邸と申しますれば——そりや土蔵しらかべづくり、白壁造かわら、瓦屋根は、御方一軒ではござりませぬが、太閤様たいこうさまは秀吉公、黄門様は水戸様で、う、邸は鶴谷に帰したもの。

ところで、一軒は御本宅、こりや村の草分でござりますが、

もう一軒——喜十郎様が隠居所にお建てなされた、御別荘が
ござりましての。

お金は十分、通い廊下に藤の花を咲さけようと、西洋窓に鸚鵡おうむ
を飼おうと、見本は直じき近い処にござりまして、思召通りじや
けれど、昔かたぎ氣質の堅い御仁ごじん、我等式百姓に、別荘づくりは相応ふさ
わしからぬ、とついこのさきの立石たていし在に、昔からの大庄屋が
土台ごと売物に出しました、瓦ばかりも小千両、大黒柱が二
抱え。平家ながら天井が、高い処に照々きらきらして間数十ばかりも
ござりますのを、牛車うしぐるまに積んで来て、背後うしろに大な森をひかえ
て、黒塗くろぬりの門も立木の奥深う、巨寺おおでらのようにお建てなされて、
東京の御修業さきから、御子息の喜太郎様が帰らつしやりま
したのに世を譲つて、御夫婦一まず御隠居が済みましけ。

去年の夏でござりますがの、喜太郎様が東京で御鼈ひいき扨にな

らしつた、さる御大家の嬢様じゃが、夏休みに、ぶらぶら病^{やまい}の保養がしたい、と言わつしやる。

海辺は賑^{にぎや}かでも、馬車が通つて埃^{ほこり}が立つ。閑静な処をお望み、間数は多し誂^{あつら}え向き、隠居所を三間ばかり、腰元も二人ぐらい附く筈^{はず}と、御子息から相談を打^ぶたつしやると、隠居と言えば世を避けたも同様、また本宅へ居直るも億劫^{おつこ}なり、年寄^{としより}と一所では若い御婦人の氣が詰^{つま}ろう。若いものは若い同士、本家の方へお連れ申して、土用正月、歌留多^{うたがると}でも取つて遊ぶが可^いい、嫁もさぞ喜ばう、と難有^{ありがた}いは、親でかう。

そこで、そのお嬢様に御本家の部屋を、幾つか分けて、貸^かすことになりました。ある晩^{くるま}、腕車^{くるま}でお乗込み、天上ぬけに美^{うつくし}い、と評判ばかりで、私等^{わしら}ついぞお姿も見ませなんだが、下男下女どもにも口留めして、秘^{かく}さしたも道理じゃよ。

その嬢様は落つこちそうなお腹じやげな。」

「むむ、孕はらんでいたかい。そりや怪けしからん、その息子というのが馴染なじみではないのかね。」

「御推量でございます、そこじや、お前様。見えて半月とも経たちませぬに、豪えらい騒動が起つたのは、喜太郎様の嫁御がまた臨月じや。」

御本家に飼殺しの親爺おやじ仁右衛門、渾名あだなも苦虫にがむし、むずかしい顔をして、御隠居殿へ出向いて、まじりまじり、煙草たばこを捻ひねつて言うことには、（ハイ、これ、昔から言うことだ。二人一斉いっときに産をしては、後か、前さきか、いずれ一人、相孕あいばらみの怪我けががござるで、分別のうてはなりませぬ、）との。

喜十郎様、凶年にもない腕組をさっせえて、（善悪よしあしはともかく、内の嫁が可愛いにつけ、余所よその娘の臨月を、出て行ゆけとは

無慈悲で言われぬ。ただし廂ひさしを貸したものに、母屋おもやを明渡し
て嫁を隠居所へ引取る段は、先祖の位牌いはいへ申訳がない。私等
が本宅へ立帰つて、その嬢様にはこの隠居所を貸すとしよう
——御夫婦、黒門を出さしつたのが、また世に立たつしやる
前表かの。

鶴谷は再度、御隠居の代になりました。」

「息子さんは不埒ふらちが分つて勘当かい。」

「聞かつせえまし、喜太郎様は亡くなりましたよ。前後あととさきへ黒
門から葬礼おとむらいが五つ出ました。」

「五つ！」

「ええ、ええ、お前様。」

「誰と誰と、ね？」

「はじめがその出養生でようじようの嬢様じゃ。これが産後でおいとしゆ

うならしつた。大騒ぎのすぐあと、七日目に嫁御がお産じや。
汐時しおどきが二つはずれて、朝六つから夜の四つ時まで、苦しみ
通しの難産でう。

村中は火事場の騒ぎ、御本宅は寂しんとして、御経の声やら、咳しわぶき
やら……」

十四

「占者が卦けを立てて、こりや死霊しりようの祟たたりがある。この鬼に負け
てはならぬぞ。この方から逆寄さかよせして、別宅のその産屋うぶやへ、
守刀を真先に露払いで乗込めさ、と古袴ふるばかまの股立ちを取つて、
突立上りますのに勢いきおいづいて、お産婦を褥しとねのまま、四隅と両方、
六人の手で密そつと昇かいて、釣台へ。

お先立ちがその易者殿、御幣を、ト襟へさしたものでござります。筮竹ぜいちくの長袋を前半まえじゃ、小刀のように挟んで、馬乗提灯うまのりぢようちんの古びたのに算木を躪あらわしましたので、黒雲の蔽おつかぶさった、蒸暑い畦あぜを照てらし、大手を掉ふつて参ります。

嫁入道具に附いて来た、藍貝柄あおがいえの長刀を、柄つかばら払いして、仁右衛門親仁が担まんぎました。真中まんなかへ、お産婦の釣台を。そのわきへ、喜太郎様が、帽子シャツポかぶりで、蒼あおくなつて附添うしろった、背後へ持明院の坊様が緋ひの衣きじゃ。あとから下男下女どもがぞろぞろと従つきました。取揚婆とりあげばあ四さんは前さきへ早や駆抜けて、黒門のお部屋へ産所の用意。

途中、何とも希有けううな通りものでござりまして、あの螢がまたむらむらと、蠅がなぶるように御病人の寢姿たかに集たかりますと、おなじ煩こどもうても、美しい人の心かして、夢中で、こう小児の

ように、手で取っちや見さしつけ。

上へ手を上げさっしやるのも、御容体を聞くにつけ、空をつかんで悶えさっしやるようで、目も当てられぬ。

それでも祟りに負けるなと、言うて、一生懸命、仰向かしつた枕をこぼれて、さまで瘠せも見えぬ白い頬へかかる髪のを、しつかり白歯で噛まじつたが、お馴染じや、私が藪の下で待つて、御新造様しつかりなさりまし、と釣台に縋つたれば、アイと、細い声で云うて莞爾と笑わしつた。橋を渡つて向うへ通る、暗の晩の、榛の木の下あたり、螢の数の宙へいかいことちらちらして、常夏の花の、倅立つのが、貴方の顔のあたりじや、と目を瞑つて、おめでたを祈りましたに……」

声も寂しゆう、

「お寺の鐘が聞えました。」

「南無阿弥陀仏、」
なむあみだぶつ

「お可哀相に、初産で、その晩、のう。」
ういざん

厭いやな事でござります。黒門へ着かしつて、産所へ据えよう、

としますとの、それ、出養生の嬢様の、お産の床と同一おんなじじや。

（ああ、青い顱はちまき巻をした方が、寝てでござんす、ちつと傍わきへ）

と……まあ、難産の嫁御がそう言わしつけ。

其そいつ奴に、負けるな、押潰おつつぶせ、と構しとねわず褥しとねを据えましたが、夜

露を受けたが悪かったか、もうお医者でも間に合わず。

（あなたも。……口惜くやしい）と恍惚うつつりして、枕にひしと喰くいつか

しつて、うむと云うが最期で、の、身二ツになりはならしつ

たが、産声も聞えず、両方ともそれなりけり。

余りの事に、取逆とりさか上せさしたものと見えまして、喜太郎

様はその明方、裏の井戸へ身を投げてしまわした。

井戸替かえもしたなれど、不氣味じやで、誰も、はい、その水を飲のみたがりませぬ処いげたから、井桁いげたも早あおすすきや、青芒あおすすきにかくれましたよ。

七日に一度、十日に一度、仁右衛門親仁や、私わしがとこの宰八わか——少はじめいものは初はじめから恐ろしがって寄よつつきませぬで——年役に出かけては、雨戸を明けたり、引窓を繰くつたり、日も入れ、風も通したなれど、この間のその、のう、嘉吉が氣が違ちがいました一件の時から、いい年をしたものまで、黒門を向うの奥このしたやみへ、木下のぞ闇を覗のぞきますと、足が縮すくんで、一寸も前へ出はいたしませぬ。

簪かんざしの蒼い光たまつた珠も、大方蛸たまたまであろう、などと、ひそひそうわさ風説うわさをします処へ、芋ずいき※の葉に目口のある、小さいのがふら

ふら歩行あるいて、そのお前様、

（秋谷邸の細道じゃ、

五

誰方が見えても……）

でござりましょう。人足ひとあしが絶えらとなれば、草が生えるばかりじゃ。ハテ黒門の別宅は是非に及ばぬ。秋谷邸の本家だけには、人足が絶やしないものを、どうした時節か知らぬけれど、鶴谷の寿命が来たのか、と喜十郎様は、かさねがさねおつむりが真白まっしろで。おふくろ様も好いいお方、おいとしい事でござります。

おお、おお、つい長話になりまして、そちこち刻限、ああ、可厭いやな芋※⁶の葉が、唄あうて歩行あるく時分になりました。」
と姥あたりは四辺みまわを眊みまわした。浪の色が蒼くなった。

寂然^{しん}として、果^{はて}は目を瞑^{つむ}つて聞入^{きこ}つた旅僧^{りょそう}は、夢ならぬ顔を上げて、葭簣^{よしざ}から街道^{あとしぎ}の前後^{なご}を視^みめたが、日脚^{ひく}を仰^あぐまでもない。

「身に染^きむ話^{はな}に聞惚^{きと}れて、人通りがもう影法師^{かげぼうし}じゃ。世の中に種々^{いろいろ}な事^{こと}がある。お婆^{おば}さん、お庇^{かげ}で沢山^{たん}学問^{がくもん}をした、難有^{ありがと}う、どれ……」

十五

「そして、御坊^{ごぼう}様^{さま}は、これからどこまで行^ゆかつしやりますよ。」包^{ふく}を引寄^{ひきよ}せる旅僧^{りょそう}に連れて、姥^{うば}も腰^{こし}を上げて尋^{たず}ねると、「鎌倉^{かまくら}は通越^{とくえつ}して、藤沢^{ふじざわ}まで今日の内^{うち}に出^でようという考^{かん}えだつたが、もう、これじゃ葉山^{あかり}で灯^{あかり}が点^つこう。」

おお、^六そう言や、森戸の松の中に、ちらちらと灯^ひが見える。」

「よう御存じでござりますの。」

「まだ俗^{うち}の中に知つています。そこで鎌倉を見物にも及ばず、東海道の本筋へ出ようという考えじゃったが、早や遅い。

修業が足りんで、樹下、石上、野宿も辛し、」

と打^{うち}微笑^{ほほえ}み、

「鎌倉まで行^ゆきましょうよ。」

「それはそれは、御不都合な、つい話に実^いが入りまして、まあ、とんだ御足^{おみあし}を留めましてござります。」

「いや、どういたして、忝^{かたじけな}い。私は尊いお説教を聴問したよ
うな心持じゃ。」

何、嘘ではありません。

見なざる通り、行脚あんぎやとは言いながら、気散じの旅の面白さ。

蝶々蜻蛉とんぼの道連みちづれには墨染こももの法衣ころもの袖の、発心の涙が乾いて、

おのずから果敢はかない浮世の露も忘れる。

いつとなく、仏の御名みなを唱えるのにも遠ざかつて、前刻さつきも、

お前ね。

実はここに来しなであつた。秋谷明神と云う、その森の中

の石段の下を通つて、日向ひなたの麦畠ばたけへ差懸さしかかると、この辺には余

り見懸てぬぐいけぬ、十八九の色白な娘が一人、めりんす友染ゆうぜんの襷懸たすきが

け、手拭てぬぐいを冠かぶつて畑に出ている。

歩行あるきながら振返つて、何か、ここらにおもしろい事もな

いか、と徒口むだぐち半分、檜笠ひのきがさの下から頤おとがいを出して尋ねるとね。

はい、浪打際に子産石こうみいしと云うのがござんす。これこれでこ

この名所、と土地自慢も、優しく教えて、石段から真直まっすぐに、

はたなか

畑中を切つて出て見なさんせ、と指さしをしてくれました。

いかに石が名所でも、男ばかりで児こが出来るか。何と、姉あねや、と麦にかくれる島田のぞを覗いて、天狗てんぐわらいに冴さえて来ました、面目もない不ふりようけん了簡。

嘉吉とかを聞くにつけても、よく気が違わずに済んだ事、とお話中に悚ぞつ気としたよ。

黒門の別荘とやらの、話を聞くと引入れられて、気が沈んで、しんみりと真心から念仏の声が出ました。

途中すがらもその若い人たちを的に仏名を唱えましょう。木賃の枕に目を瞑ねむつたら、なお歴然ありあり、とその人たちの、姿も見えるような気がするから、いつそよく念仏が申されようと考える。

聞かしておくれの、お婆さん、お前は善智識、と云うても

可^よい、私は夜通しでも構わんが。

あんまり身を入れて話をする——聞く——していたので、邪魔になつては、という遠慮か、四五人こつちを覗^{のぞ}いては、
すどおり
素通をしたのがあります。

近在の人と見える。風呂敷包を腰につけて、草履穿^ばきで裾
をからげた、杖を突張^{つっぱ}った、白髪^{しらが}の婆さんの、お前さんとは
ちかづき
知己と見えるのが、向うから声をかけたつけ。お前さんが話
に夢中で、気が着かなんだものだから、そのままほくほく去^いつ
てしまった。

私も聞惚^{ききと}れていた処、話の腰を折られては、と知らぬ顔で
居たつけよ。

大層お店の邪魔をしました、実に済まぬ。」
と扇を膝に、両手で横に支^つきながら、丁寧^{ていねい}に会釈する。

姥うばはあらためて右瞻左瞻とみこうみたが、

「お上人様、御殊勝にござります、御殊勝にござります。難有ありがた

や、」

と浅かっとうからず渴仰して、

「本家が村一番の大長者じやと云えば、申憎い事ながら、どこを宿ともお定めない、御見懸け申した御坊様じや。推しても行えこうつて回向をしよう。ああもしよう、こうもしてやろう、とときふせ斎布施をお目当で……」

とずつきり云った。

「こりや仰おつしや有りそうな処、御自分の越度おちどをお明かしなさりまして、路々念仏申してやろう、と前途さきをお急ぎなさります飾りの無いお前様。

道中、お髪ぐしの伸びたのさえ、かえつて貴う拝まれまする。

どうぞ、その御回向を黒門の別宅で、近々として進ぜて下さりませぬか。……

もし、鶴谷でもどのくらい喜びますか分りませぬ。」

十六

鶴谷が下男、苦虫の仁右衛門親仁。角のある人魂めかして、ぶらりと風呂敷包を提げながら、小川べりの草の上。

「なあよ、宰八、」

「やあ、」

と続いた、手ぼう蟹は、夥間の穴の上を冷飯草履、両足をしやちこばらせて、舞鶴の紋の白い、萌黄の、これも大包。夜具を入れたのを引背負ったは、民が塗炭に苦んだ、戦国時代

の驅落めく。かけおち

「何か、お前が^{でつくわ}出会した——黒門に逗留^{とまりゆう}してござらしやる少^わ

え人が、手鞠^{てまり}を拾ったちゆうはどこらだつけえ。」

「直^じきだ、そうれ、お前^{めえ}が行^ゆく先に、猫柳がこんもりあんべい。」

「おお、」

「その根^ね際^ぎだあ。帽子のふちも、ぐったり、と草臥^{くたぶ}れた形での、そこに、」

と云った人声に、葉裏から螢が飛んだ。が、三ツ五ツ星に紛れて、山際薄く、流^{ながれ}が白い。

この川は音もなく、霞のように、どんよりと青田の村を這^はうのである。

「ここだよ。ちようど、」

と宰八はちよつと立留まる。前途ゆくてに黒門の森を見てあれば、秋谷の夜はここよりぞ暗くなる、と前途に近く、人の足許あしもとが朦朧もうろうと、早やその影が押寄せて、土手の低い草の上へ、襲いかかる風情だから、一人が留まれば皆留まつた。

宰八の背後あとから、もう一人。杖ステッキを突いて続いた紳士は、村の学校の訓導である。

「見馴みなれねえ旅の書生さんじゃ、下ろした荷物に、寝ねそべりかかつて、腕を曲げての、足をお前めえ、草の上へ横投げに投出して、ソレそこいら、白鷺しらさぎの鶏冠とさかのように、川面かわづらへほんのり白く、すいすいと出て咲いていら、昼間見ると桃色の優しい花だ、はて、蓬よもぎでなしよ。」

「石竹せきちくだつぺい。」

「撫子なでしこの一種です、常夏とこなつの花と言うんだ。」

と訓導は姿勢を正して、杖を一つ、くるりと廻わすと、ド
ブン。

「ええ！ 驚かなくても宜しい。今のは蛙だ。」

「その蛙……いんねさ、常夏け。その花を摘んでどうするだ
か、一束手ぶしに持ったがね。別にハイそれを視めるでもね
えだ。美しい目水晶ぱちくりと、川上の空さ碧く光つとる星
に向いて、相談打つような形だね。」

草鞋がけじやで、近辺の人ではねえ。道さ迷ったら教えて
進ぜべい、と私もう内へ帰って、婆様と、お客に売った渋茶
の出殻で、茶漬え掻食うばかりだもんで、のつそりその人の
背中へ立って見ていると、しばらく経つてよ。

むつくりと起返つた、と思うとの。……（爺様、あれあれ、）
その時、宰八川面へ乗出して、母衣を倒に水に映した。

「てまり手毬が、手毬が流れる、流れてくる、拾つてくれ、礼をす
る。」

見ると、成程、泡も立てずに、夕焼が残つたような尾を曳ひ
いて、その常夏を束にした、真丸まんまるいのが浮いて来るだ。

（ぜにかね銭金はさて措おかつせえ、だが、足を濡らすは、厭こんな事だ。）
と云う間も無え。

突然いきなりざぶりと、少え人わけは衣服きものの裾すそを掴つかんだなりで、川の中
へ飛込んだつけ。

押問答に、小半時かかればとつて、直ぐに突ん流れるよう
な疾え水脚はえでは、コレ、無えものを、そこは他国の衆まんなかで分ら
ねえ。稲妻を掴つかえそうな慌て方で、ざぶざぶ真中まんなかで追おつかける、
人の煽あおりで、水が動いて、手毬は一つくると廻つた。岸の

方へ寄るでねえかね。

（えら！ 氣の疾え先生だ。さまで欲しけりや算段のうして、柳の枝を折おつつしよつても引寄せて取つてやるだ、見さつせえ、旅の空で、召ものがびしよ濡れた。）と叱こ言を言いながら、岸へ来たのを拾おう、と私わし、えいやつと蹲しゃがんだが。

こんな川でも、動揺どよみにや浪を打つわ、濡れずば榮螺さざえも取れねえ道理よ。私わしが手を伸のすとの、また水に持つて行ゆかれて、手毬はやつぱり、川の中で、その人が取らしつげがな。……

ここだあ仁右衛門、先生様も聞かつせえ。」

と夜具風呂敷の黄母衣きほろごし越に、茜色あかねいろのその願卷はらまきを捻ねじ向けて、「厭いやな事は、……手毬を拾うと、その下に、猫が一匹居たではねえかね。」

訓導は苦笑いして、

「可^いい加減な事を云う、狂氣^{きちがい}の嘉吉以来だ。お前は悪く変なものに知己^{ちかづき}のように話をするが、水潜^{みずくぐ}りをするなんて、猫化^{ねこけ}の怪談にも、ついに聞いた事はないじゃないか。」

「お前様もね、当前^{あたりまえ}だあこれ、空を飛ぼうが、泳ごうが、活^いきた猫なら秋谷中私^{わし}ら知己^{ちかづき}だ。何も厭^{いや}な事はねえけれど、水ひたしの毛がよれよれ、前足のつけ根なぞは、あか膚^{はだ}よ。げっそり骨の出た死骸^{しがい}でねえかね。」

訓導は打棄^{うちちや}るように、

「何だい、死骸か。」

「何だ死骸か、言わつしやるが、死骸だけに厭なこんだ。金壺眼^{かなつばまなこ}」

を塞^{ふさ}がねえ。その人が毬^{まり}を取ると、三毛の斑^{ふち}が、ぶよ、ぶよ、一度、ぷくりと腹を出いて、目がぎよろりと光ッたけ。そこから鼠色^{きたね}の汚え泡だらけになって、どんみりと流れたわ、水とハイ摺^{すれすれ}々々での——その方は岸へ上つて、腰まですぶ濡れの衣^{きもの}を絞るとつて、帽子を脱いで仰^{あおむ}向けにして、その中き、入れさした、傍^{そば}で見ると、紫もありや黄色い糸もかがつてある、五色^{しき}の——手毬は、さまで濡れてはいねえだっけよ。」

「なあよ、宰八、」

「何^{あん}だえ。」

仁右衛門は沈んだ声で、

「その手毬はどうしたよ。」

「今でもその学生が持つてゐるかね。」

背後^{うしろ}から、訓導がまた聞き挟む。

「忽然^{こつねん}として消え失^うせただ。夢に拾^かつた金子^{かね}のようだね。へ、へ、へ、」

とおかしな笑い方。

「ふん、」

と苦虫は苦つたなりで、てくてくと歩^{ある}行き出す。

「嘘^{うそ}を吐^つけ、またはじめた。大方、お前が目の前で、しゃばん球^{だま}のように、ぱつと消えてでもなくなつたろう、不思議さな。」

「違います、違いますとも！」

仁右衛門の後を打ちながら、

「その人が、」

（爺^{じいさん}様、この里では、今時分手毬をつくか。）

（何^{なん}でね？）

(小児たちが、優しい声、懐なつかしい節で唄うている。

ここはどここの細道じゃ、

秋谷邸の細道じゃ……)

一件ものをの、優しい声、懐なつかしい声じゃ云うて、手毬を突くか、と問わつしやるだ。

とんでもねえ、あれはお前様、芋※ずいきの葉が、と言おうとしたが、待ちろ、芸もねえ、村方の内証を饒舌しゃべつて、恥搔かくは知慧ちえでねえと、

(何なにお前様めえさま、学校で体操するだ。おたま杓子じゃくしで球をすくつて、

ひるてんの飛とびつこをすればちゅッて、手毬なんか突きつこねえ、)と、先生様の前だけんど、私わし一ツ威張いばつたよ。」

「何だ、見みともない、ひるてんの飛びつことは。テニスだよ、

テニスと言えば可い。」

「かね……私わしまた西洋すずめおどりの雀躍か、と思つたけ、まあ、可ええ。」

「ちつとも可よかあない、」

と訓導は唾つばをする。

「それにしても、奥床しい、誰が突いた毬だろう、と若え方問わつしやるだが。」

のつけから見当はつかねえ、けんど、主ぬしが袂たもとから滝のよう
に水が出るのを見るにつけても、何とかハイ勘考せねばなん
ねえで、その手毬を持つて見た、」

と黄母衣きほろを一つ揺上ゆすりあげて、

「濡れちやいねえが、ヒヤリとしたでね、可いい塩梅あんばいよ、引込ひっこ
んだのは手棒てんぼうの方、」

へへ、とまた独りで可笑おかしがり、

「こつちの手で、ハイ海へ落ちさつしやるお日様と、黒門の森に掛かつたお月様の真中まんなかへ、高くたつこう透かして見つけ。

しゃぼん球だまではねえよ。真円まんまるな手毬の、影も、草に映つたでね。」

「それがまたどうして消えた、馬鹿な！」

と勢いきおい込む、つき反らした杖ステッキの尖さきが、ストンと蟹の穴はさまへ狭つたので、厭な顔をした訓導は、抜きざまに一足飛ぶ。

「まあ、聞かつせえ。

玉味噌の鑑定とは、ちくと物が違うでな、幾ら私わしが捻ひねくつても、どこのものだか当りは着かねえ。

(霞のような小川の波に、常夏とこなつの影がさして、遠くに……)(細道)が聞える処へ、手毬が浮いて……三年五年、旅から旅ある歩行いたが、またこんな嬉しい里は見ない)

と、ずぶ濡ぬれの衣きものを垂しずくれる雫しずくさえ、身体からだから玉がこぼれでもするほどに若え方は喜ばっしゃる。」

十八

「——この上誰か、この手毬おきふしの持主に逢えろとなれば、爺さん、私は本望だ、野山に起臥おきふしして旅をするのもそのためだ。」と、話さっしゃるでの。村を賞ほめられたが憎くねえだし、

またそれまでに思わっしゃるものを、ただわかりましねえで放擲ほかしては、何か私わし、気が済まねえ。

そこで、草原しやがへ蹲しゃがみ込んで、信まことにはなさりますめえけんど、と嘉吉あおに蒼い珠たま授けさしった……」

しばらく黙って、

「の、事を話したらばの。先生様の前だけんど、嘘を吐け、と
 天窓あたまからけなさつしやりそうな少え方わけが、

（おお、その珠と見えたのも、大方星ほどの手毬だろう。）と、
 あのまた碧あおい星を視ながめて云うだ。けちりんも疑わねえ。

（なら、まだ話します事がござります、）とついでに黒門の
 空邸あきやしきの話をするとの。

（川はその邸の、庭か背戸を通つて流れはしないか。）
 と乗出しけよ。……（流れは見さつしやる通りだ）……」

今もおなじような風情である。——薄うつつりと廂ひさしを包こむ小家こいえの、
 紫けぶりの煙の中も繞めぐれば、低く裏山の根にかかった、一刷灰色ひとはけの
 靄もやの間も通る。青田たかひくの高低ふもと、麓でいりの凸凹に従うて、柔やわらかにのん
 どりした、この一卷ひとまきの布は、朝霞には白地の手拭てぬぐい、夕焼には茜あかね

の襟、襷たすきになり帯になり、果は薄はての裳すすきになつて、今もある通り、村はずれの谷戸口やとぐちを、明神の下あたりから次第に子産石こうみいしの浜に消えて、どこへ灌ぐそそということもない。口につけると塩気があるから、海潮うしおがさすのであらう。その川裾かわすそのたよりなく草に隠れるにつけて、明神の手水洗みたらしにかけた献燈の発句には、これを霞川、と書いてあるが、俗に呼んで湯川と云う。霞に紛れ、靄に交つて、ほのぼのと白く、いつも水氣の立つ処から、言い習わしたものらしい。

あの、薄煙うすけぶり、あの、靄こずえの、一際夕暮を染めたかなたこなた

は、遠方おちかたの松の梢こずえも、近間なる柳の根も、いずれもこの水の

淀よどんだ処で。畑はた一つ前途ゆくてを仕切つて、縦に幅広く水氣が立つ

て、小高い礎いしづえを朦朧もうろうと上に浮かしたのは、森の下闇したやみで、靄が

余よそ所よりも判然はつきりと濃くかかったせいで、鶴谷が別宅のその黒

門の一構ひとかまえ

三人は、彼処かしこをさして辿たどるのである。

ここに渠等かれらが伝う岸は、一間ばかりの川幅であるが、鶴谷の自宅の辺あたりでは、およそ三間に拡がつて、川裾は早やその辺からびしよびしよと草に隠れる。

ここへは、流ながれをさかのぼつて来るので、間には橋一つ渡らねばならぬ。

橋は明神の前へ、三崎街道に一つ、村の中に一つ。今しがた渠等が渡つて、ここから見えるその村の橋も、鶴谷の手で欄干はついているが、細流せせらぎの水静かなれば、偏ひとえに風情を添えたよう。青い山から靄の麓へ架かけ渡したようにも見え、低い堤防どての、茅屋かややから茅屋の軒へ、階子はしごを横よこたえたようにも見え、とある大家の、物好ものずきに、長く渡した廻廊かとも視ながめられる。

灯もやや、ちらちらと青田に透く。川下の其方は、藁屋続

きに、海が映つて空も明い。――水上の奥になるほど、樹の

枝に、茅葺の屋根が掛つて、蓑虫が峙したような小家がちの、

それも三つが二つ、やがて一つ、窓の明も射さず、水を離れた

ゆうかしぎ

夕炊の煙ばかり、細く沖で救を呼ぶ白旗のように、風のまに

まに打磨く。海の方は、暮が遅くて灯が疾く、山の裾は、暮

が早くて、燈が遅いそうな。

まだそれも、鳴子引けば遠近に便があろう。家と家とが間

を隔て、岸を措いても相望むのに、黒門の別邸は、かけ離れ

た森の中に、ただ孤家の、四方へ大なる蜘蛛のごとく脚を拡

げて、どこまでもその暗い影を畝らせる。

月は、その上にかかつているのに。……

先達の仁右衛門は、早やその樹立の、余波の夜に肩を入れ

た。が、見た目のさしわたしに似ない、帯がたるんだ、ゆるやかな川添ぞいの道は、本宅から約八丁というのである。

宰八さいいつが言続いで、

「……（外廻りを流れて来るし、何もハイ空家から手毬を落す筈はずはねえ。そんなでも猫の死骸なら、あすこへ持つて行つて打棄うちぢやつた奴があるかも知んねえ、草ぼうぼうだでのう、）と私わし、話をしただね。」

十九

「それからその少え方わけは、（どうだろう、その黒門の空家というのを、一室ひとま借りるわけには行くまいか、自炊を遣やつて、しばらく旅の草臥くたびれを休めたい、）と相談打ぶつたが。

ねえ、先生様。

お前様、今の住居は、隣の嚙々かかあが小児がきい産んで、ぎやあぎや

うるせ

あ煩え、どこか貸す処があるめえか、言わるるで、そん当時黒

門さどうだちゆつたら、あれは、と二の足を踏ふましつけな。」

と横あびざまに浴せかけると、訓導は不意打ながら、さしつた

ステッキ

りで、杖を小脇ひんだに引抱き、

「学校へ通うのに足場が悪くつて、道が遠くつて仕様がないから留やめたんだ。」

「朝寝さつしやるせいだつぺい。」

仁右衛門が重い口で。

訓導は教うるごとく、

「第一水が悪い。あの、また真蒼まつさおな、草の汁のようなものが

飲めるものかい。」

「そうかね——はあ、まず何にしろだ。こつちから頼めばとつて、昼間掃除に行くのさえ、厭いやがります空屋敷じゃ。そこが望み、と仰おつしや有るに、お住居すまい下さればその部屋一ツだけでも、屋根の草が無うなつて、立腐れが保つこんだで、こつちは願つたり、叶かなつたり、本家の旦那だんなもさぞ喜びましょうが、尋常なみてい体うちの家でねえ。あの黒門を潜くぐらつしやるなら、覚悟して行かつせえ、可ようがすか、と念を入れると、

（いやその位の覚悟はいつでもしている。）

と落着いたもんだてえば。

はてな、この度胸どろぼうだら盗賊でも大将株だ、と私わし、油断はねえ、一分別しただがね、仁右衛門よ、」

「おおよ。」

「前刻さつき、着たつきりで、手毬を拾いに川ん中さ飛込んだ時だ。」

旅空かけて衣服きものをどうするだ、と私わし頼まれ効がいもなかったけえ、
気の毒がなつさもあり、急がずば何とかで濡れめえものを夕立だ、
と我鳴がなつった時よ。

（着物は一枚ありますから……）

と見得でねえわ、見得でねえね。極きまりの悪そうに、人の心
を無にしねえで言訳をするように言わしつけが、こいつを睨にら
んで、はあ、そこへ私わしが押惚おっぼれただ。

殊勝な、優しい、最愛いとしい人だ。これなら世話をしても仔細しさいあ
んめえ。第一、あの色白じんでいな仁体じゃ……化ば……仁右衛門よ。」

「何なにい、」

「暗くくなったの、」

「彼むこれ、酉刻むつじゃ。」

「は、南無阿弥陀仏なむあみだぶつ、黒門前は真暗まつくらだんべい。」

「大丈夫、月が射すよ。」

と訓導は空を見て、

「お前、その手毬の行方はどうしたんだい。」

「そこだてね、まあ聞かつせえ、客人が、その最愛らしい容子
じゃ……化、ぼけ」

とまた言い掛けたが、あおすすき青芒が川のへりに、ひとむら雑木一叢、かが畑の
前を背屈み通る真中あたり、まんなか野末の靄をもや一呼吸いきに吸込んだか
と、だしぬけ宰八唐突に、

「はつくしよ！」

胴震いで、たちすく立縮み、

「風がねえで、えら太い蜘蛛の巣だ。ひど仁右衛門、お前、めえはあ、
先へ立って、よく何ともねえ。」

「巢、巣どころか、己おらあ樹の枝から這はいかかった、土蜘蛛を

ひつつか
引搦んだ。」

「ひゃあ、」

「七日風が吹かねえと、世界中の人を吸殺すものだちゅつけ、半日蒸すと、早やこれだ。」

と握にぎりし占めた掌を、自分てのひらで捻開こじあけるようにして開いたが、恐る恐る透すかして見ると、

「何ぢや、蟹か。」

水へ、ザブン。

背後うしろで水車みずぐるまのごとく杖ステッキを振廻まわしていた訓導が、

「長蛇ちようだを逸すか、」

と元氣づいて、高らかに、

「たちまち見る大蛇よこたの路に当って横よこたわるを、剣を抜いて斬きらんと欲すれば老松ろうしようの影！」

「ええ、静しずかにしてくらつせえ、……もう近えだ。」

と仁右衛門は真面目まじめに留める。

「おい、手毬はどうして消えたんだな、焦じれりたい。」

「それだがね、疾はええ話が、御仁体じゃ。化物が、の、それ、た
とい顔を嘗なめればとつて、天窓あたまから塩しおとは言うめえ、と考え
たで、そこで、はい、黒門へ案内しただ。仁右衛門も知つて
の通り——今日はまた——内の婆々殿ばもいりが肝入きんいりで、坊様ぼくを泊とめ
たでの、……御本家からこうやって夜具しよを背負よつて、私わしが出
向くのは二度目だがな。」

二十

「その書生さんの時も、本宅の旦那様、大喜びで、御酒は食あが

らぬか。晩の物だけ重詰じゆうづめにして、夜さりまた搔餅かきもちでも焼いてお茶受けに、お茶も土瓶で持つて行けゆ。

言わつしやつたで、一風呂敷と夜具包みを引背負ひつしよつて出向いたがよ。

へい、お客様前刻せんこくは。……本宅でも宜よろしく申してでござり

ました。お手廻りのものや、何やかや、いずれ明日お届け申

ひとかたけ

します。一餉ほんのお弁当がわり。お茶と、それから臥ふせらつ

しやるものばかり。どうぞハイ緩ゆつくり休まつしやりましと、口

上言うたが、着物は既すでにに浴衣に着換えて、燭台しょくだいの傍わきへ……こ

りやな、仁右衛門や私わしが時々見廻ゆりに行く時、皆閉切みんなつてあつ

て、昼でも暗えから要害に置いてあつた。……先せんに案内をし

た時に、彼あえこれ日が暮れたで、取り敢とず点ともして置いたもんだ

ね。そのお前様めえさま、蠟燭火ろうそくびの傍わきに、首かしい傾かげて、腕組うでぐみみして坐すつ

てござるで、氣になるだ。

（どうかさっせえましたか。）と尋ねるとの。

ここだ！」

と唐突に屹だしぬけと云う。

「ええ何か、」と訓導は一足退ひとあしのく。

宰八は委細構わず。

「手毬の消えたちゆうがよ。（ここに確たしかに置いたのが見えなくなつた。）と若え方が言わつしやるけ。

そうら、始まつたぞ、と私わし一ツ腰をがっくりとやつたが、縁側へつかまつたあ——どんな風に、失なくなつたか、はあ、聞いたらばの。

三ツばかり、どうん、どうん、と屋根へ打附ぶつかつたものがあつた……大おおきな石でも落ちたようで、吃驚びつくりして天井を見上げると、

あすこから、と言わしつけ。仁右衛門、それ、の、西の鉢前の十畳敷の隅っこ。あの大掃除の検査のとき、お巡査まわり様が階子はしごさして、天井裏へ瓦斯がすを点つけて這はい込まつしやる拍子に、洋刀サアベルのこじりあがさかさま鑑みが上あつて倒たになった刀が抜けたで、下に居た饅頭屋うどんのおおづら大面をちよん切つて、鼻柱怪我さかおとアした、一枚外れている処だ。

どんと倒落さかおとしに飛んで下りたは三毛猫だあ。川の死骸と同じ毛色じゃ、（これは、と思うと縁へ出て）……と客人の若え方が言わつしやつたで、私わしは思わきわずの傍へ退いたが。

庭へ下りて、草茫々ぼうぼうの中へ隠れたのを、急いで障子の外へ出て見てゐる内に、床の間に据えて置いた、その手毬がき。はい、忽然こつねんと消えちゆうは、……ここの事だね。」

「消えたか、落したか分るもんか。」

「はあ、分らねえから、変でがしよ、」

「何もちつとも変じやない。いやしくも学校のある土地に不思議と云う事は無いのだから。」

「でも、お前様めえさま、その猫がね、」

「それも猫だか、鼬いたちだか、それとも鼠ねずみだが、知れたもんじやない。森の中だもの、兎うさぎだつて居るかも知れんさ。」

「そのお前様、知れねえについてでがさ。」

「だから、今夜行つて、僕が正体を見届けてやろうと云うんだ。」

「はい、どうぞ、願えますだ。今までにも村方で、はあ、そんな事を言つて出向いたもののがの、なあ、仁右衛門。」

無言なり。

「前方さきへ行つて目をまわしつけ、」

「馬鹿、」

と憤然むっとした調子で呟つぶやく。

きかぬ氣の宰八、紅くれないはさみの鋏おったを押立て、

「お前様もまた、馬鹿だの、仁右衛門だの、坊様だの、人大勢の時に、よく今夜来さしつた。今まではハイついぞ行つて見ようとも言わねえだつけが。」

「あたりまえ当前です、学校の用を欠いて、そんな他愛たわいもない事にかかり合つていられるもんかい。休暇になつたから運動かたがた来て見たんだ。」

「へ、お前様なんざ、昼が刎はねるばかりでも、投飛ばされる御連中だ。」

「何を、」

「わし私なんざ臆病おくびょうでも、その位の事にや馴なれたでの、船へ乗つた氣で押おっこらえるだ。どうしてどうして、まだ、お前……」

「宰八よ、」

と陰気な声する。

「おお、」

「ぬしやまた何も向う面づらになつて、おかしなもののお味方をするにや当るめえでねえか。それでのうてせえ、おりや重いもので押伏おっふせられそうな心持だ。」

と溜息ためいきをして云つた。浮世を鎖とぎしたような黒門の礎いしづえを、靄もやがさそうて、向うから押し拡がつた、下闇したやみの草に踏みかかり、茂しげりの中へ吸い込まれるや、否や、仁右衛門が、

「わつ、」

と叫んだ。

「はじめの夜は、ただその手毬が失せましただけで、別に変つた事件ことも無かつたでございますか。」

と、小次郎法師の旅僧たびそうは法衣ころもの袖を掻合かきあせる。

障子を開けて縁の端近はしぢかに差向いに坐つたのは、少い人わか、すなわち黒門の客である。

障子も普通なみよりは幅が広く、見上げるような天井に、血の足痕あしあともさて着いてはおらぬが、雨垂あまだれが伝つたつたら墨汁インキが降りそ
うな古びよう。巨寺おおでらの壁に見るような、雨漏あまもりの痕あとの画像えすがたは、煤すす
色の壁に吹きさらされた、袖のひだが、浮出たごとく、浸附しみつ
いて、どうやら饅頭まんじゅうの形した笠かぶを被かつてゐるらしい。顔ぞと
見る目鼻はないが、その笠は鴨居かもいの上になつて、空から畳を
瞰下みおろすような、惟おもうに漏る雨の余り侘わびしさに、笠欲ししと

念じた、壁の心が露れたものであらう——抜群にこの魍魎が
偉大いから、それがこの広座敷の主人のようであるじ
ぱらと鱗のごとく樹の間を落ちた、広縁の敷居際に相對した
旅僧の姿などは、硝子障子に嵌込んだ、歌留多の絵かと疑わ
るる。

「ええ、」

と黒門の年若な逗留客は、火のない煙草盆の、遙に上の方
で、燧灯を摺つて、静に吸いつけた煙草の火が、その色の白い
頬に映つて、長い眉を黒く見せるほど室の内は薄暗い。――
差置かれたのは行燈である。

「まだその以前でした。話すと大勢が気にしますから、実は
宰八と云う、爺さん……」

「ああ、手ぼうの……でございますな。」

「そうです。あの親仁おやじにも謂いわないでいたんですが、猫と一所に手毬の亡くなりますちつと、前です。」

この古館ふるやかたのまずここへ坐りましたが、爺さんは本家へ、と云つて参りました。黄昏たそがれにただ私一人で、これから女中が来て、湯を案内する、上あがつて来ます、膳ぜんが出る。床を取る、寝る、と段取の極きまりました旅籠屋はたごやでも、旅は住心の落着かない、全く仮の宿です……のに、本家でもここを貸しますのを、承知する事か、しない事か。便りに思う爺さんだつて、旅他国あぜみちで畔道あぜみちの一面識。自分が望んでではありませんが、家と云えば、この畳を敷いた——八幡不知やわたしらず。

第一要害がまるで解わかりません。真中まんなかへ立つてあつちこつち瞻みまわしただけで、今入つて来た出口さえ分らなくなりましたほどです。

大袈裟おおげさに言えば、それこそ、さあ、と云う時、遁路にげみちの無い位で。夏だけに、物の色はまだ分りましたが、日は暮れるし、あなた貴僧、黒門までは可いい天気だったものを、急に大粒な雨！とびっくり吃驚おどろしますように、屋根へ掛かりますのが、この蔽おほかぶさった、けやき櫟けやきの葉の落ちますのです。それと知りつつ幾たびも気になつては、縁側から顔を出して植込の空を透かしては見い見いしました、」

と肩を落して、仰ぎぎ様に、廂ひさしはずれの空を覗のぞいた。

「やつぱり晴れた空なんです……今夜のように。」

「しますると……」

旅僧は先祖が富士を見た状さまに、首あげて天井の高きを仰ぎぎ、
「この、時々ぱらぱらと来ますのは、木この葉でございますかな。」

「御覽なさい、星が降りそうですから、」

「成程。その癖音のしますたびに、ひやひやと身うちへ応こたえますで、道理こそ、一雨かかったと思いましたが。」

「お冷えなさるようなら、貴僧あなた、閉めましょう。」

「いいえ、蚊を疵きずにして五百両、夏の夜はこれが千金にも代えられません、かえって陽氣の方がお宜よろしい。」

と顔を見て、

「しかし、いかにもその時はお寂さみしかったでございましょう。」

「實際、貴僧あなた、遙々はるばると国を隔てた事を思い染みました。この

果はてに故郷がある、と昼間三崎街道を通りつつ、考えなかったでもありませんが、場所と時刻だけに、また格別、古里が遠かったんです。」

「失礼ながら、御生国ごしょうごくは、」

「豊前ぶぜんの小倉こくらで、……葉越はこしと言います。」

葉越は姓で、渠かれが名は明である。

「ああ、御遠方じや、」

と更あらためて顔を見る目も、法師は我ながら遙々と海を視ながめる
思いがした。旅の窶やつれが何となく、袖を圧して、その单衣ひとえの縞柄しまがら
にも顛あらわれていたのであつた。

「そして貴僧あなたは、」

「これは申後もうしおくれました、私わたくしは信州松本の在、至つて山家もの
でございます。」

「それじや、二人で、海山のお物語が出来ますね。」
と、明は優しく、人懷なつこい。

「不思議な御縁で、何とも心嬉しく存じますが、なかなかお話相手にはなりません。ただ

承りまするだけで、それがしかし何より私には結構でございます。」

と僧は慇懃である。

明は少し俯向いた。瘠せた頤に襟狭く、

「そのお話と云いますのが、実に取留めのない事で、貴僧の前では申すのもお恥かしい。」

「決して、さような事はございません。茶店の婆さんはこの邸に憑物の——ええ、ただ聞きましたばかりでも、成程、浮ばれそうもない、少い仏たちの回向も頼む。ついては貴下のお話も出ましてな。何か御覚悟がおりなさるそうで、熟と

辛抱をしてはござるが、怪しい事が重なるかして、お顔の色も、日ごとに悪い。

と申せば、庭先の柿の広葉が映るせいで、それで蒼白く見えるんだから、氣にするな、とおつしやるが、お身体からだも弱そうゆえに、老寄夫婦としよりで一層のこと氣にかかる。

昼の内は宰八なり、誰か、時々お伺いはいたしますが、この頃は氣怏きおくれがして、それさえ不沙汰ぶさたがちじゃに因つて、私によくお見舞い申してくれ、と云う、くれぐれもその託ことづけでございました。が何か、最初の内、貴方あなたが御逗留ごとうりゅうというのに元氣づいて、血氣な村の若い者が、三人五人、夜食の惣菜もの持寄り、一升徳利なんぞ提げて、お話対手あいて、夜伽よとぎはまだ穩おだやかな内、やがて、刃物切物、鉄砲持参、手覚えのあるのは、係かけ羅わなに鼠てんぶらの天麩羅を仕掛けて、ぐびぐび飲みながら、夜更けに植

込みを狙うなんという事がありますそうで？――

婆さんが話しました。」

「私は酒はいけず、対手は出来ませんから、皆さんの車座をよく蚊帳の中から見ては寝ました。一時は随分賑にぎやかでした。

まあ、入いかわり立たちかわり、十日ばかり続いて、三人四人ずつ参りましたが、この頃は、ばつたり来なくなりましたんです。」

「と申す事でございますな。ええ、時にその入り交かわり立ち交りにつけて、何か怪しい、」

と言いかけて偶ふと見返った、次の室まと隔ふすまての襖ふすまは、二枚だけ山のように、行燈あんどうの左右に峰を分けて、隣国となりぐにまでは灯が届かぬ。

心も置かれ、後髪も引かれた状さまに、僧は首に氣を入れて、

ぐつと硬くなつて、向直つて、

「その怪しいものの方でも、手をかえ、品をかえ、怯かす。おびや

——何かその……晷がひとりでに持上りますそうであります
が、まったくでございますかな。」

熟じつと視みて聞くと、また俯うつむ向いて、

「ですから、お話しも極きまりが悪い、取留めのない事だと申す
んです。」

「ははあ、」

と胸を引いて、僧くつろは寛いだ状さまに打笑い、

「あるいはそうであろうかにも思いましたよ。では、ただ村
のものが可いい加減な百物語。その実、嘘説うそなのでございます
ので？」

「いいえ、それは事実です。晷あがは上りますとも。貴僧あなた、今に

も動くかも分りません。」

「ええ！ や、それは、」

と思わず、膝を^{すべ}にらした手で、はたはたと^{おさ}圧えると、爪も立ちそうにない上床の^{しょうどい}固い事。

「これが、動くでございますか。」

「ですから、取留めのない事ではありませんか。」

と^{しずか}静に云うと、黙って、ややあつて^{またたぎ}瞬して、

「さよう、余り取留めなくもないようでございます。すると、坐っているものはいかがな儀に相成りましたようか。」

「騒がないで、^{じつ}熟としていさえすれば、何事ありません。動くと申して、別に^{さかき}倒に立つて、裏返しになるというんじゃないのですから、」

「いかにも、まともにそれじゃ、人間が縁の下へ投込まれる

事になりますものな。」

「そうですね。そうなった日には、足の裏を膠にかわで附着くつつけておかねばなりません。

何ともないから、お騒さわぎなさるなと云つても、村の人が肯きかないで、畳のこの合せ目めが、」

と手を支たいて、ずっと掌てのひらをすべにらしながら、

「はじめに、長い三角だの、小さな四角に、縁ふちを開けて、きしきしと合つたり、がらがらと離れたり、しかし、その疾はやい事は、稲妻のように見えます。

そうするともう、わつと言つて、飛ぶやら刎はねるやら、や

あ！ と踏張ふんばつて両方にぎりこぶしの握拳で押えつける者もあれば、いき

なり三宝妈ひばし箸でも火吹竹でも宙で振廻す人もある——まあ一人や二人は、きつとそれだけで縁から飛出して遁にげて行きま

す。」

二十三

「どたん、ばたん、豪い騒えらぎ。その立騒ぐのに連れて、むくむくむくむく、と畳を、貴僧あなた、四隅から持上げますが、二隅ずつ、どん、どん、順に十畳敷を一時いつときに十ウ、下から握拳を突出すようです。それ毛だらけだ、わあ女の腕だなんて言いますが、何、その畳の隅が裏返るように目まぐるしくかえ翻るんです。

もうそうになると、気の上あがった各自てんでが、自分の手足で、茶碗を蹴け飛ばす、徳利とっくりを踏倒す、海嘯つなみだ、と喚わめきましよう。

その立廻りで、何かの拍子にや怪我もします、踏切ったく

らいでも、ものがものですから、片足切られたほどに思つて、それがために寝ついたのもあるんだそうで。漁師だとか言いましたつけ。一人、わざわざ山越えで浜の方から来たんだつて、怪物に負けない禁厭だ、と鰯の針を鰻鉄がわりに、手拭に畳込んで、うしろ顱巻なんぞして、非常な勢だったんですが、猪口の欠の踏抜きで、痛が甚い、お祟だ、と人に負さつて帰りました。

その立廻りですもの。灯が危いから傍へ退いて、私はそのたびに洋燈を圧え圧えしたんですがね。

坐つてる人が、ほんとに転覆るほど、根太から揺れるのではない証拠には、私が氣を着けています洋燈は、躍りはためくその畳の上でも、静として、ちつとも動きはせんのです。

しかしまた洋燈ばかりが、笠から始めて、ぐるぐると廻つ

た事がありました。やがて貴僧あなた かざぐるま、風車のように舞う、その癖、場所は変らないので、あれあれと云う内に火が真丸まんまるになる、と見ている内、白くなつて、それに蒼味あおみがさして、茫ぼうとして、熟じつと据すわる、その厭いやな光つたら。

映る手なんぞ、水へ突つ込こんでるように、畝うねつたこの筋までが蒼白く透通つて、各自てんでの顔は、皆みんなその熟した真桑瓜まくわうりに目鼻がついたように黄色くなつたのを、見合せて、呼吸いきを詰める、とふわふわと浮いて出て、その晩の座がしらという、一番強がつた男の膝へ、ふツと乗つたことがあるんですね。

わツと云うから、騒ねこぼけいじや怪我をしますよ、と私が暗い中で声を掛けたのに、猫化ねこばけだ遣やつつけれ、と誰だか一人、庭へ飛出して遁にげながら喚わめいた者がある。畜生、と怒鳴つて、貴僧、危いの何のじやない！

ぱる あかる

もと とおり

※と明くなつて旧の通洋燈が見えると、その膝に乗られた男が——こりや何です、可い加減な年配でした——かつて水兵をした事があるとか云つて、かねて用意をしたものらしい、ドギドギする小刀を、火屋の中から縦に突刺してるじやありませんか。」

「大変で、はあ、はあ、」

「ト思ふと一呼吸に、油壺をかけて突壊したもんだから、流れるような石油で、どうも、後二日ばかり弱りました。」

その時は幸に、当人、手に疵をつけただけ、勢で壊したから、火はそれなり、ばったり消えて、何の事もありませんでしたが、もしやの時と、皆が心掛けておきました、蠟燭を点

けて、跡始末に掛^かると、さあ、可訝^{おかし}いのは、今の、怪我で取落した小刀^{ナイフ}が影も見えないではありませんか。

驚きました。これにや、皆^{みんな}が貴僧^{あなた}、茶釜^{ちやがま}の中へ紛れ込んで

祟^{たた}るとか俗に言う、あの蜥蜴^{とかげ}の尻尾^{しつぽ}の切れたのが、行方知れ

ずになったより余程厭^{よつぽど}な紛失^{ふんどし}もの。襟へ入^{よつぽど}つていはしないか、

むずむずするの、禪^{ふんどし}へささつちやおらんか、ひやりとするの、

袂^{たもと}か、裾^{すそ}か、と立つ、坐る、帯を解^はきます。

前にも一度、大掃除の検査に、階子^{はしご}をさして天井へ上った、

警官^{おまわり}さんの洋剣^{サアベル}が、何かの拍子^{さかさま}に倒^{たふさ}になって、鍰元^{つぽもと}が緩^{ゆる}んで

いたか、すつと拔出^{ぬけだ}したために、下に居たものが一人、切ら

れた事がある座敷だそうで。

外のものとは違^{ちが}う。切物^{きりもの}は危^{あや}い、よく探さつしやい、針を

使^しつてさえ始める時^{とき}と了^{しま}う時には、ちゃんと数を合わせるも

のだ。それでもよく紛失するが、晝の目にこぼれた針は、奈落へ落ちて地獄の山の草に生える。で、餓鬼が突刺される。その供養のために、毎年六月の一日は、氷室ひむろの朔日ついたちと云つて、少いわか娘が娘同士、自分で小鍋こなべだ立ての飯ままごとをして、客にも呼ばれ、呼びもしたものだに、あのギラギラした小刀ナイフが、縁の下か、天井か、承塵なげしの途中か、在所ありどころが知れぬ、とあつては済まぬ。これだけは夜よつび一夜さがせ、と中に居た、酒のみの年寄が苦り切ったので、総立ちになりました。

これは、私だつて気味が悪かつたんです。僧はただ目でこた応え、目でうなず頷く。

「洋燈ランブの火でさえ、大概度胆どぎもを抜かれたのが、頼みに思つた豪傑は負傷するし、今の話でまた変な氣になる時分が、夜も深々と更けたでしょう。

どんな事で、どこから抛ほうり投げまいものでもない。何か、あいて対手の方も斟酌しんしゃくをするか、それとも誰も殺すほどの罪もないか、命に別条はまず無かろうが、怪我は今までも随分ある。さあ、捜す、となると、五人の天窓あたまへ燭台しよくだいが一ツです。蟬ろうの継ぎ足しはあるにして、一時いつときに燃すと翌方あけがたまでの便たよりがないので、手分けをするわけには行きません。

もうそうなりますとね、一人じゃ先へ立つのも厭いやがりますから、そこで私が案内する、と背後あとからぞろぞろ。その晩は、鶴谷の檀那寺だんなでらの納所なつしよだ、という悟つた禅坊さんが一人。変化へんげ出でよ、一喝いつかつで、という宵の内の意氣組で居たんです。ちつ

とお差合いですね、」

「いえ、宗旨違いでございます、」

と吃驚びっくりしたように莞爾にっこりする。

「坊さんまじりその人数にんずで。これが向うの曲角から、突当りのはばかりへ、廻縁まわりえんになっています。ぐるりとその両側、雨戸を開けて、沓脱くつぬぎのまわり、縁の下を覗のぞいて、念のため引返して、また便所はばかりの中まで探したが、光るものは火屋ほやの欠かけらも落ちています。」

じゃあ次の室まを……」

と振返つて、その大なる襖おおき ふすまを指した。

「と皆みんなが云うから、私は留めました。」

ここを借りて、一室ひとまだけでも広過ぎるから、来てからまだ一度も次の室まは覗のぞいて見ない。こういう時開けては不可いけませ

ん。廊下から、廁^{かわや}までは、宵から通つた人もある。転倒^{てんどう}して
いる最中、どんな拍子で我知らず持つて立つて、落して来な
いとも限らんから、念のため搜したものの、誰も開けない次
の室^まへ行つてゐるようでは、何か秘^{かく}したんだろうから、よし
有つたにした処で、先方^{さき}にもしその氣があれば、怪我もさせ
よう、傷もつけよう。さて無い、となると、やっぱり氣が済
まんのは同一道理^{おんなじ}。押入も覗^{のぞ}け、棚も見ろ、天井も捜せ、根
太板をはがせ、となつては、何十人でかかった処で、とても
この構えうち隅々まで隈^{くま}なく見尽される訳のものではない。
人足の通つた、ありそうな処だけで切上げたが可^いいでしょう
——
それもそうか、いよいよ魔隠しに隠したものなら、山だか
川だか、知れたものではない。

まあ、人間業で叶わん事に、断念めは着きました、危険な事には変わりはないので。いつ切尖が降つて来ようも知れません。ちつとでも楯になるものと、皆が同一心です。言合わせたように順々に……前へ御免を被りますつもりで、私が釣つておいた蚊帳へ、総勢六人で、小さくなつて屈みました。

変におしおきでも待つてゐるようになお不気味でした。そうか、と云つて、夜夜中、外へ遁出すことは思いも寄らず、で、がたがた震える、突伏す、一人で寝てしまったのがあります、これが一番可いのです。坊様は口の裏で、頻にぶつぶつと念じています。

その舌の纏れたような、便のない声を、蚊の唸る中に聞きながら、私がうとうとしかけました時でした。密と一人が揺

ぶり起して、

（聞えますか、）

と言います。

（ココだ、ココだ、と云う声が、）と、耳へ口をつけて囁くささやんです。それから、それへ段々、また耳移しに。

（失物うせものはココにある、というお知らせだろう、）

（どうか、）と言う、ひそひそ相談ばなし。

耳を澄ますと、蚊帳越の障子のようでもあり、廊下の雨戸のようでもあり、次の間と隔ての襖際ふすまぎわ……また柱の根かとも

思われて、カタカタ、カタカタと響く——あの茶立虫ちやたてむしとも聞

えれば、壁の中で蝙蝠こうもりが鳴くようでもあるし、縁の下で、蟄ひきがえる

が、コトコトと云うとも考えられる。それが貴僧あなた、氣の持ちようで、ココ、ココ、ココヨとも、コトト、とも云うような

んです。

自分のだけに、手を^{ほうたい}繙帯した水兵の方が、一番に蚊帳を出しました。

返す気で、在所^{ありか}をおつしやるからは仔細^{しさい}はない、と坊さんがまた這^{はい}出して、畳に擦附けるように、耳を澄ます。と水兵の方は、真中^{まんなか}で耳を傾けて、腕組をして立つてなすつたつけ。見当がついたと見えて、目で知らせ合つて、上下^{うへした}で頷^{うなず}いて、その、貴僧^{あなた}の背後^{うしろ}になつてます、」

「え！」

と肩越^{ふち}に淵^{さし}を差覗^ぞくがごとく、座をずらして見返りながら、「成程。」

「北へ四枚目の隅の障子を開けますとね。溝へ柄を、その柱^{きつさき}へ、切尖を立掛けてあつたらうではありませんか。」

二十五

「それッきり、危うございますから、刃物は一切厳禁にします。
です。」

遊びに来て下さるも可し、夜伽とおつしやるも難有し、ついでに狐狸こりの類たぐいなら、退治しようも至極いたくごもつともだけれども、刀、小刀ナイフ、出刃庖丁、刃物と言わず、槍やり、鉄砲、——およそそういうものは断りました。

私も長い旅行です。随分どんな処でも歩行あるき廻ります考えで。いざ、と言や、投出なして手を支つくまでも、短刀を一口持ひとふりつています——母の記念かたみで、峠を越えます日暮ひとふりなんぞ、随分それがために気丈夫なんですが、謹つつしみのために桐油とうゆに包んで、

風呂敷の結び目へ、しっかり封をつけておくのですが、

「やはり、おのずから、その、抜出すでございますか。」

「いいえ、これには別条ありません。盗人ぬすつとでも封印のついた

ものは切らんと言います。もつとも、怪物退治ばけものに持つて見え

ます刃物だつて、自分で抜かなければ別条はないように思わ

れますね。それに貴僧あなた、騒動さわぎの起居たちいに、一番気がかりなのは

洋燈ランプですから、宰八爺さんにそう云つて、こうやつて行燈あんどうに

取替えました。」

「で、行燈は何事も、」

「これだつて上りますあが。」

「あの上りますか。宙へ？」

時に、明の、行燈のその皿あたりへ、仕切つて、うつむけに伏せた手が白かった。

「すう、とこう、晷を離れて、」

「ははあ、」

とばかり、僧は明の手のかけで、燈ともしびが暗くなりはしないかと危あやぶんだ目色めつきである。

「それも手をかけて、圧おさえたり、据えようしますと、そのはずみに、油をこぼしたり、台ごとひっくりかえしたりします。障さわらないで、熟じつと柔順おとなしくしてきえいれば、元の通りに据直すわりなおつて、夜よが明けます。一度なんざ行燈が天井へ附着くっつきました。」

「天……井へ、」

「下に蚊帳が釣つてありますから、私も存じながら、寝ていたのを慌てて起上つて、蚊帳越にふらふら釣り下つた、行燈の台を押えようと、うつかり手をかけると、誰か取つて引上げるように鴨居かもいを越して天井裏へするりと入ると、裏へちや

んと乗っかりました。もう堆^{うずたか}い、鼠の塚か、と思う煤^{すす}のかたまりも見えれば、遥^{はるか}に屋根裏へ組上げた、柱の形も見える。可^{おか}訝^しいな、屋根裏が見えるくらいじゃ、天井の板がどこか外れた筈^{はず}だが、とふと気がつく、と、棧^{ゆる}が弛^{ゆる}んでさえおりますまい。

板を抜けたものか知らん、余り変だ、と貴僧^{あなた}。

ここで心が定まりますと、何の事もない。行燈^{あんどう}は蚊帳の外、宵から置いた処にちゃんとあつて、薄ぼんやり紙が白けたのは、もう雨戸の外が明方であつたんです。」

「その晩は、お一人で、」

「一人です、しかも一昨晚。」

「一昨晚？」

と、思わずまたぎよつとする。

「で、何でございますか、その夜伽連よとぎれんは、もうそれ以来懲りて来なくなつたんでございますかな。」

「お待ち下さい、トあの、西瓜すいかで騒いだ夜は、たしかその後でしたつけ。

何、こりや詰つまらない事ですけれども、弱つたには弱りましたよ。……

確か三人づれで、若い衆しゅが見えました。やつぱり酒を御持参で。大分お支度があつたと見えて、するめの足を噛かりながら、冷酒ひやざけを茶碗あわで煽るようなんじやありません。

竹の皮包みから、この陽氣うおじや魚の宵越しは出来ん、と云つて、焼蒲鉾やきかまぼこなんか出して。

旨うまうございましたよ、私もお相伴しましたつけ、
と悠々と迫らぬ調子で、

「宵には何事もありませんでした。可い塩梅な酔心地で、四方山よもやまの話をしながら、蝨いんし一ツ飛んじや来ない。そう言や一体蚊も居らんが、大方その怪物が餌食にするだろう。それにしちやけち吝な食物だ——何々、海の中でも親方となるとかえって小さい物を餌にする。鯨くじらを見ろ、しこ鰯いわしだ、なぞと大口を利いて元気でしたが、やがて酒はお積りになる、夜が更けたんです。ここでお茶と云う処だけれど、茶じや理に落ちて魔物が憑つけ込む。酔醒よいざめにいいもの、と縁側から転がし出したのは西瓜です。聞くと、途中で畑盗人どろぼうをして来たんだそうで——それじやかえって、憑込もうではありませんか。」

「手並を見ろ、狐でも狸でも、この通りだ、と刃物の禁断は承知ですから、小刀ナイフを持ちやおりません、拳固で、貴僧あなた。小相撲こずもうぐらい恰幅かつぶくのある、節くれだつた若い衆でした……」場所がまた悪かった。――

「前夜、ココココ、と云つて小刀ナイフを出してくれたと同一処、敷居から掛けて柱へその西瓜すいかを極めて置いて、大上段おおじょうだんです。ポカリ遣やつた。途端に何とも、凄まじい、石油缶が二三十打ぶつかったような音が台所の方で聞えたんです。

唐突だしぬけですから、宵に手ぐすねを引いた連中も、はあ、と引呼吸ひきいきに魂を引攫ひきさられた拍子に――飛びました。その貴僧あなた、西瓜が、ストンと若い衆の胸へ刎上はねあがつたでしよう。

仰向あおむけに引くりかえると、また騒動ひっ。

それ、肩を越した、ええ、足へ乗つかる。わああ！ 裾へ

纏まつわる、火の玉じゃ。座頭の天窓あたまよ、入道首よ、いや女の生首だつて、可いい加減な事ばかり。夕顔の花なら知らず、西瓜が何、女の首に見えるもんです。

追掛おっかけるのか、逃廻るのか、どたばた跳飛ぶ内、ドンドンドンドンと天井を下から上へ打抜くと、がらがらと棟木むなぎが外れる、戸障子が鳴響く、地震だ、と突伏つつぶしたが、それなり寂しんとして、静しずかになつて、風の音もしくなりました。

ト屋根に生えた草の、葉と葉が入交いりまじつて見え透くばかりに、月が一ツ出ています。——今の西瓜が光るのでした。

森は押被おつかぶさつておりますし、行燈あんどうはもとよりその立廻りせんじんで打倒ぶったおれた。何か私どもは深い狭い谷底に居窘いすくまつて、千仞せんじんの崖の上に月が落ちたのを視ながめるようです。そう言えば、櫻けやきの枝に這はいかかつて、こう、月の上へ蛇のように垂たれかかったの

が、蔦^{つた}の葉か、と思うと、屋根一面に瓜畑になつて、鳴子縄が引いてあるような氣もします。

したたかな、天狗^{てんぐ}め、とのぼせ上^{あが}つて、宵に蚊いぶしに遣^やつた、杉ッ葉の燃残りを取つて、一人、その月へ投げつけたものがありました。

もろいの、何の、ぼろぼろと朽木のようにその満月が崩れると、葉末の露と一つになつて、棟の勾配^{こうばい}を迂^{すべ}り落ちて、消えたは可^いいが、ぽたりぽたり雫^{しずく}がし出した。頸^{えり}と言わず、肩と言わず、降りかかつて来ましたが、手を当てる、とべとりとして粘る。嗅^かいでみると、いや、貴僧^{あなた}、悪甘^{あま}い匂と言つたら。

夜深^{ちなまぐさ}しに汗ばんで、蒸々^{むしむし}して、咽喉^{のど}の乾いた処へ、その匂い。血腥^{ちなまぐさ}いより堪^{たま}りかねて、縁側を開けて、私が一番に庭へ

出ると、皆も跣足みんなはだしで飛下りた。

驚いたのは、もう夜が明けていたことです。山の巔いただきの方は蒼あおくなつて、麓ふもとへ靄もやが白んでいました。

不思議な処へ、思いがけない景色を見て、和蘭陀オランダへ流された、と云うのがあるし、堪らない、まず行燈あんどうをつけ直せ、と怒鳴つたのが居る。

屋根のその辺だ、と思う、西瓜のあとには、鳥が居て、コトコトと嘴はしを鳴らし、短夜みじかよの明けた広縁には、ぞろぞろ夥おびただしい、褐色かばの黒いのと、松虫鈴虫のようなのが、うようよして、ざつと障子へ駆上かけあがつて消えましたが、西瓜の核たねが化なつたんですつて。

連中は、ふらふら八と二日酔いのような工合ぐあいで、ぼんやり黒門を出て、川べりに帰りました。

橋の処で、杭にかかつて、ぶかぶか浮いた真蒼な西瓜を見て、それから夢中で、遁げたそうです。

昼過ぎに、宰八が来て、その話。

私はその時分までぐっすり寝ました。

この時おかしかったのは、爺さんが、目覚しに茶を一つ入れてやるべいつて、小まめに世話をして、佳い色に煮花が出来ましたが、あいにく西瓜も盗んで来ない。何かないか、と考えて、有る——台所に糖味噌が、こりや私に、と云つて一々運ぶも面倒だから、と手の着いたのじゃあるが、桶ごと持つて来て、時々爺さんが何かを突込んでおいてくれるんです。一人だから食べ切れないで、直きつき過ぎる、と云つて、世話もなし、茄子を蒂ごと生のもので漬けてありました。可い漬り加減だろう、とそれに気が着いて、台所へ出ましたつけ。

（お客様あ、）

（何だい。）

（昨夜^{ゆうべ}凄^{すさま}じい音がしたと言わしつけね、何にも落^{おつ}こちたものはねえね。）

って言いながら、やがて小鉢へ、丸ごと五つばかり出して来ました。

薄お納戸の好^いい色で。」

二十七

「青葉の影の射^さす処、白瀬戸の小鉢も結構な青磁の菓子器に装^もつたようで、志の美しさ。

箸^{はし}を取ると、その重^{かさな}った茄子^{なす}が、あの、薄皮の腹のあたり

で、グッ、グッ。

一ツ音を出すと、また一つグッ、もう一つのもググ、ググと声を立てるんですものね。

変な顔をして、宰八が、

（お客様、聞えるかね。）

（ああ鳴くとも。）

（ちんじちようようだ、此奴こいつ）

と爺様じいさんが鉈豆なたまめのような指の尖さきで、ちよいと押すと、その圧おされたのがグググ、手をかえるとまた他ほかのがググ。

心あつて鳴くようで、何だか上になった、あの蒂へたの取手まで、小さな角つのらしく押立おったつたんです。

また飛出さない内に、と思つて、私は一ツ嚙かじつたですよ。」

「召食めしあがったか。」

と、僧は怪訝顔で、

「それは、お豪い。」

「何聞く方の耳が鳴るんでしょうから、何事ありません、
茄子の鳴くわけは無いのですから。」

それでも爺さんは苦切つて、少い時にや、随分悪物食をし
たもので、葬い料で酒エ買つて、犬の死骸なら今でも食う
が、茄子の鳴くのは厭だ、と言います。

もつとも変なことは変ですが、同じ気味の悪い中でも、対手
が茄子だけに、こりやおかしくつて可かつたですよ。」

「茄子ならば、でございますが、ものは茄子でも、対手は別
にございましょう。」

明は俯向いて莞爾した、別に意味のない笑だつた。

「で、そりや昼間の事でございすな。」

「昨日の午後ひるすぎでした。」

「昼間からは容易でない。」

と半ばつふや呟くがごとくに云つて、

「では、昨夜あたりはさぞ……」

と聞く方が眉をひそ顰める。

「ええ、酷ひどうございました、どうせ、夜が寝られはしないんですから、」

「それでお窶やつれなさるのじゃ、貴下あなた、お顔の色がとんだ悪い……

茶店の婆さんが申したも、その事でございます。

唯今ただいまお話を伺いました。そんなこんなで村の者も行ゆかなく

なり、爺様も夜は恐がつて参りませんから、貴下ごようすの御容子が分らないに因つて、家つきの仏を回向えこうかたがた、お見舞申し

てはくれまいか、と云うに就いて、推参したのでございますが、いや、何とも驚きました。

いずれ御厄介に相成らねばなりません、私もどうか唯今のその茄子の鳴くぐらいな処で、御容赦が願いたい。

どこと云つて三界宿^{さんがい}なし、一泊御報謝に預る気で参つたわけ。なかなか家つきの幽霊、祟^{たたり}、物怪^{もののけ}を済度しようなどという道德思ひも寄らず。実は入道名^なさえ持ちません。手前勝手、申訳のないお詫びに刺つたような坊主。念仏さえ碌^{ろく}に真心からは唱えられんでございまして、御祈祷僧^{ごぎとうそう}などと思われましては、第一、貴下の前へもお恥かしゅうございしますが、いかがでございました。お宿を願ひましても差支えはないでございましょうか。いくらか覚悟はして参りましたが、目のあたりお話を伺ひましては、ちと二の足でございしますが。」

「一人でも客がありますと、それだけ鶴谷では喜びますそうですね。持主の本宅が喜びますものを、誰に御遠慮が入りますものですか。私もお連つれがあつて、どんなに嬉しいか知れません。」

「そりゃ、鶴谷殿はじめ、貴下の思召しはさように難有ありがとうございまして、別にその……ええ、まず、持主が鶴谷としますと、この空屋敷の御支配でございますな、——その何とも異様な、あの、その、」

「それは私も御同然です。人の住むのが気に入らないので荒れるのだらうと思ひますが。」

そこなんです、貴僧あなた。逆いさからさえしませんければ、昼も行燈あんどう

も何事もないのですもの。戸障子に不意に火が附いてそこいらめらめら燃えあがる事がありまして、慌てて消す処は破

れ、水を掛けた処は濡れますが、それなりの処は、後で見ますと濡れた様子もないのですから。

座敷だつていくらもあります、貴僧、」

とふと心づいたように、

「御一所でお煩うるさければ、隣のお座敷へいらつしやい。何か正体を見届けようなぞと云つては不可いませんが、鶴谷が許したお客僧が、何も御遠慮には及びません。

ただすらりと開かないで、何かが圧おさえてでもいるようでしたら、お見合せなさいまし。逆さかうと悪いんですから。」

二十八

「なかなか、逆さからいますどころではございません、座敷好み

なんぞして可いものでございますか。

あの襖を振向いて熟と視ろ、とおっしゃったって、容易にやそちらも向けません次第で、御覧の通り、早や固くなっております。

お話につけて申しますが、実は手前もこの黒門を潜りました時は、草に支えて、しばらく足が出ませんでした。

それと申すが、まず庭口と思う処で、キリキリトーンと、余程その大轆轤の、おおろくろ 芻釣瓶を汲上げますような音がいたす。

もつとも曰くづきの邸ながら、いわ 貴下お一方はまずともかく

もいらつしやる。人が住めば水も要ろうで、何も釣瓶の音が不思議と云うでは、道理上、こりや無いのでありまするが、婆さんに聞きました心積り、こころづも 学生の方が自炊をしてお在と云えば、土瓶か徳利に汲んで事は足りる、と何となく思つてでも

おりましたせい、そのどうも水を汲む音が、馴なれた女中衆おなごしゅでありそうに思われました。

ト台所の方を、どうやら嫋娜すらりとした、脊の高い御婦人が、
たそがれ黄昏に忙しい裾捌すそさばきで通られたような、ものの氣勢けはいもござい
 ます。

何となく賑にぎやかな様子が、七輪に、晩のお菜かずでもふつつ煮
 えていようという、豆腐屋さ——ん、と町方ならば呼ぶ声の
 しそうな様子で。

さては婆さんに試のぞされたか、と一旦いったんは存じましたが、こう笠
 を傾けて遠くから覗のぞ込みました、勝手口の戸からかけて、棟
 へ、高く烏瓜からすうりの一杯にからんだ工合ぐあいが、何様、何ヶ月も閉切しめきり
 らしい。

ござったかな、と思ひながら、櫟くすぐつたいような御門内の草

を、密と蹈そつふんで入りますと、春さきはさぞ綺麗きれでございましてよ。
う。一面に紫雲英げんげが生えた、その葉の中へ伝わって、断々きれきれながら、一条ひとすじ、蒼あおずんだ明るい色のものが、這はつたように浮いたように落ちています。上へさした森の枝を、月が漏る影に相違は無さそうなが、何となく婦人の黒髪、その、丈長く、
足許あしもとに光るようで。

変に跨またぎ心地が悪うございますから、避よけて通ろうといたしますと、右の薄光りの影の先を、ころころと何か転げる、たちまち顔あらわが露れたようでございましたつけ、熟よく見ると、兎うさぎなんで。

ところでその蛇のような光る影も、向むかわつて、また私わたくしの出途でさきへ映りましたが、兎はくくるくと寝転びながら、草の上を見附けの式台の方へ参る。

これが反対だと、旧の潜門へ押出されます処でございました。強いて入りますほどの度胸はないので。

式台前で、私はまず挨拶をいたしたでございます。

主もおわさば聞し召せ、かくの通りの青道心。何を頼みに

とくだつじようぶつ えこう

得脱成仏の回向いたそう。何を力に、退散の呪詛を申そう。

おんすがた

御姿を見せたまわば偏に礼拝を仕る。世にかくれます神なら

ひとえ

つかまつ

ば、念仏の外他言はいたさぬ。平に一夜、御住居の筵一枚を

おすまい むしろ

貸したまわれ……」

——旅僧はその時、南無仏と唱えながら、漣のごとき杉の

ささなみ

木目の式台に立向い、かく誓つて合掌して、やがて笠を脱い

いちゆう

で一揖したのであった。——

「それから、婆さんに聞きました通り、壊れ壊れの竹垣につ
いて手探りに木戸を押しますと、直ぐに開きましたから、頻

あ

しきり

に前刻さつきの、あの、えへん！ えへん！ 咳せきばらいをしながら——酷ひど

くなっておりますな——芝生を伝わって、夥おびただしい白粉おしろいの花の中を、これへ。お縁側からお邪魔をしました。

あの白粉の花は見事です。ちらちら紅べに色のが交つて、咲いていますが、それにさえ、貴方あなた、法衣ころもの袖の障さわるのは、と身体からだをすぼめて来ましたが、今も移香うつりががして、憚はばかり多い。

もと花畑であつたのが荒れましたろうか。中に一本、見上げるような丈のびた山百合の白いのが、うつむいて咲いていました。いや、それにもまた慄然ぞっとしたほどでございますから。

何事がございましたでしょうか、自力を頼んで、どうのここの、と申すようなことは夢にも考えておりません。

しかし貴下あなたは、唯今うけたまわりましたような可怖おそろしい只中ただなか

に、よく御辛抱なさいます、実に大胆でおいでなさる。」

「私くらい臆病おくびょうなものはありません。……臆病で仕方がないから、なるがまかせに、抵抗しないで、自由になっているのです。」

「さあ、そこでございます。それを伺いたいのが何より目的めあてで参りましたが、何か、その御研究でもなさりたい思召おぼしめしで。」

「どういたしましたして、私の方が研究をされていても、こちらで研究なんぞ思ひも寄らんです。」

「それでは、外に、」

「ええ、望み——と申しますと、まだ我ががあります。実は願事があつて、ここにこうして、参籠さんろう、通夜をしておりますよ
うなものです。」

「それが貴僧あなた、前刻さつきお話をしかけました、あの手毬てまりの事なんです。」

「ああ、その手毬が、もう一度御覧なさりたいので。」

「いいえ、手毬の歌が聞きたいのです。」

と、うつとりと云った目の涼しさ。月の夢を見るようなれば、変った望み、と疑いの、胸に起る雲消えて、僧は一膝進ひとひざめたのである。

「大空の雲を当てにいずことなく、海があれば渡り、山があれば越し、里には宿つて、国々を歩行あるきますもの、詮せんずる処、ある意味の手毬唄を……」

「手毬唄を。……いかなが次第でございます。」

「夢とも、現^{うつ}とも、幻とも……目に見えるようで、口には謂^いえぬ——そして、優しい、懐^{なつか}しい、あわれな、情のある、愛の籠^{こも}った、ふつくりした、しかも、清く、涼しく、悚^{ぞつ}然とする、胸を搔^{かきむし}撈るような、あの、恍惚^{うつとり}となるような、まあ例えて言えば、芳^{かんば}しい清らかな乳を含みながら、生れない前^{さき}に腹の中で、美しい母の胸を見るような心持の——唄^{うた}なんです、その文句を忘れたので、命にかけて、憧^{あこが}憬れて、それを聞きたいと思いますんです。」

この数分時の言^{ことば}の中に、小次郎法師は、生れて以来、聞^きいただけの、風と水と、鐘の音、楽、あらゆる人の声、虫^{むし}の音、木^この葉^はの囁^{ささや}きまで、稲妻のごとく胸^{うち}の裡に繰返し、なおかつ覚^さえただけの経文を、颯^{さつ}と金字紺泥に瞳^{こんじこんでい}に描いて試みたが、それかと思うのは更に分らぬ。

「して、その唄は、貴下^{あなた}お聞きになつたことがございましたよ
うか。」

「小児^{こども}の時に、亡くなつた母親が唄いましたことを、物心覺
えた最後の記憶に留めただけで、どういふのか、その文句を
忘れたんです。」

年を取るに従うて、まるで貴僧^{あなた}、物語で見る切ない恋のよ
うに、その声、その唄が聞きたくツてなりません。

東京のある学校を卒業^でますのを待かねて、故郷へ歸つて、
心当りの人に尋ねましたが、誰のを聞いても、どんなに尋ね
ても、それと思うのが分らんです。

第一、母親の姉ですが、私の学資の世話をしてくれます、叔
母がそれを知りません。

ト夢のように心着いたのは、同一町^{おなじ}に三人あつた、同年^{おなじ}

ごろの娘です。

（産んだその子が男の児なら、

京へ上のぼせて狂言させて、

寺へ上てならいぼせて手習させて、

寺の和尚が、

道楽和尚で、

高い縁から突落されて、

こうがい
笄落し

こまぐら
小枕落し、

と、よく私を遊ばせながら、母も少わかかった、その娘たちと、

毬も突き、追羽子もした事を現うつづのように思出しましたから、

それを捜せば、きつと誰か知っているだろう、と気の着いた

夜半よなかには、むつくりと起きて、嬉しさに雀躍こおどりをしたんですが、

貴僧あなた、その中の一人うちは、まだ母の存命の内に、雛祭ひなの夜なくなりました。それは私も知っている――

一人は行方が知れない、と言います……

やつと一人、これは、県の学校の校長さんの処へ縁づいて
いるという。まず可よし、と早速訪ねて参りましたが、町はず
れの侍町、小流こながれがあつて板塀いたへ続きの、邸ていごとに、むかし植えた
紅梅が沢山あります。まだその古樹ふるきがちらほら残つて、真盛まっさか
りの、朧月夜おぼろづきよの事でした。

今貴僧あなたがここへいらつしやる玄関前で、紫雲英げんげの草を潜くぐる
兎を見たとおつしやいました、

「いや、肝心のお話の中うちへ、お交ぜ下すつては困ります。そう
は見えましたものの、まさかかような処へ。あるいはその……
猫であつたかも知れません。」

「背後が直ぐ山ですから、ちよいちよい見えますそうです、兎でしよう。」

が、似た事のありますものです——その時は小^こ狗^{いぬ}でした。鈴がついておりましたつけ。白^{むく}垢^{まつしろ}の真^ま白^{しろ}なのが、ころころと仰^{あおむ}向けに手をじゃれながら足^{あしもと}許^{もと}を転^{ころ}がつて行^ゆきます。夢のよう

にそのあとへついて、やがて門^{かど}札^はを見ると指^さした家^{いえ}で、まさか奥^{おく}様^{さん}に、とも言えませんかから、主人に逢^あつて、——

意中を話しますと——

（夜中何事^{やちゆう}です。人を馬鹿^{ばか}にした。奥^{おく}は病^{やちゆう}気だからお目には懸^かれません。）

と云^いつて厭^{いや}な顔^{かほ}をしました。夫人が評判^{ひやうばん}の美人^{びじん}だけに、校長^{けいしやう}さんは大^{だい}した嫉^{しやう}妬^だ深^{しん}いという事^{こと}で。」

「叔母がつくづく意見をしました。（はじめから彼家へ行くと聞いたら遣^やるのじゃなかった——黙^{もく}つておいでだから何にも知らずに悪い事をしたよ。さきじや幼馴染^{おきななじみ}だと思ひます、手毬唄を聞くなぞ、となおよくない、そんな事が世間へ通るかい、）とこうです。

母親の友達を尋ねるに、色氣の嫌疑はおかしい、と聞いて見ると、何^な、女^なの児^こはませています、それに紅^{あか}い手絡^{てがら}で、美しい髪なぞ結^むつて、容^{かたち}づくつてゐるから可^いい姉^{あね}さんだ、と幼心^{おきなごころ}に思つたのが、二つ違い、一つ上、亡くなつたのが二つ上で、その奥さんは一ツ上のだそうで、行方の知れないのは、分らないそ^うでした。

事が面倒になりましたね、その夫人の親里から、叔母の家へ使が来て、娘御は何も唄なんか御存じないそうで、ええ、世間体がございますから以来は、と苦り切つて帰りました。

勿論病気でも何でもなかったそうです。

一月ばかり経つて、細かに、いろいろと手毬唄、子守唄、童唄なんぞ、百幾つというものの、綺麗に美しく、細々とかいた、文が来ました。

しまいへ、紅で、

——嫁入りの果敢なさを唄いしが唄の中にも沢山におわしまし候——

と、だけ記してありました。……

唯今も大切に持っています、勿論、その中に、私の望みの、母の声はありません。

さあ、もう一人……行方の知れない方ですが……

またこれが貴僧あなた、家を越したとか、遠国へ行つたとかいうのなら、いくらか手懸りもあるし、何の不思議もないのですが、俗に申します、神がくしに逢つたんで、叔母はじめ固くそう信じております。

名は菖蒲あやめと言いました。

一体その娘の家は、母娘おやこ二人、どっちの乳母か、嫗ばあさんが一人、と母子おやこだけのしもた屋で、しかし立派な住居すまいでした。その母親おふくろというのは、私は小児心こどもに、ただ齒を染めていたのと、鼻筋の通つた、こう面長な、そして帯の結目むすびめを長く、下襲したがさねか、蹴出けだしか、褌つまをぞろりと着崩して、日の暮方には、時々薄暗い門かどに立って、町から見えます、山の方を視ながめては悄然しよんぱりイたんでいたのだけ幽かすかに覚えているんですが、人の妾めかけだとも云う

し、本妻だとも云う、どこかの藩候の落胤だとも云つて、ちつとも素性が分りません。

娘は、別に異つたこともありませんが、容色は三人の中うちで一番佳よかつた———そう思うと、今でも目前めさきに見えますが。

その娘です、余所よそへは遊びに來ましたけれど、誰も友達を、自分の内へ連れて行つた事はありませんでした。

寄合あそびごとつて、遊事を。これからおもしろくなろうという時、不意おつかに母さんがお呼びだ、とその媼さんが出て來て引張ひっぱつて歸ることが度々で、急に居なくなる、跡の寂しさと云つたらありません。——先せんの内は、自分でもいやいや引立ひつたてられるようにして歸り歸りしたのですが、一ツは人の許とこへ自分は來て、我が家うちへ誰も呼ばない、という遠慮か、妙な時ふと立つちや、独ひとりで歸つてしまうことがいくらかもあつたんです。

ですから何だかその娘ばかりは、思うように遊べない、勝手に誘われない、自由にはならない処から、遠いが花の香とか云います。余計に私なんざなつかし懐くつて、（菖あやちゃんお遊びな）が言えないから、合図の石をかちかち叩いては、その家の前を通つたもんでした。

それが一晚、あるばん真夜中に、十畳の座敷を閉め切つたままで、どこかへ姿をかくしたそうで。

丑年うしの事だから、と私が唄を聞きたさに、尋ねた時分……今から何年前だろう、と叔母が指を折りましたつけ……しばらく多年になりますか。」

「故郷では、未婚の女が、丑年の丑の日に、衣きものを清め、身を清め……」

唾つばをのんで聞いた客僧が、

「成程、」

と腕組みして、

「精進潔斎。」

「そんな大した、」

と言消したが、また打領うちうなずき

「どうせ娘の子のする事です。そうまでも行きゆきますまいが、髪を洗って、湯に入つて、そしてその洗髪あらいがみを櫛くし巻まきに結んで、笄こうがいなしに、紅べにばかり薄くつけるのだそうです。

それから、十畳敷を閉込しめこんで、床の間をうしろに、どこか、壁へ向いて、そこへ婦おんなの魂を据える、鏡です。

丑童子うしどうじ、斑まだらの御神おんかみ、と、一心に念じて、傍目わきめも触ふらないで、
瞻みつめていると、その丑の年丑の月丑の日の……丑時うしどきになると、
その鏡に、……前世から定まった縁の人の姿が見える、とい
う伝説があります。

娘は、誰も勝手を知らない、その家で、その丑待うしまちを独ひとりでし
て、何かに誘われてふらふらと出たんですって。……それつ
きりになっているんですもの。

手のつけようがありますまい。

いよいよとなると、なお聞きたい、それさえ聞いたら、亡
くなった母親の顔も見えよう、とあせり出して、山寺にあり
ました、母の墓を揺ゆすぶつて、記しるしの松に耳をあてて聞きました、
松風の声ばかり。

その山寺の森をくぐつて、里に落ちます清水の、麓ふもとに玉散

る石を嚙かんで、この齒音せよ、この舌歌へ、と念じても、戦おのくばかりで声が出ない。

うわの空で居たせいか、一日、山路みちで怪我けがをして、足を挫くじいて寝ることになりました。ざっとこれがために、半月悩んで、ようよう杖を突いて散歩が出来るようになりますと、籠かごを出た鳥のように、町を、山の方へ、ひよいひよいと杖つえで飛んで、いや不恰好ぶかつこうな蛙です——両側は家続きで、ちようど大崩壊おおくずれの、あの街道を見るように、なぞえに前途ゆくてへ高くなる——突当りが撞木形しゅもくがたになつて、そこがまた通街とおりなんです。私が貴僧あなた、自分の町をやがてその九分ぐらいな処まで参つた時に、向うの縦通りを、向つて左の方から来て、こちらへ曲りそうにしたが、白地の浴衣を着てそこに立つた私の姿を見ると、フト立停たちどまつた美人があります。

扮装みなりなどは気がつかず、洋傘かさは持っていたようでしたつけ、それを翳さしていたか、畳んだのを支たいていたか、判然はつきりしないが、ああ似たような、と思つたのは、その行方が分らんといいう一人。

トむこうでも莞爾にっこりしました……

そこへ笠つぼうを深くかぶつた、草鞋わらじ穿きの、獵人体かりゆうどの大漢おおとこが、鉄砲てつぽうの銃先つつさきへ浅葱あさぎの小旗ひを結えつけたのを肩にして、鉄の鎖くわをずらりと曳ひいたのに、大熊を一頭、のさのさと曳いて出ました。

山を上に見て、正まとも的に町と町が附くっついた三辻みつじの、その附根つけねの処を、横に切つて、左角の土蔵の前から、右の角が、菓子屋の、その葦簀よしずの張出はりだしまで、わずか二間あいばかりの間を通つたんですから、のさりと行くのも、ほんのしばらく。

熊の背が、^{せなか}イんだ婦人の乳のあたりへ、黒雲のようにかかると、それにつれて、一所に横向きになつて歩行^{ある}き出しました。あとへぞろぞろ大勢小児^{こども}が……国では珍らしい獣^{けもの}だからでしょう。

右の方へかくれたから、角へ出て見ようと、急足^{いそぎあし}に出ようとすると、馴^なれない跛^{びつこ}ですから、腕へ台についた杖を忘れて、躓^{つまず}いて、のめったので、生爪^{なまづめ}をはがしたのです。

しばらく立てませんでした。

かれこれして、出て見ると、もうどこへ行つたか影も形もない。

その後、旅行をして諸国を歩行^{ある}くのに、越前の木の芽峠^{ふもと}の麓^{ふもと}で見かけた、炭を背負^{しよ}った女だの、碓氷^{うすい}を越す時汽車の窓からちらりと見ました、隧道^{トンネル}を出て、衝^つと隧道を入る間の茶店

に、うしろ向きの女だの、むすめ 都では矢のように行過ぎる馬車の中などに、それか、と思うのは幾たびも見かけたんですが……その熊の時のほど、印象のよく明瞭に今まで残ってるのは無いのです。

内へ帰って、

（美しき君の姿は、

熊に取られた。

町の角で、町の角で――

跛ひきひき追えど及ばぬ。）

もしや手毬唄の中に、こういうのは無かったでしょうかと叔母にその話をするまびなか、真日中にそんなものを視て、そんなことを云う貴下は、あなた 身体が弱いのです。当分外へは出てはなりません、と外出禁制。きんぜい

以前は、その形で、正真正銘の熊の胆い、と海を渡つて売りに来たものがあるそうだけれど、今時はついぞ見懸けぬ、と後での話。……」

三十二

「日が経たつてから、叔母が私の枕許まくらもとで、さまでに思詰めたものなら、保養かたがた、思う処へ旅行して、その唄を誰かに聞け。

（妹の声は私も聞きたい。）

と、手函てぽこの金子かねを授けました。今もつて叔母が貢いでくれるんです。

国を出て、足かけ五年！

津々浦々、都、村、里、どこを聞いても、あこがれる唄はない。似たのはあつても、その後か、その前か、さき中途か、あるいはその空間か、どこかに望みの声がありそうだな……と思うばかり。また小児こどもたちも、手毬が下手になつたので、終しままで突き得ないから、自然長いのは半分ほどで消えています。

とても尋常ではいかん、と思つて、もうただ、その一人行方の知れない、稚おさなともだちばかり、矢も楯たても堪たまらず逢いたくなつて来たんですが、魔にとられたと言うんですもの。高峰たかねへかかる雲を見ては、鳶つたをたよりに縋すがりたし、湖うみを渡る霧を見ては、落葉に乗つても、追いつきたい。巖穴いわあなの底も極めたければ、滝の裏も覗のぞきたし、何か前世の因縁で、めぐり逢う事もあるうか、と奥山の庚申塚こうしんづかに一人立つて、二十六夜の月

の出を待った事さえあるんです。

トこの間——名も嬉しい常夏とこなつの咲いた霞川と云う秋谷の小川で、綺麗な手毬を拾いました。

宰八に聞いた、あの、嘉吉とか云う男に、緑色の珠を与えて、つきあかり月明の村雨の中を山路へかかつて、

（ここはどここの細道じゃ、

細道じゃ。

天神様の細道じゃ、

細道じゃ。）

と童謡を口吟くちずさんで通つたと云うだけで、早やその声が聞こえるようにで、」

僧は魅入られたごとくに見えたが、溜息ためいきを吻ほっと吐つき、
「まずおめでたい、ではその唄が知れましたか。」

「どうして唄は知れませんが、声だけは、どうやらその人……
いいえ、……そのものであるらしい。この手毬もてあそを弄ぶのは、
確たしかにその婦人おんなであろう。その婦人は何となく、この空邸あきやしきに姿
が見えるように思われます。……むしろ私はそう信じていま
す。

爺さんに強請ねだつて、ここを一室ま借りましたが、借りた日に
はもう其の手毬を取返され——私は取返されたと思うんです
ね——美しく気高い、その婦人おんなの心では、私のようなものに
拾わせるのではなかったでしょう。

あるいはこれを、小川の裾すその秋谷明神へ届けるのであつた
かも知らない。そうすると、名所だ、と云う、浦の、あの、子
産石をこぼれる石は、以来手毬の糸が染まつて、五彩燦爛さんらんと
して迸る。ほとばしこの色が、紫に、緑に、紺青こんじように、藍碧らんぺきに波を射て、

太平洋へ月夜の虹を敷いたのであろうも計られません、」

とまた恍惚^{うつとり}となつたが、頸^{うなじ}を垂れて、

「その祟^{たたり}、その罪です。このすべての怪異は。——自分の慾^{よく}のために、自分の恋のために、途中でその手毬を拾つた罰だろう、と思う、思うんです。

祟らば祟れ！ 飽くまでも初一念を貫いて、その唄を聞かねば置かない。

心の迷^{まよひ}が知れませんが。目^まのあたり見ます、怪しさも、凄^{すじ}さも、もしや、それが望みの唄^{なんびと}を、何人かが暗示するのであるかも知れん、と思つて、こうその口ずさんで見ると——
行燈^{あんどう}が宙へ浮きましよう。

（美しき君の姿は、
萌黄^{もえぎ}の蚊帳を、

蚊帳のまわりを、姿はなしに、

通る行燈あんどんの俤おもかげや。……

勿論、こんなものではありません。または、

（美しき君の庵いおりは、

九

前の畑に影さして、

棟の草も露に濡れつつ、

月の桂かつらが茅屋かやにかかる。……

ちつとも似てはおらんのです。屋根で鵝鳥がちょうが鳴く時は、波に攫さらわれるのであらうと思ひ、板戸に馬の影がさせば、修羅道に墮おちるか、と驚きながらも、

（屋根で鵝鳥の鳴き叫ぶ、

板戸こまに駒の影がさす。）

と、現うつにも、絶えず耳に聞きますけれど、それだと心は頷うなず

きません。

いかなる事も堪忍んで、どうぞその唄を聞きたい、とこうして参籠をしているんですが、祟たたりならはよし罪は厭いとわん、」
と激しく言いつつ、心づいて、悄然しょうぜんとして僧を見た。

「ただその、手毬を取返したのは、唄は教えない、という宣告じやあななろうか、とそう思うと情なさけない。

ああ、お話が八岐やちまたになつて、手毬は……そうです。天井から猫が落ちます以前、私が縁側へ一人で坐つています処へ、あの白粉おしろいの花の蔭から、芋※ずいきの葉を顔に当てた小児こどもが三人、ちよろちよろと出て来て、不思議そうに私を見ながら、犬ころがなつくように傍そばへ寄ると、縁側から覗のぞ込んで、手毬を見つけて、三人でうなずき合つて、

（それをおくれ。）と言います。

（お前たちのか。）

と聞くと、頭^{かぶり}を掉^ふるから、

（じゃ、小父^{おじ}さんのだ。）と言うと、男が毬を、という調子に、（わはは）と笑って、それなりに、ちらちらとどこかへ取って行つたんでした。」――

三十三

「何、私^{わし}がうわきしていさつせえた処だつて……はあ、お前様^{めえさま}二人でかね。」

どツこいしょ、と立つたまま、広縁が高いから、背負^{しよ}つて来た風呂敷包は、腰ぎりにちようど乗る。

「だら、可^いいけんども、」

と結目^{むすびめ}を解^{とき}下ろして、

「天井裏でうわさべいされちや堪^{たま}んねえだ。」

と声を密^{ひそ}めたが、宰八は直ぐ高調子、

「いんね、私^{わし}一人じゃござりましたねえ。喜十郎様が許^{とこ}の仁右

衛門の苦虫^{にがむし}と、学校の先生ちゆが、同士^{もんまえ}にはい、門前^{もんまえ}まで来つ

けえがの。

あの、樹の下^きの、暗^くえ中^{なかつ}へ頭突^{つツ}込んだと思^{おも}わつせえまし、

お前様^{まへさま}、苦虫^{くちゅう}の親仁^{おやじ}が年効^{としがい}もねえ、新造^{しんぞう}子が抱^{かか}つてきたよう

に、キヤアと云^いうだ。」

「どうしたんです。」

「何かまた、」

と、僧も夜具包の上から伸上^{のびあ}つて顔を出した。

宰八紅願卷あかはちまきをかなぐつて、

「こりや、はい、御坊様御免なせえまし。御本家からも宜よろしくでござりやす。いずれ喜十郎様お目に懸かりますだが、まずゆつく緩りと休まつしやりましとよ。

私わしこういうぞんざいもんだで、お辞儀の仕様もねえ。婆様
がよつくハイ御挨拶しろと云うてね、お前様うま旨がらしつけえ、
団子をことづけて寄越よこしやした。茶受ちやうけにさっしやりやし。あ
とで私が蚊いぶしを才覚しながら、ぶつぶつ渋茶を煮立てま
すべい。

それよりか、お前様、腹アすかつしやっただろうと思うで、御
本家からまた重詰めにして寄越さした、そいつをぶら下げ
ながら苦虫が、右のお前様、キャアでけつかる。

門外の草原を、まるで川の瀬さ渡るように、三人がふらふ

らよちよち、モノ小半時かかったが、芸もねえ、えら遅くなつて済まんしねえ。」

「何とも御苦労、」

と僧は慇懃^{いんぎん}に頭^{つむり}をさげる。

「その人たちは、どうしたのかね。」

と明が尋ねた。

「はい、それさ、そのキャアだから、お前様、どうした仁右衛門と、云うと、苦虫が、面^{つら}さ渋くして、（ああ、厭^{いや}なものを見た。おらが鼻^{はな}の尖^{さき}を、ひいらひいら、あの生白^{なまぢら}けた芋の葉の長面^{ながづら}が、ニタニタ笑えながら横に飛んだ。精霊棚^{ひょうたん}の瓢箪^{ひょうたん}が、ひとりでにぼたりと落ちて、御先祖^{いませめ}の戒^{いましめ}とは思わねえで、酒も留^やめねえ己^{おら}だけんど、それにや蔓^{つる}が枯れたちゆう道理がある。風もねえに芋の葉が宙^あを歩^{ある}行くわけはねえ。ああ、厭

だ、総毛立つ、内へ帰つて夜具を被^{かぶ}つて、ずツしり汗でも取らねえでは、煩いそうに頭も重い。）

と縮^{すく}むだね。

いつも

こども

例の小児が駆出したろう、とそう言つと、なお悪い。あの声を聞くと堪^{たま}らねえ。あれ、あれ、石を鳴らすのが、谷^や戸^とに響く。時刻も七ツじゃ、と蒼^{あお}くなつて、風呂敷包^{ふちお}打置いて、ひよろひよろ帰るだ。

先生様、ではお前様、その重箱を提げてくれさつせえ、と私^{わし}が頼むとね。

（厭だ、）と云つけい。

（はてね、なぜでがす。）

ここさ、お客様の前^{めえ}だけんど、気にかけて下せえますなよ。

（軍歌でもやるならまだの事、子守や手毬唄なんかひねくる

様な奴やつの、弁当持つて堪るものか。）

と吐こくでねえか。

ともだち

奴は朋友に聞いた、と云うだが、いずれ怪物退治ばけものに來た連中からだんべい。

お客様何でがすか、お前様、子守唄こさ拵えさつしやるかね。袋戸棚の障子へ、書いたもの貼はつとかつしやるのは、もの、それかね。」

明は恥じたる色があつた。

「こしらえるのじやない、聞いたのを書き留めて置くんです。数があつて忘れるから、」

「はあ、私わしはまた、こんな恐怖おっかねえ処ところに落着いていさつしやる

お前様だ。

怨敵退散おんてきの貼御符はりごふうかと思つたが。

何か、ハイ、わけは分^{わか}んねえがね、悪く言つたのがグツと癪^{しやく}に障^{さわ}つたで、

（なら可^ようがす、客人のものは持つてもれえますめえ、が、お前様、学校の先生様だ。可^よし、私あハイ、何も教えちゃもらわねえだで、師匠じゃねえ、同士に歩^{ある}行^もくだら朋^{とも}達^{だち}だつпей。蟹の宰八が手ンぼうの助力さつせえ。）

と極^きめつけたさ。

帽子の下で目を据えたよ。

（貴様のような友達^{かこう}は持たん、失敬な。）と云つて引返したわ。

何か託^{かこう}け、根は臆病で遁^にげただよ。見さつせえ、韋駄^{いだ}天^{てん}のよう^うに木の下を駆出し、川べりの遠くへ行く仁右衛門親仁を、

（おおい、おおい）

と茶番^{さだ}の定九郎^{くろう}を極^きめやあがる。」

三十四

その夜に限って何事もなく、静かに。……寝ようという時、初夜過ぎた。

宰八が手燭てしよくに送られて、広縁を折曲つて、遙はるかに廻廊を通つた僧は、雨戸の並木を越えたようふるさとで、故郷には蚊帳を釣つて、一人寂しく友が待つ思おもいがある。

「ここかい。」

「それを左へ開けさつせえまし、入口の板敷から二ツ目のが、男が立つて遣やるのでがす。行拔けに北の縁側へも出られますで、お前様めえさま帰りがけに取違えてはなんねえだよ。

二三年この方、向うへは誰も通抜けた事がねえで、当節柄

じゃ、迷込んでどこへ行くか、ハイ方角が着きましたねえ。」
「もう分りましたよ。」

「可よかあねえ、私わし、ここに待つとるで、燈あかりをたよりに出て来
さっせえ。」

私も、この障子の多いいかこと続いたのに、めらめら破れのあ
る工合ぐあいが、ハイ一ツ一ツ白髑髏しやれかうべのようで、一人で立つてる気
はしねえけど、お前様が坊様だけに氣丈夫だ。えら茶話が
もてて、何度も土瓶をかわかしただ、入いれかわつて私もやらか
しますべいに、待つてるだよ。」

僧は戸を開けながら、と、声をかけて、

「御免下さい。」

と、ぴたりと閉めた。

「あ、あ、気味の悪い。誰あいさつに挨拶さっせるだ。南無阿弥陀仏なむあみだぶつ、

南無阿弥陀仏。はて、急に變なことを考えたぞ。^{一〇}。そこさ一面の障子の破れ覗いたら何が見えべい——南無阿弥陀仏、あ、南無阿弥陀仏、……やあ、蠟燭がひらひらする、どこから風が吹いて来るだ。これえ消したが最後、立処に六道の辻に迷うだて。南無阿弥陀仏、御坊様、まだかね。」

「ちよいと、」

「ひやあ、」

僧は半ば開いて、中に鼠の法衣で立ちつつ、

「ちよいと燭あかりを見せておくれ。」

「ええ、お前様、前へ戸を開けておいてから何か言わつしやれば可い。板戸が音声おんじようを發したか、と吃驚びっくりしただ、はあ、何だね。」

「入口の、この出窓の下に、手水鉢ちようずがあつたのを、入りしな

に見ておいたが、広いので暗くて分らなくなりました。」

「ああ、手、洗わつしやるのかね、」

と手燭ばかりを、ずいと出して、

「鉢前にや、夜が明けたら見させえまし、大した唐銅の手
水鉢の、この邸さ曳いて来る時分に牛一頭かかった、見事な
のがあるけれど、今開ける気はしましねえ。……」

ええ、そよら、そよらと風だ。

そ、その鉢にや水があれば可いがね、無くば座敷まで我慢
させえまし、土瓶の残を注けて進ぜる。」

「あります、あります。」

ざつと音をさして、

「冷い美しい水が、満々とありますよ。」

「嘘を吐くもんでエねえ。なに美しい水があんべい。井戸の水

は真蒼まつさおで、小川の水は白濁りだ。」

「じゃあ燭あかりで見るせいだろうか、」

「そして、はあ、何なみなみとあるもんだ。」

「いいえ、縁切ふちきりこぼれるようだよ。ああ、葉越さんは綺麗好

きだと見える。真白まつしろな手拭てぬぐいが、」

と言いかけてしばらく黙った。

今年より卯月うづき八日は吉日よ

尾長蛆虫おながうじむし成敗おこなぞする

「ここに倒さかさまにはつてあるのは、これは誰方どなたがお書きなすった、」

「……南無阿弥陀仏なまあいだぶつ、南無阿弥陀仏……」

「ああ、佳いいおてだ。」

と大和尚のように落着いて、大く言ったが、やがてちと慌あわただしげに小さな坊さまになって急いで出た。

「ええ、疾はやく出さつせえ、私わしもう押堪おっくらえて、座敷から庭へ出て用たすべい。」

「ほんとに誰が書いたんだね、女の手だが、」

と掛手拭を賞ほめた癖に、薄汚れた畳んだのを自分の袂たもとから出している。

「南無阿弥陀仏なんまいだぶつ、ソ、それは、それ、この次の、次の、小座敷で亡くならしつけえ、どつかの嬢様が書いて貼はっただよ、直じきそこだ、今ソンな事あどうでも可ええ。頭から、慄ぞつ然とするだに、」

「そうかい、ああ私も今、手を拭ふこうとすると、真新しい切立きりたての掛手拭が、冷く濡れていたのどヒヤリとした。」

「や、」と横飛びにどたりと踏んだが、その躰音あしおとを忍びたそうに、腰を浮かせて、同一処おなじを蹠蹠うろ蹠蹠うろする。

三十五

「そうふらふらさしちや燈あかりが消えます。貸しなさい、私がその手燭てしよくを持つとうで。」

「頼めえさまます、はい、どうぞお前様持たつせえて、ついでにその法衣ころも着させえ姿から、光明赫耀かくやくと願えてえだ。」

僧は燭を取つて一足出たが、

「お爺さん、」

と呼んだのが、驚破事すわやありげに聞えたので、手んぼうならぬ手を引込め、不具かたわの方と同一処おなじで、掌てのひらをあけながら、据腰すえごしで顔を見上げる、と皺面しわづらばかりが燭の影に真赤まっかになった。――
この赤親仁と、青坊主が、廊下はずれに物言う状さまは、鬼きが囁ささや

くに異ならず。

「ええ、」

「どこか呻吟うめくような声がするよ。」

「芸もねえ、威おどかしてどうさつせる。」

「聞きなさい、それ……」

「う、う、う、」

と厭いやな声。

「爺さん、お前が呻吟くのかい。」

「いんね、」

と変な顔色で、鼻をしかめ、

「ふん、難産の呻吟うめきごえ声だ。はあ、御新姐ごしんぞが唸うならしつけえ、姑獲鳥うぶめ

になつて鳴くだあよ。もの、奥の小座敷の方で聞えべいがね。」

「奥も小座敷も私は知らんが、障子の方ではないようだ、便

所かな、

「ひええ、今、お前様が入らつしたばかりでねえかね、」

「されば、」

と斜めに聞澄まして、

「おお、庭だ、庭だ、雨戸の外だ。」

「はあ、」

と宰八も、聞定めて、吻ほっと息して、

「まず構外かめえそとだ、この雨戸がハイ鉄壁だぞ。」と、ぐいと圧おさえて

また蹈張ふんばり、

「野郎、入へつてみやがれ、野郎、活いき仏さまが附つきいてござるだ。」

「仏ではなお打棄うつちやつては措おかれない、人の声じゃ、お爺さん、

明けて見よう、誰か苦くるんでゐるようだよ。」

「これ、静かにさっせえ、術てだ、術だてね。ものその術で、

背負^{しよび}引き出して、お前様^{あたま}天窓から塩よ。私は手足^{わし}い引^{ひん}搦^もいで、月夜蟹^{つきや}で肉^みがねえ、と遣^やろうとするだ。ほつてもない、開けさつしやるな。早く座敷へ行きますべい。」

「あれ、聞きなさい、助けてくれ……と云うではないか。」

「へ、疾^{はや}いもんだ。人の氣を引きくさる、坊様と知つて慈悲で釣^つるだね、開けまいぞ。」

と云う時……判^{はつきり}然聞えたが、しわがれた声であつた。

「助けてくれ……」

「……………」

「……………」

「宰八よう、——」

と、葎^{むぐら}がぐれに虫の声。
手^{てん}ぼう蟹^{がに}ふるえ上つて、

「ひやあ、苦虫が呼ぶ。」

「何、虫が呼ぶ？」

「ええ、にえむ仁右衛門の声だ。南無阿弥陀仏、ソ、ソレ見さつせえ。宵に門前もんまえから遁帰にげかえった親仁めが、今時分何しにここへ来るもんだ。見ろ、畜生、さ、さすが畜生の浅間しさに、そこまでは心着かねえ。へい、人間様だぞ。おのれ、荒神様がついてござる、猿智慧さるぢえだね、打棄うつちやつておかつせえまし。」

と雨戸を離れて、肩を一つ揺ゆつて行ゆこうとする。広縁のはずれと覚かなたしき彼方へ、板敷を離るること二尺ばかり、消え残とろうろつた燈籠とうろうのような白紙しろかみがふらりと出て、真四角まっしかくに、燈ともが歩行あるき出した。

「はッあ、」

と退すきつて、僧せなに背すりよを摺寄せながら、

「経文を唱えて下せえ、入つて来たわ、南無なんまいだ、なんまいだ。」

僧も爪立つまだつて、浮腰うきごしに透かして見たが、

「行燈あんどうだよ、余り手間が取れるから、座敷から葉越さんが見
おいでだ。さあ、三人となると私も大きに心強い——ここ
は開あくかい。」

「ええ、これ、開けてはなんねえちゆうに、」

「だつて、あれ、あれ、助けてくれ、と云うものを。鬼神に
横道なし、と云う、情なさけに抵抗てむかう刃やいばはない筈はず、」

枢くるるをかたかた、ぐつと、さるを上げて、ずずん、かたりと

開ける、袖を絞おつて蔽おほい果さず、燈あかりは颯さつと夜風に消えた。が、

吉野紙を蔽おほえるごとき、薄曇りの月の影を、隈くまある暗むぐらき律むぐらの
中、底を分け出でて、打傾いて、その光を宿している、目の

前の飛石の上を、四つに這廻るは、そもいかなるものぞ。

三十六

声を聞いたより形を見れば、なお確實に、飛石を這つて呻
いていたのは、苦虫の仁右衛門であつた。

つきあかり

月明に、まさしくそれと認めが着くと、同一疑の中にも

くみしやす

いくらか与易く思つた処へ、明が行燈を提げて来たので、ま

あんどろ

すます力づいた宰八は、二人の指図に、思切つて庭へ出たが、
もうそれまでに漕ぎ着ければ、露に濡れる分は厭わぬ親仁。

むぐら

さやさやと葎を分けて、おじいどうした、と摺寄ると、あ

ひつぱ

あ、宰八か助けてくれ。この手を引張つて、と拝むがごとく
指出了。左の腕を、ぐい、と掴んで、獣にしては毛が少ね

かいな

つか

けもの

え、おおお正真止銘しょうじんの仁右衛門だ、よく化けた、とまだそんな事を云いながら、肩にかけて引立てると、飛石から離れるのが泥田どろだを踏むような足取りで、せいせい呼吸いきを切つて、しがみついたので、咽喉のどがしまる、と眩つぶやきながら、宰八はやも疾はやく埒らちを明けたさに、委細構ひきずわずるずる引摺ひきずつて縁側に来る間に、明はもう一枚、雨戸を開けて待構えて、気分はどう？ まあ、こちらへ、と手伝つて引入れた、仁右衛門の右の手は、竹槍たけやりを握つていたのである。

これは、と驚くと、仔細しさいござります。水を一口、と云う舌も硬こわばり、唇は土気色。手首も冷たく只戦ひたわななきに戦くので、ともかく座敷へ連れよう……何しろ危いから、こういうものは、竹槍は明が預る。

引ひそいだ切尖きつさきの鋭すどどいのが、法衣ころもの袖を掠かすつたから、背後うしろに

立つた僧は慌てて身を開いて、行燈は手前が、とこれが先へ立つ。

さあ負おぶされ、と蟹の甲を押向けると、いや、それには及ばぬ、と云った仁右衛門が、僧の裾すそを啣くわえた体ていに、膝で摺ずつて縁側へ這上はいあがった。

あとへ、竹槍の青光りに艶のあるのを、柄長に取つて、明が続く。

背後うしろで雨戸を閉めかけて、おじい、腰が抜けたか、弱い男だ、とどうやら風向かざむきが可よさそうなので、宰八あざが嘲けると、うんにや足の裏が血だらけじゃ、歩行あるくと痕あとがつく、と這いながら云ったので——イヤその音の夥おびただしさ。がらりと閉め棄てに、明の背せなへ飛とび縋すがった。——真先まっさきへ行燈が、坊さまの裾すそ 一一あたり宙あを歩行あるいて、血だらけだ、と云う苦虫が馬の這身はいみ、竹槍が

しりえ おさ
後を圧えて、暗がりや蟹が通る。……広縁をこの体は、さて
さて尋常事ではない。

やがて座敷で介抱して、ようよう正氣づくつと、仁右衛門は
あたり みまわ
四辺を眊し、あまたたび口籠りながら、相済みましねえ、お
客様、御出家、宰八此方にはなおの事、四十年来の知己が、余
り氣心を知らんようで、面目もない次第じや。

御主人鶴谷様のこの別宅、近頃の怪しき不思議さ。余りの
事に、これは一分別ある処と、三日二夜、口も利かずになじま
じと勘考した。はて巧んだり！ てつきりこいつ大詐欺に極
まった。汝等が謀つて、見事に妖物邸にしおおせる。棄て置
けば狐狸の棲処、さもないまでも乞食の宿、焚火の火沙汰も
不用心、給金出しても人は住まず、持余しものになるのを見
済まし、立腐れの柱を根こぎに、瓦屋根を踏倒して、股倉へ
またぐら

掻込かひこむ算段、凶星凶星。しゃ！ 明神様の託宣おつけ——と眼玉まなこだまで睨にらんで見れば、どうやら近頃から逗留とうりゆうした渡りものの書生坊しよせつぼう、悪く優しげな顔色つらつきも、絵草子で見た自来也じらいやだぞ、盗賊の張本ばばござんなれ。晩方う来せた旅僧うめも、その同類、茶店の婆ばばも怪しいわ。手引した宰八かけも抱込まれたに相違ない。道理こそ化物沙汰に輪かを掛る。待て待て狂人きちがいの真似何でもない事、嘉吉も一升飲まされた——巫山ふざけ戯た奴等やつら、どこだと思う。秋谷村には甘え柿と、苦虫あるを知んねえか、とわざと臆病に見せかけて、宵に遁にげたは真田幸村さなだゆきむら、やがてもり返して盗賊どろぼうの巢のつとを乗取る了簡りようけん。

いつものように黄昏たそがれの軒をうろつく、嘉吉奴めを引捉ひつとらえ、確しかと親元へ預け置いたは、屋根から天蚕糸てぐすに鉤はりをかけて、行燈を釣らせぬ分別。

かねて謀計を喋合はかりごとせた、同じく晩方遁しめしあわげる、と見せた、学校の訓導と、その筋の諜者ちようじやを勤むる、狐店きつねみせの親方を誘うて、この三人、十分に支度をした。

二人は表門へ立向い、仁右衛門はただ一人、怪しきものは突殺そう。狸に化けた人間を打殺すに仔細ぶちころはない、と竹槍を引ひそばめて、木戸口から庭づたいに、月あかりを辿りたど辿り、雨戸をあてに近づいて、何か、手品の種がありはせぬか、と透かして屋根の周囲まわりをぐるりと見ると。……

三十七

鳥が一羽歴然ありありと屋根に見えた。ああ、あの下辺あたりで、産婦が二人——定命とは思われぬ無残な死にようをしたと思うと、

屋根の上に、姿が何やら。

この姿は、むぐら葎を分けて忍び寄ったはじめから、目前にめさき朦朧と映ったのであつたが、立つて丈長き葉に添うようでもあり、寝て根をくぐ潜るようでもあるし、浮き上つて葉尖をはさき渡るようでもあつた。で、大方仁右衛門自分の身体と、竹槍との組合せで、つきあかり月明には、そんな影が出来たのだらう、と怪しまなかつたが、その姿が、ふと屋根の上に移つたので。

ト見ると、肩のあたりの、すらすらとやさし優しいのが、いかに月に描き直されたればとて、くわ鋤を担いだ骨組にしては余りにしおらしい、と心着くと柳の腰。

その細腰を此方へ、背を斜にした裾が、すそ脛のあたりへ瓦を敷いて、細くしなやかにかいこ搔込んで、けだ蹴出したようなつまさき襪先が、中空なれば遮るものなく、たより便なきそうに、しかしかる軽く、軒の

蜘蛛くもの囿いの大きなのに、はらりと乗つて、水車みずぐるまに霧かが懸かつた風情に見える。背筋なびの靡なびく、頸許えりもとのほの白さは、月に預けて際立たぬ。その月影は朧おぼろながら、濃い黒髪は緑を束つかねて、森の影が雲かと落ちて、その涕おもかげをうらから包んだ、向うむきの、やや中空を仰いだ状さまで、二の腕の腹を此方こなたへ、雪のごとく白く見せて、静しずかに鬢びんの毛を撫なでていた。

白魚しらおの指の尖さきの、ちらちらと髪を潜くぐつて動いたのも、思えば見えよう道理はないのに、てつきり耳が動いたようで。

驚破すわ、獣けだものか、人間か。いずれこの邸を踏倒ひきしごそう屋根住居ずまいしてござる。おのれ、見ろ、と一足退すさつて竹槍を引扱ひきしごき、鳥を

差いた覚えの骨こつで、スーッ！ 突出つぎだした得物の尖さきが、右の袖下を潜くぐるや否や、踏占めた足の裏で、ぐ、ぐ、ぐ、と声を出したものである。

地^{つち}が急に柔かく、ほんのりと暖かに、ふつくりと綿を踏んで、下へ沈みそうな心持。他^{たわい}愛なく膝節の崩れるのに驚いて、足を見る、と白粉^{おしろい}の花の上。

と思ったがそれは遠い。このふつくりした白いものは、
南無^{なむさんぼう}三宝仰向けに倒れた女の胸、膨らむ乳房^{まんなか}の真中あたり、
鳩尾^{みぞおち}を、土足で踏^ふんでいようでないか。

仁右衛門ぶるぶるとなり、据^{すえ}眼^{まなこ}に熟^{じつ}と見た、白い咽喉^{のんど}をの
け^{ぎま}様に、苦痛に反らして、黒髪を乱したが、唇を洩^もる齒の白
さ。草に鼻筋の通った顔は、忘れもせぬ鶴谷の嫁、初産^{ういざん}に世
を去った御新姐^{ごしんぞ}である。

親仁は天窓^{あたま}から氷を浴びた。

恐しさ、怪しさより、勿体なさに、慌てて踏んでいる足を
除^どけると、我知らず、片足が、またぐツと乗る。

うむ、と呻うめかれて、ハツと開くと、旧もとの足で踏みかける。
 顛倒てんどうして慌てるほど、身体からだのおしに重みがかかる、とその度
 に、ぐ、ぐ、と泣いて、口から垂たら々と血を吐くのが、咽喉のどに
 懸かり、胸を染め、乳の下を颯さつと流れて、仁右衛門の蹠あしのうらなに生暖あたか
 う垂れかかる。

あツと腰を抜いて、手を支くと、その黒髪を搔か掴いつんだ。

御免なせえまし、御新姐様、御免なせえまし、と夢中ながら
 一心に詫びると、踏躡ふみにじられる苦悩の中から、目を開いて、じ
 ろじろと見る瞳が動くと、口も動いて、莞爾にっこりする、……その
 唇から血が流れる。

足は膠にかわで附けたよう。

同一おなじ処で蠢うごめく処へ、宰八の声が聞えたので、救助たすけを呼ぶさ
 え呻うめ吟いたのであった。

かくて、手を取つて引立て^{ひつた}てられた——宰八が見た飛石は、魅せられた仁右衛門の幻の目に、すなわち御新姐の胸であつたのである、足もまだ粘々^{ねばねば}する、手はこの通り血だらけじや、と戦^{おの}いたが、行燈に透かすと夜露に曝^{さら}れて白けていた。

「我^が折れ何とも、六十の親仁が天窓^{あたま}を下げる。宰八、夜深^{よふか}じやが本宅まで送つてくれ。片時もこの居まわり三町の間に居^おりたくない、生命^{いのち}ばかりはお助けじや。」

と言つて、誰にするやら仁右衛門はへたへたとお辞儀をした。

そこで、表門へ廻つた二人は、と皆連立^{みんな}つて出て見ると、訓導は式台前の敷石の上に、ぺたんと坐つていた。狐鰐^{きつねうどん}鮓の亭主は見えず。……後で知れたがそれは一散に遁^にげた、と言ふ。

何を見て驚いたか、渠等^{かれら}は頭^{かぶり}を掉^ふつて語らない。一人は緋^ひの袴^{はかま}を穿^はいた官女の、目の黒い、耳の尖^とがつた凄^{すさま}じき女房の、薄雲^{うすぐもり}の月に袖を重ねて、木戸口に佇^{たたず}んだ姿を見たり、一人は朱の面^{つら}した大猿にして、尾の九ツに裂けた姿に見たり、と誰伝うるとなく、程^た経^{ほの}つて仄^もに洩^もれ聞える。――

三十八

二人寝には楽だけれども、座敷が広いから、蚊帳は式台向きの二隅^{ふたすみ}と、障子と、襖^{ふすま}と、両方の鴨居^{かもい}の中途に釣手を掛けて、十畳敷のその三分の一ぐらいを――大庄屋の夜の調度――浅緑を垂れ、紅麻^{こうあさ}の裾^{すそ}長く曳^ひいて、縁側^{えんがわ}の方に枕を並べた。

ある

一日、朝から雨が降つて、昼も夜のようにであつたその夜中の事——と語り掛けて、明はすやすやと寝入つたのである。

いづれそれも、怪しき事件ことの一つであらう。……あわれ、

この少き人わかの、聞くがごとくんば連日の疲労つかれもさこそ、今宵

は友として我ここに在るがため、幾分の安心を得て現うつなく寝

入つたのであらう、と小次郎法師が思うにつけても、蚊帳越

に瞻みまもらるるは床の間を背後うしろにした灰白々とある行燈あんどう。

楽書らくがきの文字もないが、今にも畳を離れそうで、裾すそが伸びる

か、燈ともが出るか、蚊帳へ入つて来そうでならぬ。

そういえば、搔き立てもしないのに、明の寝顔も、また悪く明るい。

「貴下あなた、寝冷ねびえをしては不可いけません。」

寝苦しいか、白やかな胸を出して、鳩尾みぞおちへ踏落しているの

を、瘦やせた胸に障さわらないように、密そつと引掛ひつかけたが何にも知らず、まず可よかつた。——仁右衛門が見た御新姐ごしんぞのように、この手が触つて血を吐きながら、莞爾にっこりとしたらどうしよう。

そう思うと寝苦しい、何にも見まい、と目を塞ふさぐ、と塞ぐ後から、睫まぶたがぱちぱちと音がしそうに開いてしまうのは、心が冴さえて寝られぬのである。

搔卷かいまきを引被ひつかぶれば、袈ふすまの袖から襟かけて、大な洞穴おおきほらあなのように覚えて、足を曳ひいて、何やらずるずると引入れそうで不安に堪えぬ。

すぽりと脱いで、坊主天窓あたまをぬいと出したが、これはまた、ばあ、と云つてニタリと笑いそうで、自分の顔ながら気味の悪さ。

そこで屹ぎつとなつて、襟を合せて、枕を仕かえて、気を沈め

て、

「衆怨悉退散、」
しゅうおんしつたいさん

あおむ

と仰向けのまま呪すと、いくらか心が静まったと見えて、旅僧はつい、うとうととしたかと思うと、ぽたり、と何か枕許まくらもとへ来たのがある。

あまだれ

が、雨垂とも、血を吸膨れた蚊が一ツ倒れた音とも、まだ聞定めないで現うつふ二でいると、またぽたり……やがて、ぽたぽたと落ちたるが、今度は確たしかに頬にかかった。

やつと冷たいのが知れて、掌てのひらで撫なでると、冷りとする。身

震いして少し起きかけて、旅僧は恐る恐る燈の影に透すかしたが、幸さいわいに、血の点滴したたりではない。

さては雨漏りと思う時は、蚊帳を伝しずくつて雫するばかり、はらはらと降り灌そそぐ。

耳を澄ますと、屋根の上は大雨であるらしい。

浮世にあらぬ飯の宿にも、これほど侘^{わび}しいものはない。けれども、雨漏^{あまもり}にも旅馴^{たびな}れた僧は、押黙^{おやみ}つて小止を待とうと思つたが、ますます雪は繁^{はねあが}くなつて、搔卷^{しづき}の裾あたりは、びしよびしよ、刎^{はねあが}上^{がちよう}つて繁吹^{しづき}が立ちそう。

屋根で、鵝^{がちよう}鳥が鳴いた事さえあると聞く。家ごと霞川の底に沈んだのでなかうか。……トタンに額を打つて、鼻頭^{はなづら}に浸^{にじ}んだ、大粒なのに、むつくと起き、枕を取つて搔遣^{かいや}りながら、立膝で、じりりと寄つて、肩まで捲^{まく}れた寝衣^{ねまき}の袖を引伸ばしながら、

「もし、大分漏りますが、もし葉越さん。」

と呼んだが答えぬ。

目敏^{めざと}そうな人物が、と驚いて手を翳^{かざ}すと、薄^{すすき}の穂を揺^{ゆすぶ}るよ

うに、すやすやと呼吸がある。

「ああ、よく寝られた。」

と熟と顔を見ると、明の、眦の切れた睫毛の濃い、目の上に、キラキラとした清い玉は、同一雨垂れに濡れたか、あらず。……

来方は我にもあり、ただ御身は髪黒く、顔白きに、我は頭蒼く、面の黄なるのみ。同一世の孤児よ、と覚えずほうり落ちた法師自身の同情の涙の、明の夢に届いたのである。

四辺を見ると、この人目覚めぬも道理こそ。雨の雫の、糸のごとく乱れかかるのは、我が身体ばかりで、明の床には、夜をあさる蚤も居らぬ。

南無三宝、魔物の睡じや。

例の、その幻の雨とは悟つたものの、見す見すひやりとして濡るるのは、笠なしに山寺から豆腐買いに里へ遣^やられた、小僧の時より辛いので、堪^{たま}りかねて、蚊帳の裾を引被^{ひつかつ}いで出たが、さてどこを居所^{いどころ}とも定まらぬ一夜の宿。

消えなんとする旅籠屋^{はたごや}の行燈^{かんぽん}を、時雨の軒に便る心で。

僧^{とも}は燈火^{しび}の許^{もと}に膝行^{いざ}り寄つた。

寝衣^{ねまぎ}を見ると、どこも露ほども濡れてはおらぬ。まず頬の

あたりから腕を拭^ふこうとしたほどだったのに……もとより寝床に雨垂の音は無い。

その腕を長く、つき反らして擦^{さす}りながら、

「衆怨悉退散^{しゅうおんしつたいさん}。」

とまた念じて、静じつと心を沈めると、この功德か、蚊の聲が無くなつて、寂しんとして静まり返る。

また余りの静しずかさに、自分の身体からだが消えてしまひはせぬか、という懸念がし出して、押瞋おしづぶつた目を夢から覚めたように恍惚うつとりと、しかも円つぶらに開けて、真直まつすぐな燈心を視透みすかした時であつた。ひらりと映つて、行燈あんどうへ、中から透いて影がさしたのを、女の手ほどの大な蜘蛛おおぐも、と咄嗟とつさに首を縮すくめたが、あらず、非あらず、柱に触つて、やがて油壺あぶらつぼの前へこぼれたのは、木この葉であつた、青楓あおかへでの。

僧は思わず手で拾つた。がそのまさしく木の葉であるや、しからずや、確かめようとしたのか、どうか、それは渠かれにも分りはせぬ。

ト続いて、颯さつと影がさして、横繁吹よこしおきに乗つたようにさらり

と落ちる。

我にもあらず、またもやそれを拾った時、先の^{せん}のを、

「一枚、」

と思わず算^{かぞ}えた。

「二枚、」

とあとを数え果さず、三枚目のは、貝ほどの^{けやき}楓の葉で、ひらひらと^{ともしび}燈を掠^{かす}めて来た、影^{おおき}が大きい。

「三枚、」

と口の裡^{うち}で^{つぷや}呟くと、早や四枚目が、ばさばさ^さと行燈の紙に障^{さわ}った。

「四枚、五枚、六枚、七枚、」

と数える内に、拾い上げた膝の上は、早や隙間なく落葉に埋もるる。

空を仰ぐと、天井は底がなく、暗夜^{やみ}の深山^{みやま}にある心地。

おお、この森を峠にして、こんな晩、中空を越す通魔^{とおりま}が、魔王に、はたと捧ぐる、関所の通証券^{とおりてがた}であろうも知れぬ。膝を払って衝^つと立って、木の葉のはらはらと揺れるに連れて、ぶるぶると渠^{かれ}は身震いした。

「えへん！」

と揉潰^{もみつぶ}されたような掠^{かす}れた咳^{せき}して、何かに目を転じて、心移^{うつ}そうとしたが、風呂敷包の、御経を取出す間も遅し。さすがに心着いたのは、障子に四五枚、かりそめに貼^はった半紙である。

これはここへ来てからの、心覚えの童謡^{わらわうた}を、明が書留めて朝夕^{ちようせき}に且つ吟じ且つ詠^{なが}むるものだ、と宵に聞いた。

立ったままに寄って見ると、真先^{まつさき}に目に着いたのが濃い墨

で、

落葉一枚、

僧は更に悚然^{ぞつ}とした。

落葉一枚、

二枚、三枚、

十^{とお}とかさねて、

落葉の数も、

ついて落いた君の年、

君の年――

振返ると、まだそこに、掃掛けて廃^よしたように、蒼^{あお}きが黒く散々^{ちりぢり}である。

懐かしや、花の常夏^{とこなつ}、

霞川に影が流れた。

その倂おもかげや、倂あなたや――

紙を通して障子の彼方に、ほの白いその倂が……どうやら透すいて見えるようで、固くなった耳の底で、天の高さ、地の厚さを、あらん限り、深く、遙はるかに、星の座も、竜宮の燈ともも同一遠さ、と思う辺あたり、黄金こがねの鈴を振るごとく、ただ一声こえ、コロリン、と琴が響いた。

はつと半紙を見ると、瞳へチラリ。

コロリン！

と字が動いたよう。続けて――

琴の音が……………

と記してあつた。

客僧は思案して、心を落着け、衣紋えもんを直して、さて、中に

仏像があるので、床の間を借りて差置いた、荷物を今解き始めたが、深更ふるまいのこの挙動は、木曾街道ものどりの盜賊めく。

不浄よけきんらんの金欄きんらんの切きれにくるんだ、たけ三寸ばかり、黒塗くろぬりの小さな御厨子みずしを捧げ出して、袈裟けさを机に折り、その上へ。

元来もとこの座敷は、京もとこのみで、一間の床の間に傍かたわらに、高い袋

戸棚が附いて、傍かたえは直ぐに縁側の、戸棚の横が満月形なりに庭に

望んだ丸窓で、嵌込はめこみの戸を開けると、葉山繁山中空へ波をか

さねて見えるのが、今は焼けたが故郷ふるさとの家の、書院の構えに

そつくりで、懐なつかしいばかりでない。これもここで望のぞみの達せら

る兆あかしか、と床しい、と明が云つて、直ぐにこの戸棚を、卓子テエブル

擬まがいの机に使つて、旅硯たびすずりも据えてある。椅子がわりに脚榻きやたつを

置いて。……

周囲まわりが広いから、水差茶道具の類も乗せて置く。

そこで、この男の旅姿を見た時から、ちゃんと心づもりをしたそうしんせつで、深切な宰八爺じじいは、夜の具ものと一所に、机を背負しよつて来てくれたけれども、それは使わな^{かな}いで、床の間の隅に、埃ほこりは据えず差置いた。心に叶かなつて逗留とまりゆうもしようなら、用いて書見をなさいまし、と夜食の時に言ってくれた。

その机を、今ここへ。

御厨子を据えて、さてどこへ置直そうと四辺あたりを視みた時、蚊帳みこえの中で、三声みこえばかり、太く明いたが魘うなされた。が……此方こなたの胸が痛んだばかりで、揺起すまでもなく、幸さいわいにまた静しずかになった。障子を開けて、縁側は自分も通るし、一方は庭づたいに入つた口で、日頃はとにかく、別に今夜は何事もない。頻しきりに氣に

なるのは、大掃除の時のために、一枚はずれる仕掛けだとい
う、向うの天井の隅と、その下に開けた事のない隔ての襖ふすまの
合せ目である。

「わが仏守らせたまえ。」

と祈念なし、机を取つて、押お戴いたいて、屹きつと見て、其方そなたへ、と
座を立とうとする。

途端であつた。

「しばらく。」

ずしん、地じの底へ響く声がした。

明が呼んだか、と思う蚊帳うちの中で、また烈はげしく魘うなされるの
で、呼い吸きを詰めて、

「……………」

色を変える。

襖の陰で、

「客僧しばらく——唯今^{ただいま}それへ参るものがござる。往来を塞^{ふさ}ぐまい。押して通るは自在じゃが、仏像ゆえに遠慮をいたす。いや、御身^{おみ}に向うて、害を加うる仔細^{しさい}はない。」

ト見ると襖から承塵^{なげし}へかけた、雨じみの魍魎^{もうりょう}と、肩を並べて、その頭^{かしら}、鴨居^{かもい}を越した偉大の人物。眉太く、眼円^{まなこつぶら}に、鼻隆うして口の角^{けた}なるが、頬肉^{ほおじし}豊に、あっぱれの人品なり。生^きびらの帷子^{かたびら}に引手のごとき漆紋の着いたるに、白き襟をかさね、おなじ^{おなじ}一色の無地の袴^{はかま}、折目高に穿^はいたのが、襖一杯にぬつくと立つた。ゆき短^{みじか}な右の手に、畳んだままの扇を取つて、温顔に微笑を含み、動^{ゆる}ぎ出でつ、ともなく客僧の前へのつしと坐ると、氣に圧^おされた僧は、ひしと茶斑^{ちやまだら}の大牛に引敷^{ひっし}かれたる

心地がした。

はつと机に、突俯つっふそうとする胸を支えて、

「誰だ。」

と言った。

「六十余州、罷通まかりとおるものじゃ。」

「何と申す、何人なんびと……」

「到る処の悪左衛門、」

と扇子を構えて、

「唯今、秋谷に罷在まかりある、すなわち秋谷悪左衛門と申す。」

「悪………」

「悪は善悪の悪でござる。」

「おお、悪……魔、人間を呪のろうものか。」

「いや、人間をよけて通るものじゃ。清き光天にあり、夜鴉よがらす

の羽^はうらも輝き、瀬の鮎^{あゆ}の鱗^{うろこ}も光る。隈^{くま}なき月を見るにさえ、
 捨^{すて}小舟^{おぶね}の中にもせず、峰の堂の縁でもせぬ。夜半人跡の絶え
 たる処は、かえつて茅屋^{かやや}の屋根ではないか。
 しかるを、わざと人間どもが、迎え見て、損^{そこな}わるるは自業
 自得じや。」

四十一

「真^ま日^ひ中^{なか}に天下の往来を通る時も、人が来れば路を避ける。
 出^い会^{であ}えば傍^{わき}へ外れ、遣^{やり}過^すごして背^{うしろ}後^ごを参る。が、しばしば見
 返る者あれば、煩^{わづ}わしさに隠^おれ終^おせぬ、見て驚^{おど}くは其^そ奴^{やつ}の罪
 じや。」

いかに客僧、まだ拙^そ者^{がし}を疑^うわるるか。」

と莞爾^{かんじ}として、客僧の坊主頭を、やがて天井から瞰^{みおろ}下しつ
つ、

「かくてもなお、我等がこの宇宙の間に罷在^{まかりあ}るを怪^{あやし}まるるか。
うむ、疑^みいに睜^{みひら}られたな。睜^{みひら}いたその瞳も、直ちに瞬^{またた}く。

およそ天下に、夜^よを一目も寝ぬはあつても、瞬^{またた}をせぬ人間
は決してあるまい。悪左衛門をはじめ夥^な間一統、すなわちそ

の人間の瞬^{またた}く間を世界とする——瞬^{またた}くという一秒時には、日
輪の光によつて、御身^{おみ}等が顔容^{かおかたち}、衣服^{すべ}の一切、睫毛^{まつげ}までも写

し取らせて、御身等その生命の終る後、幾百年にも活^いけるが
ごとく伝えらるる長い時間のあるを知るか。石と樹と相打つ
て、火をほとばしらすも瞬^{またた}く間、またその消ゆるも瞬^{またた}く間、銃
丸の人を貫くも瞬^{またた}く間だ。

すべて一たびただ一人^{にん}の瞬^{またた}きする間に、水も流れ、風も吹

く、木の葉も青し、日も赤い。天下に何一つ消え失するものは無うして、ただその瞬間、その瞬く者にのみ消え失すると知らば、我等が世にあることを怪むまい。」

と悠然として打領ぎ、

「そこでじゃ、客僧。」

たといその者の、自から招く禍とは言え、月のたちまち雲に隠れて、世の暗くなるは怪まず、行燈の火の不意に消ゆるに喚き、天に星の飛ぶを訝らず、地に瓜の躍るに絶叫する者どもが、われら一類が為す業に怯かされて、その者、心を破り、気を傷け、身を損えば、おのずから引いて、我等修業の妨となり、従うて罪の障となつて、実は大に迷惑いたす。」

と、やや歎息をするようだったが、更めて、また言つた。

「時に、この邸には、当月はじめつ方から、別に逗留の客があ

る。おなじ同一境涯にある御仁ごじんじゃ。われら附添つけぞくつて眷属けんぞくども一同守護をいたすに、元来、人足ひとあしの絶えた空屋を求めて使たよつた処を、唯今眠りおる少年の、身にも命にも替かうる願ねがいあつて、身命を賭物かけものにして、推して草叢くさむらに足痕を留めた以来、とかく人出入騒々しく、かたがた妨げに相成るから、われら承つて片端から追払おっぱらうが、弱つたのはこの少年じゃ。

かおかたち顔容に似ぬその志の堅固さよ。ただお伽とぎめいた事のみ語つて、自からその愚おろかさを恥じて、客僧、御身にも話すまいが、や、この方実は、もそつと手酷てひどい試をやつた。

あるいは大磐石を胸に落し、我その上に蹈跨ふみまたがつて咽喉のどを緊しめ、五体に七筋の蛇を絡まとわし、牙きばある蜥蜴とかげに噛かませてまで呪のろうたが、頑として退かず、悠々と歌を唄うに、我が折れ果てた。よつて最後の試み、としてたつた今、少年これに人を殺させた

——すなわち殺された者は、客僧、御身^{おみ}じゃよ。」

と、じろじろと見るのである。

覚悟しながら戦^{おのの}いて、

「ここは、ここは、ここは、冥土^{めいど}か。」

と目ばかり働く、その顔を見て、でっぷりとした頬に笑を湛^{たた}え、くつくつ忍笑^{しのびわら}いして、

「いや、別条はない。が、ちょうどこの少年の、いまし魘^{うな}された時、客僧、何と、胸が痛かつたろう。」

ズキリと応^{こた}えて、

「おお、」

「すなわち少年が、御身に毒を飲ませたのだ。」

「……………」

「別でない。それぞれその戸袋に載^のつた朱泥^{しゅでい}の水差^{みずさし}、それに

汲くんだは井戸の水じゃが、久しい埋井うもれいじゃに因よつて、水の色が真蒼まつさおじゃ、まるで透通とうる草の汁よ。

客僧等が茶を参まゐつた、爺じいが汲くんで来た、あれは川水。その白濁しろにごりがまだしも、と他の者はそれを用もちいる、がこの少年は、前さきに猫の死骸しかいの流れたのを見たために、得飲えまずしてこの井戸のを仰おほぐ。

今も言う通りだ。殺さぬまでに現責うつづめに苦しめ呪のろうがゆえ、生命いのちを縮めては相成あひならぬで、毎夜少年の氣着かぬ間に、振袖ひしきおびに緋ひの扱し帯きした、面つらが狗いぬの、召使めいに持たせて、われら秘蔵こみぞりの濃緑のうろの酒を、瑠璃るり色の瑪瑙めのうの壺つぼから、回生きつ剤けとして、その水にしたたらして置くが習ならじや。」

「少年は味^{あじ}うて、天与の靈泉と舌鼓を打つておる。

我ら、いまし少年の魂に命じて、すなわちその酒を客僧に
勧め飲ましむる夢を見させたわ。（ただ一口試みられよ、爽^{さわやか}な
涼^{かんば}しい芳^{ためら}しい酒の味がする、）と云うに因つて、客僧、御身^{おんみ}は
なおさら猶^{ためら}予^{ほほえ}う、手が出ぬわ。」

とまた微笑^{ほほえ}み、

「毒味までしたれば、と少年は、ぐと飲み飲み、無理に勧め
る。さまでは、とうけて恐る恐る干すと、ややあつて、客僧、
御身^{くもん}は苦悶^{くもん}し、煩乱^{はんらん}し、七転八倒して黒き血のかたまりを吐
くじや。」

客僧は色真蒼^{まつさお}である。

「驚いて少年が介抱する。が、もう叶^{かな}わぬ、臨終という時、

（われは僧なり、身を殺して仁をなし得れば無上の本懷、君その素志を他に求めて、疾くこの恐しき魔所を遁れられよ。）と遺言する。これぞ、われらの詛じや。

蚊帳の中で、少年の魘されたは、この夢を見た時よ、なあ。これならば立退くであろう、と思うと、ああ、埒あかぬ。客僧、御身が仮に落入るのを見る、と涙を流して、共に死のうと決心した。

葛籠に秘め置く、守刀をキラリと引抜くまで、襖の蔭から見定めて、

（ああ、しばらく、）

と留めたは、さて、殺しては相済まぬ。

これによつて、われら守護する逗留客は、御自分の方から、この邸を開いて、もはや余所へ立退くじやが。

その以前、直々^{じきじき}に貴面を得て、客僧^{もやし}に申談^{しんたん}じたい儀がある
と謂^いわるる。

客は女性^{によしやう}でござるに因^よつて、一応^{それがし}拙者^{しやう}から申入^まれる。ため
にこれへ罷^{まかり}出^いた。

秋谷悪左衛門取次を致す、

と高らかに云^いつて、穩和^{おだやか}に、

「お逢^い下^さりようか、いかが、

と云^いつた。

僧は思^{おも}わず、

「は、」と答^{こた}える。

声も終^はらず、小山のごとく膝^{ひざ}を揺^ゆげ、向^むけ直^{ただ}したと見^みると、

「ござらつしやい！」

破鐘^{わがね}のごときその大音^{おおおん}、哄^{どつ}と響^{ひび}いた。目^めくるめいて、魂^{たま}遠^{とほ}

くなるほどに、大魔の形体ぎようたい、片隅の暗がりへ吸込すいこまれたように
すすと退いたの、が遙はるかに小さく、およそ螢の火ばかりになつ
て、しかもその衣きぬの色も、袴はかまの色も、顔の色も、頭かしらの毛そうがみの総髪
も、鮮麗あざやかになお目に映る。

「御免遊ばせ。」

向うから襖一枚、颯さつと蒼あおく色が変わると、雨浸あまじみの鬼の絵の輪
郭を、乱れたままの輪に残して、ほんのり桃色がその上に浮
いて出た。

ト見ると、房々とある艶つややかな黒髪を、耳許みみもと白く梳くしけずつて、
櫛くし巻まきにすなおに結んだ、顔を俯うつむ向けに、撫肩なでがたの、細く袖を引合
わせて、胸を抱いたが、衣紋えもん白く、空色の長襦ながじゆばん袷とぎいろに、朱鷺色の
無地の羅うすものを襲かさねて、草の葉に露の玉と散った、浅緑の帯、薄
き腰、弱々と糸の艶に光を帯びて、乳ちのあたり、肩のあたり、

その明りに、朱鷺色が、浅葱あさぎが透き、膚はだの雪も幽かすかに透く。

黒髪かけて、襟かけて、月の雫しずくがかかったような、裾すそは捌さばけ

ず、しつとりと爪尖つまさきき軽く、ものの居て腰を捧げて進むるご

とく、底の知れない座敷をうしろに、果はてなき夜の暗さを引い

たが、歩ある行くともなく立寄つて、客僧に近寄る時、いつの間

にか襖が開くと、左右に雪洞ぼんぼりが二つ並んで、敷居際に差向つ

て、女の膝ばかりが控えて見える。そのいずれかが狗いぬの顔、

と思いをめぐらす暇もない。

僧は前たたずにゐんだのを差覗さしのぞくように一目見て、

「わッ、」

とばかりに平伏ひれふした。実にこそその顔かんばせは、爛々たる銀しろがねの眼まなこ

一なら双まなじりび、眦くまに紫の隈くま暗く、頬骨のこけた頤おとがい蒼味がかり、浅葱

に窩くぼんだ唇裂けて、鉄漿かね着けた口、柘榴ざくろの舌、耳の根には針

の^とごとき鋭^きき牙^ばを嚙^かんでいたのである。

四十三

「おお、自分の顔を隠したさ。貴僧^{あなた}を威^{おど}す心ではない、戸外^{そと}へ出ます支度のまま……まあ、お恥かしい。」

と、横へ取ったは白鬼^{はつき}の面。端麗^{はつぎ}にして威厳あり、眉美しく、目の優しき、その顔^{かんばせ}を差俯^{さしうつむ}向け、しとやかに手を支^ついた。

「は、は、はじめまして、」

と、しどろになつて会釈^{おもて}すると、面^{おもて}を上げた寂^{さみ}しい頬^ほに、唇^{くち}紅^{あこ}う莞爾^{にっこり}して、

「前刻^{さつき}、憚^{はばかり}へいらつしやいます、廊下^{さつき}でお目に懸^かりましたよ。」
客僧^{きやくそう}も、今はなかなかに胴据^{すわ}りぬ。

「貴女はどなたでございます。」
あなた

と尋ねたが、その時はほぼその誰なるかを知っているよう
な気がしたのである。

美女は棲を深う居直つて、蚊帳を透して打傾く。
たおやめ つま

萌黄が迫つて、その衣の色を薄く包んだ。
もえぎ きぬ

「この方の、母さんのお知己、明さんとも、お友達……」
おつか

と口を結んだが愁を帯びた。
うれい

此方は、じりじりと膝を向けて、
こなた

「ああ、貴女が、」

「あの、それに就きまして、貴僧にお願いがございしますが、ど
うぞお聞き下さいまし。」
あなた

とまた蚊帳越に打視め、
うちなが

「最愛しい、沢山お寢れ遊ばした。罪も報もない方が、こ
いと たんと やつ むくい

んなに艱難^{かんなんしんく}辛苦して、命に懸けても唄が聞きたいとおつしやるのも、母^{おつか}さんの恋しさゆえ。

その唄を聞こうと聞こうと、思いなさいます心から、この頃では身も世も忘れて、まあ、私を懷^{なつか}しがって、迷って恋におなりなすつた。

その唄は稚^{おさな}い時、この方の母さんから、口移しに教^{おそ}わつて、私は今も、覚えている。

こうまで、お憧^{こが}れなさるもの、ちよつと一目お目にかかつて、お聞かせ申^{もおし}とうござんすけれど、今顔をお見せ申しますと、お慕いなさいます御心から、前後も忘れて夢見るように、袖^{から}に搦^{すが}んで手に縋^{すが}り、胸に額を押当てて、母よ、姉よ、とおつしやいますもの。

どうして貴僧^{あなた}、摺^{すりぬ}抜けられよう、突離^{おと}されよう、振切^おられ

ましょう、私は引寄せます、抱だきし緊めます。

と血を分けぬ、男と女は、天にも地にも許さぬ掟。おきて

私たちには自由自在——どの道浮世に背いた身体が、それからだでは外ほかに願ほいのある、私の願の邪魔になります。よしそれとでも、棄身すてみの私、ただ最惜いとおしさ、可愛さに、気の狂い、心の乱れるに随まかせましても、覚悟の上なら私一人、自分の身は厭いといはしませぬ。

厭わぬけれど……明さんがそうすると、私たちと同一おなじような身の上になりますもの……

それはもう、この頃のお心では、明さんは本望らしい——
本望らしい、」

とさも懸想けそうしたらしく胸を抱いたが、鼻筋白く打背いて、
「あれあれ御覧なさいまし。こう言う中うちにも、明さんの母おつかさ

んが、花の梢こすえと見紛みまがうばかり、雲間を漏れる高樓たかどのの、虹にじの欄干てすりを乗出して、叱りも睨にらみも遊ばさず、児この可愛さに、鬼とも言わず、私を拝んでいなさいます。お美しい、お優しい、あの御顔を見ましては、恋の血汐ちしおは葉に染めても、秋のあの字も、明さんの名に憚はばかつて声には出ませぬ。

一言も交わさずに、ただ御顔を見たばかりでさえ、最愛いとあしさに覚悟も弱る。私は夫のござんす身体からだ。他ひとの妻でありながらも、母さんをお慕い遊ばす、そのお心の優しさが、身に染む時は、恋となり、不義となり、罪となる。

実の産うみの母御でさえ、一旦この世を去られし上は——幻にも姿を見せ、乳ちを吞ませたく添寝もしたい——我が児こ最惜いととしむ心さえ、天上では恋となる、その忌憚はばかりで、御遠慮遊ばす。

まして私は他人の事。

余計な御苦勞かけるのが御不便ごふびんさ。決して私は明さんに、

在あり所を知らせず隠れていたのに、つい膝許ひざもとの稚おさないものが、粗

相てまりで手毬を流したのが悪縁となりました。

彼方かなたも私も身を苦しめ、心を傷いためておりましたが、お生命いのち

の危あやういまでも、ここをおたち遊ばさぬゆえ、私わきへ参りま
す。

あんまりお心が可傷いじらしい、さまでに思召すその毬唄は、そ

の内時節が参りますと、自然にお耳へ入りましょう！

それは今、私がこの邸を退のきますと、もう隅々まで家中が
明あかるくなる。明さんも思い直して、またここを出て旅行たび立ちを
なさいます。

早や今でも沙汰さたをする、この邸の不思議な事が、界隈かいわいへ拡
がりますと、——近い処の、別荘にあの、お一方……」

四十四

「^{やまい}病の後の保養に来ておいでなさいます、それはそれは美しい、^{よそ}余所の婦人が、^{おんな}気軽な腰元の勧めるまま、^{つれづれ}徒然の慰みに、あの宰八を内証で呼んで、（鶴谷の邸の妖怪変化は、^{みんな}皆私が手伝いの人と一所に、^{うさは}憂晴らしにしたいはずら^{あそび}遊戯、聞けば、怪我人も^{たんと}沢山出来、嘉吉とやら気が違つたのもあるそうな、ついに心ない、^{みんな}気の毒な、皆の手当をよくするように。……

と^{しろがねこがね}白銀黄金を^{たんと}沢山授ける。

さあ、この事が世に聞えて、^{うわさ}ぱつと風説の^{たち}立ますため、病人は心^{ひつた}が引立ち、^{のが}気の狂つたのも安心して治りますが、免れられぬ因縁で、^{おくがた}その令室の夫というが、^{たび}旅行さきの海から帰つ

て、その風聞を耳にしますと——これが世にも恐ろしい、嫉妬深い男でござんす。——

その変化沙汰へんげざたのある間、そこに籠こもつた、という旅の少年。……

この明さんと、御自分の令室おくがたが、てつきり不義に極きわまつた、と最早その時は言訳立たず。鶴谷の本宅から買い受けて、そしてこの空邸へ、その令室をとじ籠こめましょう。

あなた
貴僧。

その美しい令室おくがたが、人に羞はじ、世に恥じて、一室処ひとまどころを閉切とじきつて、自分を暗夜やみに封じ籠めます。

そして、日が経たつに従うて、見もせず聞きもせぬけれど、浮名うきなが立つて濡衣着ぬれぎぬた、その明さんが何となく、慕わしく、懐はてかしく、果は恋あこがしく、憧憬あこがれる。切ない思い、激しい恋は、今、私の心、また明さんの、毬唄聞こうと狂うばかりの、そ

おもい おなじ
の思と同一事。

一歳か、二歳か、三歳ふたとせの後か、明さんは、ひととせまたも国々みとせを廻めぐ

り、廻めぐつて、唄は聞かずに、この里へ廻めぐつて来て、空家懷なつかし、
と思ひましよう。

そうなる時には、令室おくがたの、恋の染まつた靈魂たましいが、五色しきかがり

の手毬となつて、霞川に流れもしよう。明さんが、思ひの丈

を吐つく息は、冷たき煙たちと立のぼつて、中空の月も隠れましよう。

う。二人の情なさけの火が重かさなり、白き炎の花となつて、襖障子ふすましようじも燃

えましよう。日、月でもなし、星でもなし、灯ともしびでもない明あかりに、

やがて顔を合わせましよう。

邸は世界やみの暗だのに。……この十畳は暗いのに。……

明さんの迷すつた目には、煤すすも香を吐く花かと映り、蜘蛛の

巣めいこうは名香かおりの薫なびが靡なびく、と心時めき、この世の一切すべてを一室ひとまに縮

めて、そして、海よりもなお広い、金銀珠玉の御殿とも、宮とも見えて、おくがた令室を一目見ると、唄の女神と思ひ崇めて、ひざまず跪き、伏拝む。

長く冷たき黒髪は、玉の緒を揺る琴の糸の肩に懸つて響くよう、たがい互の口へ出ぬ声は、はだ膚に波立つ血汐となつて、聞こえぬ耳に調を通わす、かすか幽に触る手と手の指は、五ツと五ツと打合つて、水晶の玉の擦れる音、わなな戦く裳と、もすそ震える膝は、ひざ漂う雲に乗る心地。

ああこれこそ、我が母君……とすが縋り寄れば、乳房に重く、胸にかろ軽く、手に柔かく腕にかいな撓く、女は我を忘れて、抱く——
わがこ我児危い、目盲いたか。罪に落つる谷底の孤家の灯とも辿れよ。と実の母君の太空から、指さしたまう星の光は、いなくま電となつて壁にひら閃めき、分れよ、退けよ、とおつしやる声は、と

どろに棟に鳴渡り、涙は降つて雨となる、情の露は樹に灌ぎ、石に灌ぎ、草さえ受けて、暁の旭の影には瑠璃、紺青、紅の雫ともなるものを。

罪の世の御二人には、ただ可恐しく、凄じさに、かえつて一層、ひしひしと身を寄せる。

そのあわれさに堪えかねて、今ほども申しました、児を思ふさえ恋となる、天上の規を越えて、掟を破つて、母君が、雲の上の高楼の、玉の欄干にさしかわす、桂の枝を引寄せて、それに縋つて御殿の外へ。

空に浮んだおからだが、下界から見る月の中から、この世へ下りる間には、雲が倒に百千万千、一億万丈の滝となつて、ただどうどうと底知れぬ下界の霄へ落ちてゐる。あの、その上を、ただ一条、霞のような御裳でも、撓に揺れる一枝の桂

をたよりになさる危あぶなさ。

じようろう

おともだちの上臈ねたちが、ふと一人見着けると、にわか
天楽ねの音を留とどめて、はらはらと立たちかかつて、上へ桂を繰り上
げる。引留められて、御姿が、またもとの、月の前へ、薄色
のお召物で、笄こうがいがキラキラと、星に映つて見えましよう。

座敷で暗やみから不意にそれを。

明さんは、手を取合つたは仇あだ

し婦おんな、と気が着くと、襖ふすまも壁も、大紅蓮。

跪居ついいる暈は針の筵むしろ。

袖くちなわには蛇、膝には蜥蜴とかけ、目の前見る地獄の状に、五体はたち

まあたり

さま

まち氷となつて、慄然ぞっとして身を退ひきましよう。が、もうそ

の時は婦人おんなの一念、大鉄槌てつづいで碎かれても、引寄せた手を離し

ましようか。

胸おもいの思は火となつて、上手が書いた金銀ぢらしの錦絵にしきえを、

炎かぎに翳おもてして見るような、面かっも赫と、胡粉ごふんに注いだ臙脂えんじの目許めもと

に、紅の涙を落すを見れば、またこの恋も棄てられず。恐怖おそれと、恥羞はじに震う身は、人膚ひとはだの温かさ、唇の燃ゆるさえ、清く涼しい月の前の母君の有様に、懐なつかしさが劣らずなつて、振切りもせず、また猶ためら予う。

思余つて天上で、せめてこの声きこえよと、下界の唄をお唄いの、母君の心を推量おしはかつて、多勢の上臈たちも、妙なる声をお合せある——唄はその時聞えましよう。明さんが望のぞみの唄は、その自然の感応で、胸へ響いて、聞えましよう。」

と、神々しいまで面正おもてしく。……

僧は合掌して聞くのであった。

そして、その人、その時、はた明を待つまでもない、この美人たおやめの手、一たび我に触れなば、立処たちどころにその唄を聞き得るであらうと思つた。

四十五

たおやめ あらた
美人は更めて、

「貴僧あなた、この事を、ただ貴僧の胸ばかりに、よくお留め遊ばして、おっしゃつてはなりません。これは露ほども明かさずに、今の処あそこ、明さんを、よしなに慰めて上げて下さいまし。

日頃のお苦くるみに疲れてか、まあ、すやすやとよく寝て、」

と、するすると寄つた、姿が崩れて、ハタと両手を畳につくと、麻の薰かおりがはつとして、肩に萌黄もえぎの姿つめたく、薄紅うすくれなひが布目を透いて、

あき
「明ちゃん……」

と崩るるごとく、片頬かたほを横に接つけんとしたが、屹ぎっと立退たちひい

て、袖を合せた。

僧を見る目に涙が宿つて、

「それではお暇いとまいたしましょう。稚おさない事を、貴僧あなたにはお恥か

しいが、明さんに一式のお愛相あいそに、手毬について見せましょ

う、あの……」

と掛けた声の下。雪洞ぼんぼりの真中まんなかを、蝶々のように衝つと抜けて、

きりかむろ うさぎ

切禿きりかむろで兎の顔した、女めの童わらわが、袖に載のせて捧げて来た。手毬

を取つて、美女たおやめは、掌たなそこの白きが中に、魔界はしかりや、紅梅

の大つばみなる荅かいなと搔撫たふでながら、袂たもとのさきを白齒しらはで含むと、ふ

りが、はらりと襷たすきにかかる。

ろろ

臍へらたけた笑えみ、恍惚うつとりして、

きまり

「まあ、私ばかり極きまりが悪い、皆さんも来ておつきでないか。」

蚊帳ききようをはらはら取巻いたは、桔梗ききよう刈萱かりかや、美うつくしや、萩女はぎおみなえし郎花、

優しや、鈴虫、松虫の——声々に、

(向うの小沢に蛇が立つて、

八幡長者のおと女、

よくも立ったり、企んだり、

手には二本の珠を持ち、

足には黄金のくつを穿き……)

壁も襖も、もみじした、座敷はさながら手毬の錦——落ちた

木の葉も、ぱらぱらと、行燈を繞つて操る紅。中を膝つて雪

の散るのは、幾つとも知れぬ女の手と手。その手先が、心な

しにちよいちよい触ると、僧の手首が自然はたはたと躍上つ

た。

(京へのぼせて狂言させて、

寺へのぼせて 手習させて、

寺の和尚が道楽和尚で、

高い縁から突落されて、

と衝と投げ上げて、トンと落して、高くついた。

待てよ。ふるさと古郷の涅槃会には、ねはんえ膚に抱き、はだ袂に捧げて、町方

の娘たち、一人が三ツ二ツ手毬を携え、同じように着飾つて、

山寺へ来て突競つきくらを戯れる習慣ならいがある。少い男は憚はばかつて、鐘撞かねつき

堂から覗のぞきつつその遊戯あそびに見惚みとれたが……巨刹おおでらの黄昏たそがれに、大

勢の娘の姿が、遥はるかに壁に掛かつた、極彩色の涅槃ねはんの絵と、同一状おなじさま

に、一幅の中へ縮まつた景色の時、本堂の背後うしろ、位牌堂いはいどうの暗い

昼廊下から、一人水際立うつくしつた妖艶うつくしいのが、突きはせず、手鞠を

袖に抱いたまま、すらすらと出て、卵塔場を隔きてた几帳窓きちようまどの

前を通る、と見ると、もう誰の蔭ひとかずになつたか人数ひとかずに紛れてし

まった。それだ、この人は、いや、その時と寸分違わぬ――

と僧は心に——大方明も鐘撞堂から、この状を、今視めて
いる夢であろう。何かの拍子に、その鐘が鳴ると目が覚めよ
う、と思う内……

身動ぎに、この美女の鬢の後れ毛、さらさらと頬に掛ると、
その影やらん薄曇りに、目ぶちのあたりに寂しくなりぬ。

（筭落し小枕落し……）

と綾に取る、と根が揺らいで、さつと黒髪が肩に乱る。
みだれし風采恥かしや、早これまでと思うらん。落した手
毬を、女の童の、拾つて抱くのも顧みず、よろよろと立か
つた、蚊帳に姿を引寄せられ、棲のこぼれた立姿。

屋の棟熟と打仰いで、

「あれ、あれ、雲が乱るる。——花の中に、母君の胸が揺ぐ。
おお、最惜しの御子に、乳飲まそうと思召すか。それとも、私

が挙動ふるまいに、心騒ぎのせらるるか。客僧方あなたがたには見えまいが、地じの底に棲すむものは、昼も星の光を仰ぐ。御姿かたちは、よく見えても、かしこは天宮、ここは地獄、言ことばといつては交わされない。

美しき夢見るお方、」

あれ、かしこに母君まし在ますぞや。愛惜あいじやくの一念のみは、魔界

の塵ちりにも曇りはせねば、我が袖、鏡と御覽ぜよ。今、この瞳

に宿しずくれる雫は、母君の御情おんなさけの露を取次ぎ参らする、乳ちの滴したたりぞ、

と袂たもとを傾け、差寄せて、差俯さしうつむき、はらはらと落涙して、

「まあ、稚児おさないの昔にかえつて、乳を求めて、……あれ、目を覚す……」

さらば、さらば、御僧おんそう。この人夢の覚めぬ間に、と片手をついて、わかれの会釈。

ト玄関から、庭前^{にわさき}かけて、わやわやざわざわ、物音、人声。
目を擦り^{こす}、目を睜^{みは}り、目を拭^{ぬぐ}いいる客僧に立別れて、やが
て静々^{しずしず}——狗^{いぬ}の顔した腰元が、ばたばたと前^{さき}へ立ち、炎燃ゆ、
と緋^ひのちらめく袖口で音なく開けた——雨戸に鏤^{ちりば}む星の首途^{かどいで}。
十四日の月の有明に、片頬を見せた風采^{とりなり}は、薄雲の下に朝顔
の荅^{つばみ}の解けた風情して、うしろ髪、打揺^{うちゆら}ぎ、一たび蚊帳を振
返る。

「やあ、」

と、蚊帳を払って、明が飜然^{ひらり}と飛んで縋^{すが}った。——

袂を支える旅僧と、押揉^{おしも}む二人の目の前^{さき}へ、この時ずか、と
顕^{あら}われた偉人の姿、靄^{もや}の中なる林のごとく、黄なる帷子^{かたびら}、幕
を蔽^{おほ}うて、廂^{ひさし}へかけて仁王立^{におうだち}、大音に、

「通るぞう。」

と一喝した。

「はっ、」

と云うと、奇異なのは、宵に宰八が一杯——汲くんで来て、
——縁はしの端近ぢかに置いた手桶ておけが、ひよい、と倒斛斗さかとんぼに引ひくりか
えると、ざぶりと水を溢こぼしながら、アノ手でつかつかと歩行ある
き出した。

その後を水が走つて、早や東雲しのめの雲白く、煙へびのような潦さつ、
庭の草を流るる中に、月が沈んで舟となり、舳へびを颯さつと乗上げ
て、白粉おしろいの花越たおやめしに、すらすらと漕こいで通る。大魔の袖や帆
となりけん、美女は船の几帳きちようにかくれて、

(ここはどこの細道じゃ、

細道じゃ、

天神様の細道じゃ、

細道じゃ、

少し通して下さんせ……)

最^{いとせ}切^{なつか}めて懐しく聞ゆ、とすれば、樹^{こだち}立^{しげり}の茂^{どつ}に哄と風、木の

葉、緑の瀬を早み……横雲が、あの、横雲が。

明治四十一年（一九〇八）年一月

後註

一 「、」は天地左右中央

二 「引」は小書き

三 ルビの「うわづみ」は底本では「うわずみ」

四 「婆」は底本では「姿」

五 底本では4字下げ

六 「おお」は底本では「おお」

七 「だが」はママ

八 「ふらふら」は底本では「ふろふら」

九 底本では冒頭に「」なし

一〇 「考えたぞ」は底本では「考えだぞ」

一一 「裾」は底本では「据」

一二 ルビの「うつつ」は底本では「うつ」

一三 「燈火」は底本では「灯燈」

一四 「のぼせて」は底本では「のぼせた」

底本：「泉鏡花集成 5」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成 8）年 2 月 22 日第 1 刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十一卷」岩波書店

1941（昭和 16）年 8 月 15 日第 1 刷発行

※疑問点の確認にあたっては、底本の親本を参照しました。

※「それとも鼠だが」の「だが」は、底本の親本でもママですが、岩波文庫版では「だか」となっています。

入力：門田裕志

校正：高柳典子

2003 年 8 月 28 日作成

2006 年 5 月 20 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。